

御津町埋蔵文化財発掘調査報告 8

保存用 10

# 平岡廐遺跡

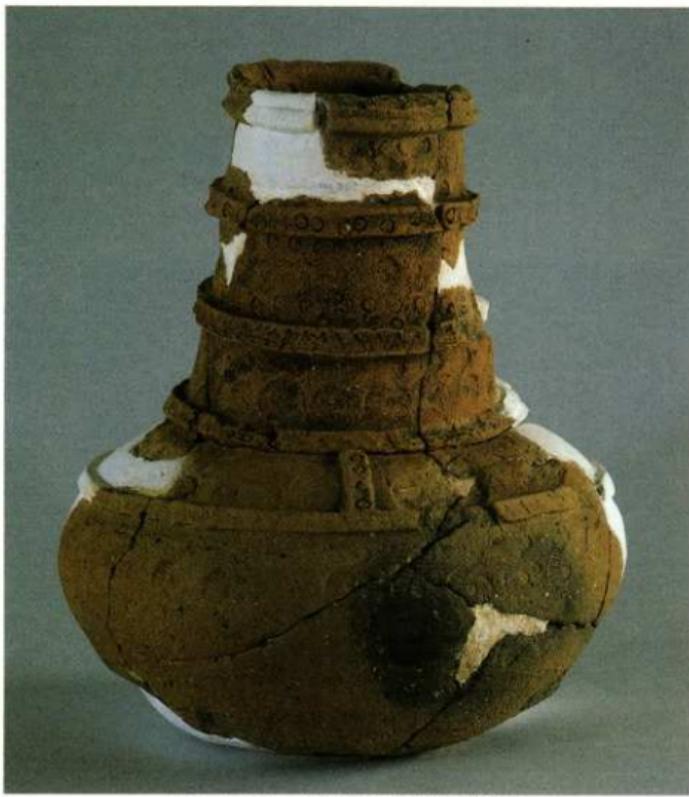
I

1992年8月

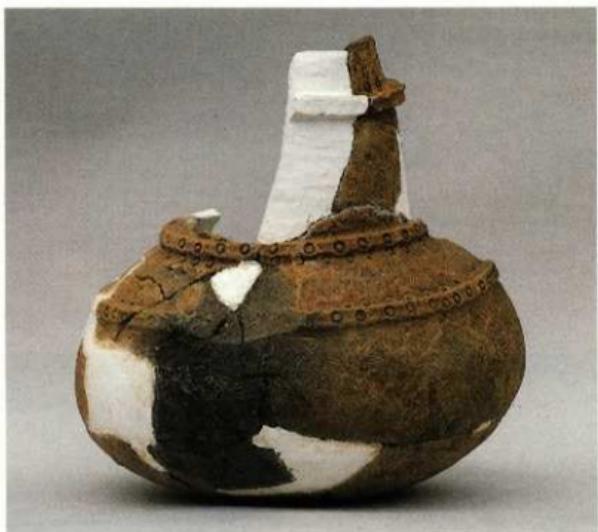
御津町教育委員会

岡山県御津町教育委員会

カラー図版1  
SD04遺物出土状況（北東から）



カラー図版2 SD04出土壺形土器（355）



カラー図版3 SD03出土壺形土器 (292)



カラー図版4 SD03出土壺形土器 (293)



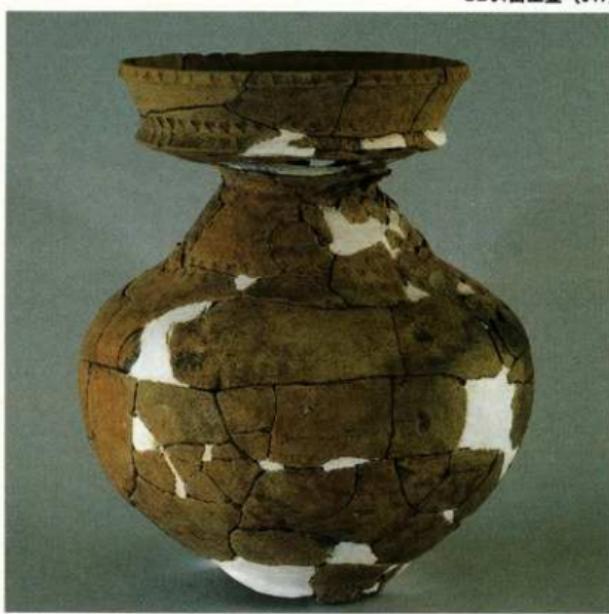
カラー図版 5 SD04出土器台 (354)

カラー図版 6 SD04出土器台 (351)





カラー図版7  
SD03出土直口壺（285）



カラー図版8  
SD04出土壺（347）

# はじめに

御津町大字平岡西は町村合併前は赤磐郡五城村大字平岡西であった。本年、町制40周年を迎えた現在「平岡西遺跡」の調査報告書を発刊することは誠に意義深いことである。

平岡西遺跡は、圃場整備により発掘調査したもので、縄文時代から弥生時代後期にかけての集落遺跡から鳥形紋様の人った壺形土器が出土し、ほぼ完全な形まで復元できたことは関係者にとって大変喜ばしいことである。

ここに、調査にあたった関係者をはじめとして地元の方々のご協力に対し深甚の謝意を表するとともに、本書が文化財保護の資料としてひろく活用されますようお願い申し上げます。

1992年8月31日

御津町教育委員会

教育長 宮 本 久 雄

題字は宮本久雄教育長による。

# 例 言

- 1 本書は、県営圃場整備事業五城北地区に伴い、岡山県岡山地方振興局の委託を受け、御津町教育委員会が実施した「平岡西遺跡」の発掘調査報告書のⅠである。
- 2 遺跡は岡山県御津郡御津町大字平岡西734番地ほかに所在する。
- 3 現地での発掘調査は1988年9月26日から11月5日まで実施し、その後、遺物整理、本書の作成を行なった。
- 4 調査は下記の体制で実施した。

御津町教育委員会 教育長 宮本 久雄(1989年3月まで教育次長兼務)  
教育次長 五藤 始(1989年4月より)  
主幹 頼定 節夫(1989年3月まで)  
同 海野 仁志(1991年3月まで)  
同 大庭 次郎(1991年4月より)  
社会教育主査 宇野 尚憲(事務担当)  
書記 長谷川一英(調査担当)

- 5 調査、本書の作成にあたっては、春成秀爾(国立歴史民俗博物館教授)、高橋 譲(岡山県立博物館副館長)、大阪府立弥生文化博物館、財団法人大阪文化財センター、岡山県教育委員会文化課、岡山県古代吉備文化財センター、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、岡山県岡山地方振興局農林事業部耕地第2課、岡山県農地開発公社、浦上建設株式会社、御津町役場農業土木課・産業課、地元平岡西地区の方々、御津町文化財保護委員会等からご指導、ご援助を賜った。また、別記の作業員の方々の協力も得た。

記して感謝の意を表わします。

- 6 出土遺物、実測図、写真等は御津町教育委員会で保管している。
- 7 本書の執筆、編集は長谷川があたった。

## 凡 例

- 1 遺構実測図等のレベルはすべてT. P. (東京湾平均海水面高) である。  
方位は図1~4が真北、他が磁北である。
- 2 遺物実測図の断面が白色のものは縄文土器、弥生土器、土師器を、黒色のものは須恵器を、トーンのものは瓦器を表している。
- 3 実測図等の遺跡名は平岡西(HiRaOKa-NiShi)とし、その後に調査年度を示した。また、遺跡内を既設の道路、水路により図3のように3区に分けた。地区名は調査年度の後に示した。従って、1区は平岡西88、2区は平岡西88-2、3区は平岡西88-3となる。  
また、遺物には、遺物の取り上げ単位ごとに、取り上げ年月日を優先して、01から登録番号を付与した。遺物の出土地点、出土年月日等は別途作成した遺物台帳に記録し、遺物への注記は「H R N88-地区-登録番号」のみに止めた。
- 4 以上により、本書の調査地は1区となり、略号は平岡西88、または、H R N88-登録番号となる。
- 4 遺物の取り上げ、本書の記述に際し、遺構名は以下の略号を用いた。

S B……竪穴住居

S D……溝、流路

S K……土壤

S P……柱穴、ピット

各遺構種別ごとに、検出順に01から遺構番号を付与し、遺構名の後に示した。そのため、遺構番号が入り乱れている部分もあるが、本書においては、あえて整理せず、調査時に付与した番号をそのまま用いた。

## 調 査 参 加 者

卯善常雄・宇野治郎・宇野延夫・江田英男・古家悦子・桜井三枝子・白波瀬信良・田村美智子・友森富貴子・花房義質・松尾千鶴子・松田 正・安宗貞男・横山甲子野・横山友義・吉行久枝

# 目 次

## 巻頭カラー図版

はじめに	御津町教育委員会 宮本 久雄
例 言	
凡 例	
I 地理的・歴史的環境	1
II 調査に至る経緯と経過	
1 調査に至る経緯	5
2 調査日誌	8
III 調査成果	
1 はじめに	9
2 基本層序	9
3 第 1 層	9
4 第 1 遺構面	15
5 第 2 層	16
6 第 2 遺構面	21
IV まとめ	
1 遺構について	72
2 スタンプ文について	74
3 土器絵画について	77

# 挿 図 目 次

図 1 御津町位置図	1
図 2 調査地周辺遺跡分布図	4
図 3 平岡西遺跡推定範囲 地区割図	6
図 4 調査地位置図	7
図 5 調査地土層断面実測図	11-12
図 6 第 1 層出土遺物実測図	10

図7 第1遺構面平面図	13~14
図8 第1遺構面 遺構出土遺物実測図	16
図9 第2層出土遺物実測図(1)	18
図10 第2層出土遺物実測図(2)	19
図11 第2層出土遺物実測図(3)	20
図12 第2遺構面平面図(1)	22
図13 第2遺構面 ピット出土遺物実測図	23
図14 第2遺構面平面図(2)	25~26
図15 S K07遺物出土状況平面図	27~28
図16 S K07出土遺物実測図(1)	30
図17 S K07出土遺物実測図(2)	31
図18 S B01平面図	33~34
図19 S B01断面図(1)	35~36
図20 S B01断面図(2)	37
図21 S B01変遷図	32
図22 S B01出土遺物実測図	37
図23 S B02炭化材検出状況平面図	38
図24 S B02平・断面図 出土遺物実測図	39
図25 S D01出土遺物実測図	40
図26 S D02出土遺物実測図(1)	43
図27 S D02出土遺物実測図(2)	44
図28 S D03土層断面図	45
図29 S D03遺物出土状況平・断面図	49
図30 S D03出土遺物実測図(1)	50
図31 S D03出土遺物実測図(2)	51
図32 S D03出土遺物実測図(3)	52
図33 S D03出土遺物実測図(4)	53
図34 S D04土層断面図	54
図35 S D04遺物出土状況平・断面図	55~56
図36 S D04出土遺物実測図(1)	62
図37 S D04出土遺物実測図(2)	63
図38 S D04出土遺物実測図(3)	64

図39	S D04出土遺物実測図（4）	65～66
図40	S D04出土遺物実測図（5）	67
図41	S D04出土遺物実測図（6）	69
図42	S D05土層断面図　出土遺物実測図	69
図43	S D06土層断面図　出土遺物実測図	70
図44	S D03・04模式図	73
図45	スタンプ文模式図	74
図46	鳥形スタンプ文集成図	75
図47	特殊器台形土器文様図	76
図48	塚風呂遺跡出土壺形土器実測図	77
図49	西江遺跡出土特殊器台形土器文様展開図	78

## 図版目次

カラー図版 1	S D04遺物出土状況（北東から）	
カラー図版 2	S D04出土壺形土器（355）	
カラー図版 3	S D03出土壺形土器（292）	
カラー図版 4	S D03出土壺形土器（293）	
カラー図版 5	S D04出土器台（354）	
カラー図版 6	S D04出土器台（351）	
カラー図版 7	S D03出土直口壺（285）	
カラー図版 8	S D04出土壺（347）	
図 版 1	平岡西遺跡周辺（1980年9月撮影）	81
図 版 2	調査地遠景（南西から）	82
図 版 3	調査地近景（南から）	82
図 版 4	第1遺構面（北東から）	83
図 版 5	第1遺構面（西から）	83
図 版 6	第2遺構面（北東から）	84
図 版 7	第2遺構面（西から）	84
図 版 8	S K07遺物出土状況（東から）	85
図 版 9	S B01完掘状況（北から）	85

図	版10 S B02炭化材検出状況（南東から）	86
図	版11 S B02完掘状況（南東から）	86
図	版12 S D03遺物出土状況（南から）	87
図	版13 S D03完掘状況（北西から）	87
図	版14 S D04遺物出土状況（北東から）	88
図	版15 S D04遺物出土状況（西から）	88
図	版16 S D04遺物出土状況（北から）	89
図	版17 S D04遺物出土状況（西から）	89
図	版18 S D04遺物出土状況（東から）	89
図	版19 S D04遺物出土状況（南から）	89
図	版20 S D04完掘状況（北東から）	89
図	版21 出土遺物（1）	90
図	版22 出土遺物（2）	91
図	版23 出土遺物（3）	92
図	版24 出土遺物（4）	93
図	版25 出土遺物（5）	94
図	版26 出土遺物（6）	95
図	版27 出土遺物（7）	96



# I 地理的・歴史的環境

岡山県には3本の主要河川が南北に貫流している。そのうち、県土のはば中央を南流しているのが旭川である。中国山地に端を発し、児島湾まで全長142kmの1級河川である。御津町はその中流域に位置している。1953年の町村合併で誕生した面積約114km<sup>2</sup>、人口約11,000人の町である。主要産業は水稻中心の農業であるが、岡山市に隣接しているため、近年、ベッドタウンとしての宅地開発が盛んになって来ている。また、岡山県テクノポリス構想のもと、工業団地の造成が進められ、工場誘致も進んでいる。

御津町域の約78%は山林である。山地は比較的浸食、風化が進み、低平な丘陵を呈しているが、吉備高原の南縁を成す北西部には標高400m級のものも見られる。これらの山地の間をぬう様に流れる同川沿いに平地が存在している。

平岡西遺跡は旭川の支流である新庄川の中流域の西側に位置している。建部町との町境を成

す標高350m級の山地から派生する小河川と新庄川の浸食、堆積作用によって形成された緩斜面上に立地している。遺跡の位置する旧赤磐郡五城村の大部分の地質は花崗岩質である。表層風化が進んでいるため、いわゆる真砂土と化している。遺跡の現状は水田及び宅地である。

平岡西遺跡の周辺の遺跡は新庄尾上遺跡、2基の前方後円墳を始めとする十数基の古墳と城跡が知られているのみであったが、近年の畠場整備事業の進展によって河川沿



図1 御津町位置図

いに遺跡の発見が相次いだ。この平岡西遺跡もその一つである。

\* 細文時代の遺跡としては、伊田の酒屋谷遺跡から後期の土器片が採集されたことが報告されている。最近の調査によって、伊田沖遺跡から後・晩期の、寺部遺跡から晩期の、鐵治屋谷遺跡から中・晩期の、平岡西遺跡から早・前・晩期の土器片が出土している。

弥生時代の遺跡としては、平岡西遺跡の南約1kmのところに新庄尾上遺跡の存在が知られている。前述の様に農場整備事業によって、北に年次遺跡、東に矢知遺跡、赤鉢遺跡、南に寺部遺跡、鐵治屋谷遺跡、新庄原遺跡とこの時期の遺跡が新庄川とその支流沿いの平地から山裾にかけて存在していることが明らかになってきた。

古墳時代の遺跡としては、調査地の北の山腹に八幡神社古墳、尾根上に須道山古墳、南西の尾根上に鐵治久古墳が存在している。いずれも径10m程度の円墳であろう。後期古墳と思われる。

八幡神社古墳では、主軸がN-60°Eの長さ2.1m、幅0.9mの土壇内に、箱式石棺の側石と見られる長さ140cm以上の一枚石の板石が直立している。

弥生時代の遺跡は以降も連続と営まれ続け、それぞれの時期の遺構、遺物が検出されている。赤



八幡神社古墳

鉢遺跡からは多量の奈良時代の土器が、寺部遺跡からは円面鏡が、平岡西遺跡からは線彫陶器が出土している。また、多くの遺跡から輸入陶器が出土している。

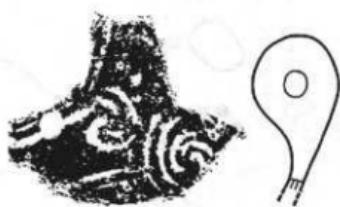
中世には、御津町が水陸交通の要衝地であったことから多くの山城が築かれた。平岡西遺跡の周辺も同様で、遺跡の位置する平岡西地区を含めた地域が旧『五城村』と命名されたのも、平岡西城、矢知城、西谷城、松塙城等多くの山城が築かれていたことに由来する。

\* この土器について記された刊行物によると①『伊田岩井山丘陵南麓部において、地元民が温室建設のため深掘り中に出土したと伝えられる。』とあり、拓本、実測図、写真を掲載し、その出土地点として岩井山遺跡を示している。また、②『上伊田で発見された。』とあり、『上伊田出土の細文式土器片』とキャプションの付けられた拓本、実測図、写真を掲載しているものもある。御津町教育委員会が1972年度に岡山県埋蔵文化財分布調査5ヶ年計画の一環として実施した町内埋蔵文化財分布調査時に作成された埋蔵文化財包蔵地調査カードが町教育委員会に保管されている。それによると、③酒屋谷遺跡のカードの表面に『温室基礎工事中土器破片発見とのことであるが所在不明。』と記され、裏面にこの土器と酒屋谷遺跡の遺景の写真が添付されている。

①神原英朗「地理的歴史的環境 2歴史的環境」『岩井山古墳群』御津町教育委員会(1976)

②御津町史編纂委員会「第2章御津町のあけぼの 第1節縄文時代」『御津町史』御津町(1985)

- |            |             |
|------------|-------------|
| 1 火の釜古墳    | 22 新庄原遺跡    |
| 2 佐野古墳     | 23 鎌治屋谷遺跡   |
| 3 平岡西城     | 24 天神鼻 1 号墳 |
| 4 年次遺跡     | 25 天神鼻 2 号墳 |
| 5 一本松 1 号墳 | 26 天神鼻 3 号墳 |
| 6 一本松 2 号墳 | 27 天神鼻 4 号墳 |
| 7 一本松 3 号墳 | 28 八つ塚古墳    |
| 8 一本松 4 号墳 | 29 潤戸古墳     |
| 9 赤鉢遺跡     | 30 松原城      |
| 10 矢知城     | 31 塚の谷遺跡    |
| 11 矢知遺跡    | 32 宅美池遺跡    |
| 12 須道山古墳   | 33 上伊田遺跡    |
| 13 八幡神社古墳  | 34 宇那山古墳    |
| 14 鎌治久古墳   | 35 犬國古墳     |
| 15 平岡西遺跡   | 36 宇那山城     |
| 16 天狗古墳    | 37 しんのう塚古墳  |
| 17 熊野神社古墳  | 38 伊田神遺跡    |
| 18 経畔古墳    | 39 岩井山古墳群   |
| 19 寺部遺跡    | 40 岩井山遺跡    |
| 20 新庄尾上遺跡  | 41 酒屋谷遺跡    |
| 21 西谷城     | 42 熊谷城      |



縄文土器 実測図(①より)



写真(③より)

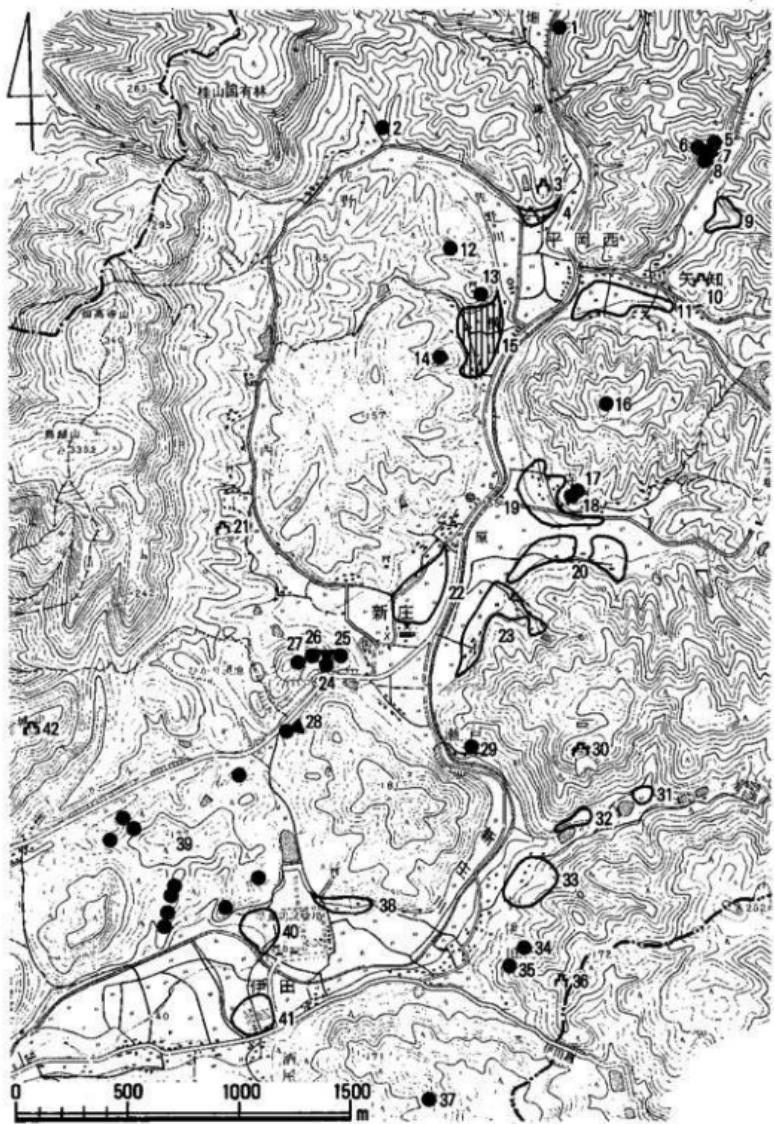


図2 調査地周辺遺跡分布図

## II 調査に至る経緯と経過

### 1 調査に至る経緯

御津町における県営畠場整備事業五城北地区は1985年に開始された。

工事に先立って、周知の遺跡である宅美池遺跡、新庄尾上遺跡に関しては、確認調査、設計変更等の保存対策がなされて来た。

平岡西地区には遺跡は存在しないとされていたため、88年8月より畠場整備事業は着手された。御津町教育委員会では、最近の新庄地区的遺跡の発見状況から見て、平岡西地区においても遺跡の有無を確認する必要があるとした。そこで、9月3日に畠場整備対象範囲内に重機で7ヶ所の試掘穴を設け、遺跡の有無を調査した。うち2ヶ所において遺物の出土を見、包含層が認められたため、9月6日付、御地教第103号で文化財保護法第57条の6に基づく発見届を通知し、平岡西遺跡と命名した。

調査結果を基に、御津町教育委員会は岡山地方振興局、御津町役場農業土木課等関係機関と協議し、遺跡の保存に努めた。しかしながら、遺跡の一角、約400m<sup>2</sup>については削平せざる得ない結果となった。原因者である岡山地方振興局は御津町教育委員会へ発掘調査の依頼を打診して來た。当時、町教育委員会の調査員は、同じ県営畠場整備事業に伴う寺部遺跡の調査を行なっており、終了後は新庄尾上遺跡の調査にあたる予定になっていた。新たな調査は出来かねる状況であった。しかし、すでに平岡西地区では工事が進行していたこともあり、平岡西遺跡の調査は緊急を要した。関係機関で調整の上、新庄尾上遺跡の調査開始を1ヶ月遅らせ、平岡西遺跡の調査期間を捻出することになった。

御津町教育委員会は、9月21日付、御地教第1119号で文化財保護法第98条の2に基づく発掘届を通知し、9月24日付で、岡山地方振興局と発掘調査の委託契約を取り交わした。

9月26日より調査を開始した。

豊富な遺構、遺物の検出を見、11月5日に調査を終了した。

この間、調査地周辺では工事が並行して行なわれ、水路等掘削時の立会調査、表土を剥がれ露出した包含層から流出した遺物の採集と、調査員は遺跡内を飛び回った。

遺物の採集に際して、便宜的に遺跡内を3区に分けた(図3)。遺跡の範囲が十分に把握出来ていない時点での地区設定のため、不適な点があることは否めないが、すでにこれを利用して遺物を採集していたこともある、そのまま使用した。

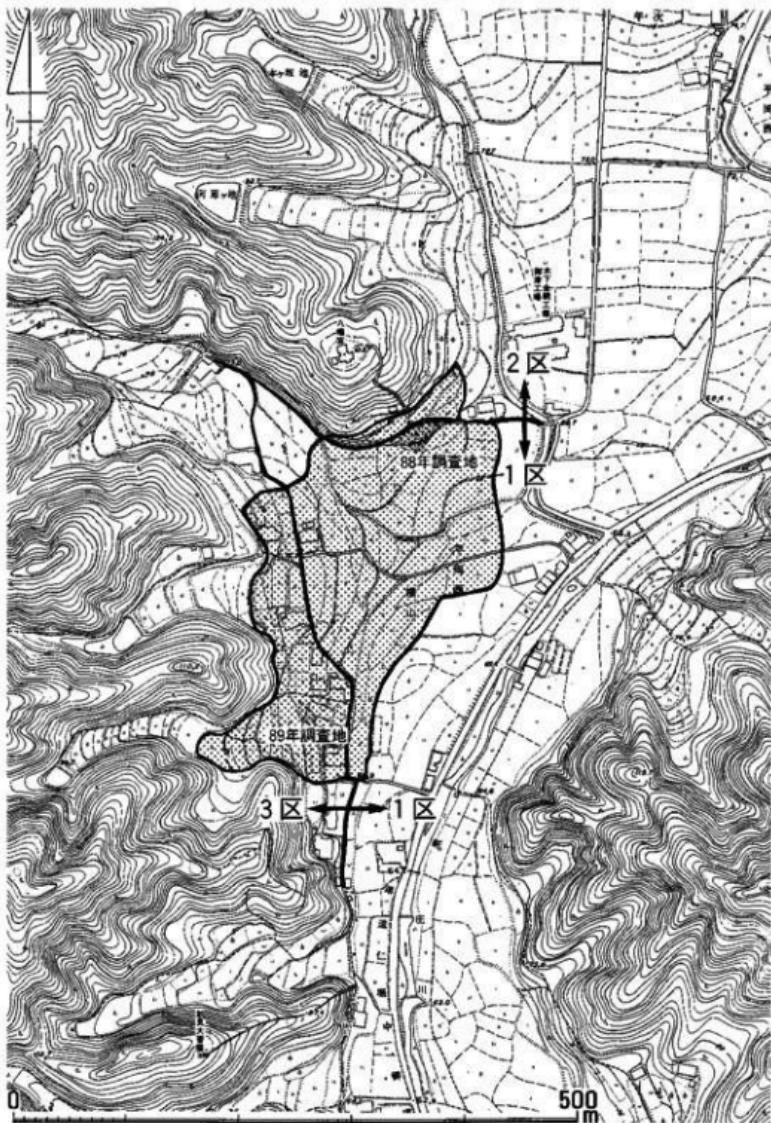


図3 平岡西遺跡推定範囲・地区割図

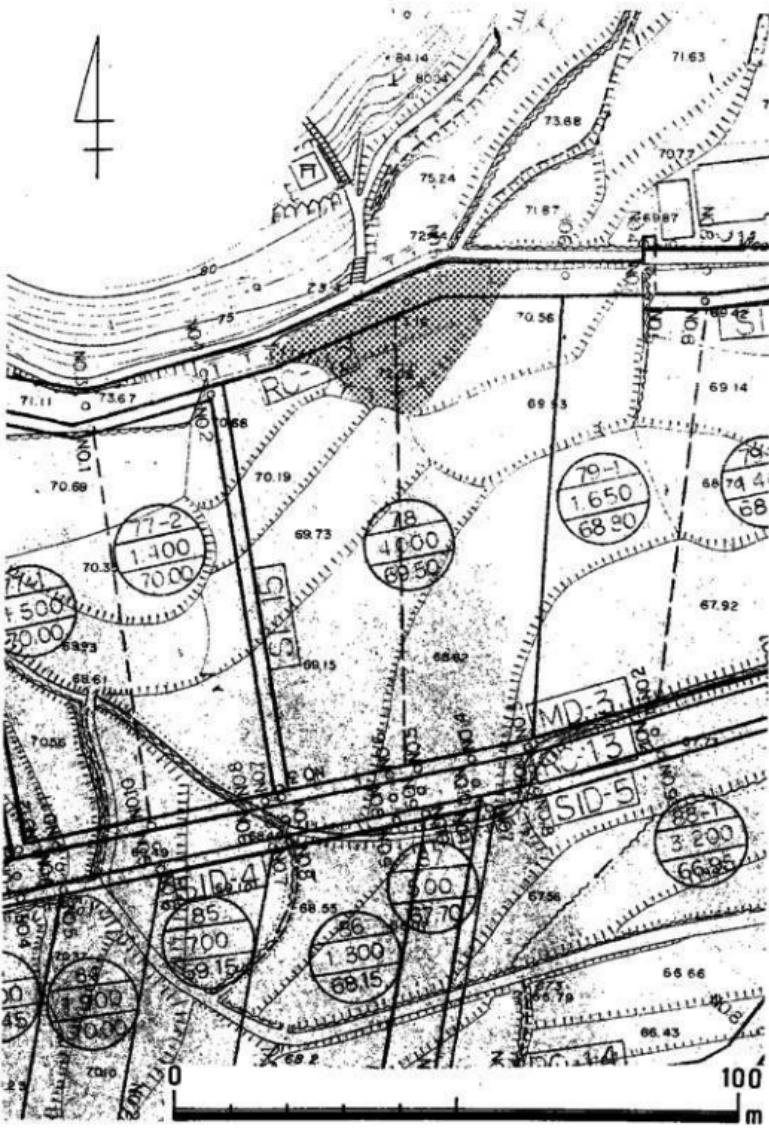


図4 調査地位置図

## 2 調査日誌

- 9月26～27日 機械掘削  
26日 南北土層断面実測  
27～29日 第1層掘削  
29～30日 第1遺構面遺構掘削  
30～31日 第1遺構面精査  
31日 第1遺構面写真撮影 平板実測  
31～10月15日 第2層掘削  
10月11～17日 第2遺構面遺構検出  
17～28日 第2遺構面遺構掘削  
20日 S D04遺物出土状況写真撮影  
21～23日 S D04遺物出土状況実測  
25日 S B02実測  
26日 S K07遺物出土状況実測 遺物取り上げ  
27～31日 S D04遺物取り上げ  
29日 S B01実測  
31～11月2日 第2遺構面精査  
11月2日 第2遺構面写真撮影  
2～4日 第2遺構面平板実測  
4～5日 東西土層断面実測  
5日 新庄尾上遺跡の現場へ機材移動

# III 調査成果

## 1 はじめに

今回の調査は予定外のものであり、工事との関係から調査期間も十分といえるものではなかった。その様な中で最大の調査成果を上げるべく、試掘調査時に確認された暗褐色粘質土層と地山面を重点的に調査することにした。

暗褐色粘質土層の直上まで重機によって掘削し、暗褐色粘質土層の上面を第1遺構面とした。暗褐色粘質土層に後世の遺物が混入するのを避けるため、遺構を検出し、掘削した。

その後に、暗褐色粘質土層を掘削、地山面を検出し、そこを第2遺構面とした。

## 2 基本層序

調査地は南へ突出する平面三角形の高台である。表土面のレベルはT.P.+72.1~73.2mである。周囲との比高差は2.1~2.6mである。表土面は平坦で、かつては耕作地として利用されていたが、調査時には雑木、雑草の生茂る荒地と化していた。

地山面は北から南へ、西から東へ傾斜しており、埋土も低位側より順次堆積していった状況が見られた。

調査地は北から南へ延びる小さな尾根の周囲が割り取られたものであろう。

前述の様に調査は暗褐色粘質土層に重点を置いたものであった。重機で掘削出来なかった暗褐色粘質土層より上層の灰褐色粘質土層を主とする上層を第1層とした。第1層と地山面との間の暗褐色粘質土層を主とする土層を第2層とした。

## 3 第1層

第1層として人力で掘削したのは重機で掘削し切れなかった下部の厚さ10cm程度の部分だけである。『第1層出土』として取り上げた遺物もその部分からのものである。弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

1~10は弥生土器である。1~3は壺、または壺の口縁部である。1の端部は上下にわずかに拡張されている。2の口縁端面には刻み目が施されている。4は底部である。やや上げ底である。器壁は厚く、しっかりしている。外面にはよこなで調整が施されている。5は高杯の脚柱部である。垂直に立ち上がり、管状を成す。6・7は高杯杯部である。やや外反する口縁部である。内外面ともへら磨き調整が施されている。胎土は精良である。6の表面には丹

塗りが施されている。8・9は脚端部である。外面にはへら磨き調整、内面上半にはなで調整、下半にはへら磨き調整が施されている。胎土は精良である。8の外面には丹塗りが施されている。10は台付直口壺である。扁平な脛部からやや外反しながら口縁部が立ち上がる。口縁端部にはよこなで調整、外面にはへら磨き調整、内面にはなで調整、脛部内面下半には粗いはけ目調整が施されている。口縁部内面には成形時のなで上げ痕が残存している。脛部下半に1ヶ所焼成後穿孔が見られる。胎土は精良である。

11・12は土師器である。11は壺の口縁部である。12は鉢の口縁部であろう。

13は脚端部である。端部はわずかに下方に突出している。外面端部近くに断面三角形の突帯が貼付けられている。その上方には押圧により低い突帯状のものを作り出している。端部にはよこなで調整、他には粗いはけ目調整が施されている。さらに外面にはスタンプ文が施されている。スタンプ文は上から蛇腹状の逆S字形文、5条の凸線をもつ上向きの三角形文、逆S字形文、さらに突帯上方、突帯両面と突帯下方に径8mmの竹管文である。胎土には径0.5~3mmの花巻岩の細礫を含む。焼成は良く、外面は灰橙色、内面は暗灰橙色、断面は赤肌色~暗茶灰色を呈する。

14~17は土師器である。14は外反する口縁部をもつ皿である。15・16は断面三角形の貼付け

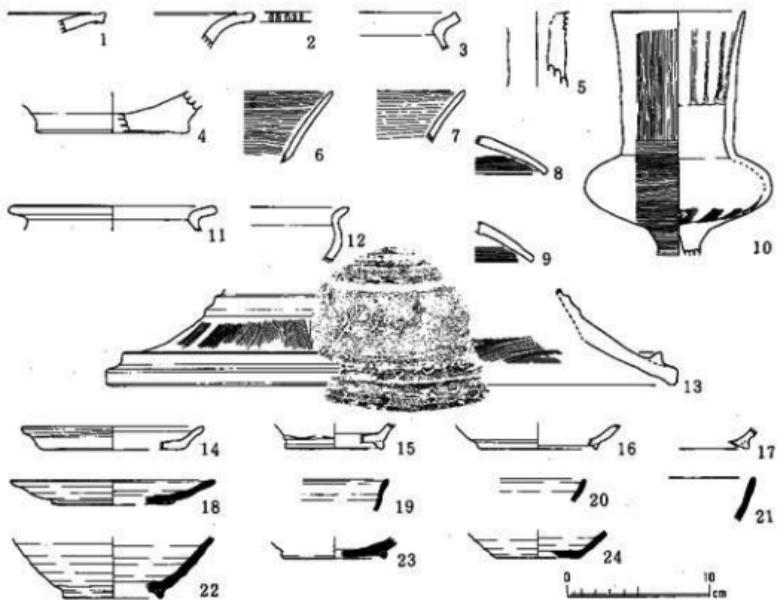


図6 第1層出土遺物実測図

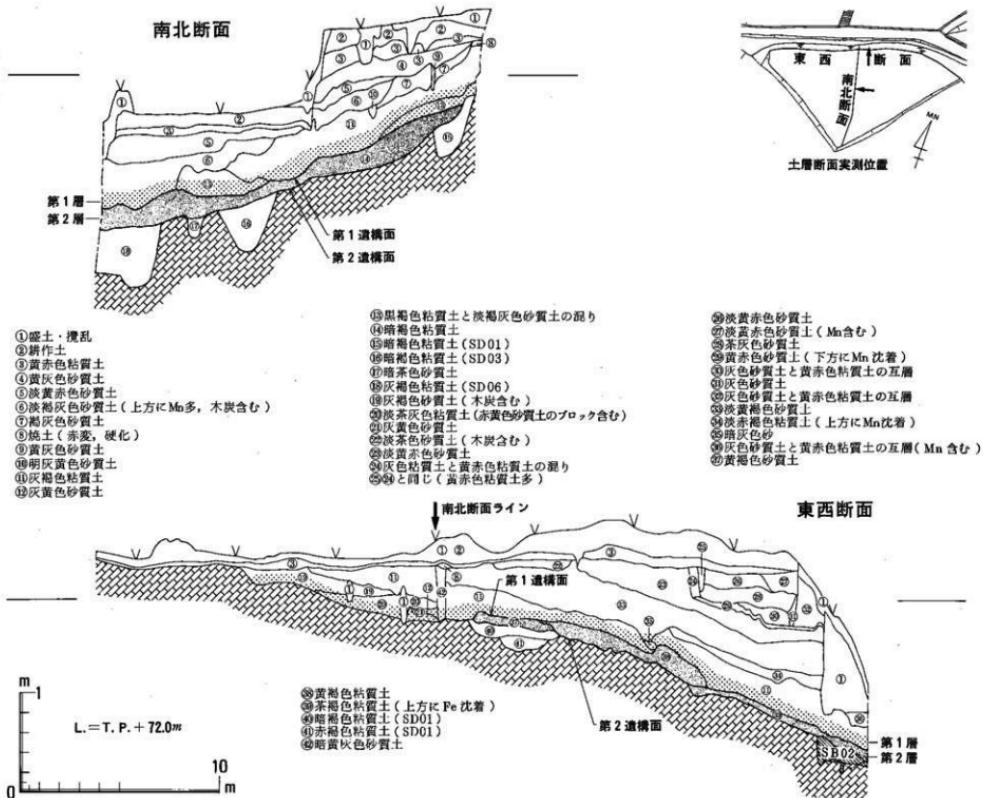


図5 調査地土層断面実測図



図7 第1造機面平面図

高台をもつ底部である。

18~24は須恵器である。18は大きく開く浅い皿である。底部はヘラ切りで切離され、突出している。回転ヨコナデ調整が施されている。胎土は良い。焼成はやや悪い。19~21は碗の口縁部である。22・23は貼付け高台の底部である。24は平底の底部である。底面はヘラ切りで切り離されている。

## 4 第1遺構面

第1遺構面は第1層を除いた面である。北から南へ、西から東へ緩やかに傾斜している。検出面のレベルはT.P.+70.5~72.4mである。

第1遺構面では溝、土壤、ピットを検出した。

溝は長さ0.8~3.3m、幅10~20cm、深さ3~10cmを測る。

土壤、ピットは平面はほぼ円形を呈し、径10~50cm、深さは様々である。建物等としてまとまりのつかめるものはなかった。埋土は調査区東半では灰黄色砂質土、西半では茶褐色砂質土が主である。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土したが、いずれも小片で図示出来るものは少ない。

SK02は調査区西半で検出した長径52cm、短径44cm、深さ24cmの平面梢円形の土壤である。埋土は茶褐色砂質土である。埋土からは土師器、須恵器が出土した。25は土師器底部である。断面三角形の高い貼付け高台をもつ。26は須恵器碗である。高台はやや外方に張り、体部は斜め上方に真直ぐ立ち上がる。回転ヨコナデ調整が施されている。焼成はやや悪い。

SK06は調査区東半で検出した長径56cm、短径32cm、深さ31cmの平面梢円形の土壤である。埋土は灰黄色砂質土である。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。27は土師器である。内側する口縁部である。28は須恵器である。口縁部である。端部は膨らみ、やや外反している。

SP02は調査区の西端近くで検出した径25cm、深さ8cmの平面円形のピットである。埋土は茶褐色砂質土である。埋土からは土師器が出土した。29は土師器である。碗の口縁部である。端部はわずかに外反している。

SP04はSK02とSP02のはば中間で検出した径20cm、深さ24cmの平面円形のピットである。埋土は茶褐色砂質土である。埋土からは弥生土器、土師器が出土した。30は土師器である。碗の口縁部である。端部はやや内側している。

SP32はSP02の南西、調査区西端で検出した径18cm、深さ41cmの平面円形のピットである。埋土からは土師器、須恵器が出土した。31は土師器皿である。底部は厚く、口縁部の立ち上がりは小さい。32・33は須恵器である。碗の口縁部であろう。

SP33はSP02の東で検出した。径34cm、深さ42cmの平面円形のピットである。埋土からは土師器が出土した。34は土師器皿である。

第1造構面の時期は、この面を覆う第1層に含まれる遺物から、13世紀を下らない時期に位置付けられよう。

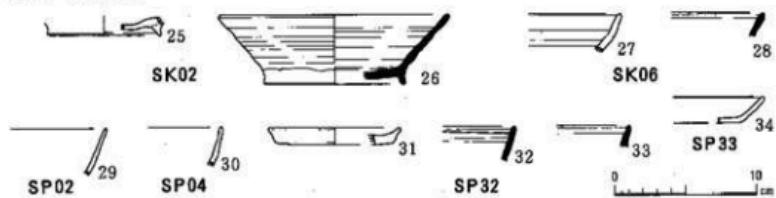


図8 第1造構面 造構出土遺物実測図

## 5 第 2 層

第2層は地山面を覆う暗褐色粘質土層を主とする上層である。調査区の北西部では第1層を除くと地山面が露出し、第2層は堆積していなかった。

第2層からは縄文土器、赤生土器、土師器、須恵器、瓦器が出土した。

35~46は赤生土器である。35、または壺の腹部上半から口縁部である。35は直立する頸部をもつ壺である。頸部外面には残存部で3条の断面三角形の突帯が貼付けられている。頸部外面にははけ目調整が施されている。内面には指頭圧痕が残存している。36の口縁端部は水平に引き出されている。口縁部にはよこなで調整、頸部外面にははけ目調整、内面にはへら削り調整が施されている。37の口縁端部も水平に引き出されている。口縁部は屈曲し、頸部との境は明瞭である。口縁部にはよこなで調整が施されている。頸部内面には指頭圧痕が残存している。38・39の口縁端部は折り曲げる様に下方に拡張されている。38はそこへ3条の凹線文が施されている。38・39の口縁部にはよこなで調整が施されている。頸部内面には成形時の圧痕が残存している。38の腹部外面には粗いはけ目調整が施されている。40の口縁端部は下方に引き出され、3条の凹線文が施されている。41は大きく外反しながら開く口縁部である。端部はわずかに上方に拡張され、面を成している。内外面とも粗いはけ目調整が施されている。42は大きく開く口縁部である。端部は上方に引き上げられている。43の口縁部は下方に拡張されている。口縁部にはよこなで調整、頸部外面にはへら磨き調整、内面にはへら削り調整が施されている。44・45の口縁端部はやや内傾しながら上方に引き上げられている。外面には3~4条の凹線文が施されている。立ち上がり部の下端はわずかに下方に突出している。胎土は割合に良好である。46も44・45と同様の形態であるが、全体に器壁は厚目である。胎土も径1~3mmの細縫を含み、粗い。また、口縁部内面から頸部外面にかけて丹塗りが施こ

されている。

47~49は土師器である。要の腹部上半から口縁部である。47の口縁部はわずかに下方に拡張されている。口縁部にはよこなで調整、腹部外面には粗いはけ目調整が施されている。内面には成形時のなで上げ痕が残存している。48の口縁端部はよこなで調整の押圧のためか、わずかに上方に拡張されている。腹部外面にはへら磨き調整状のものが見られる。内面には指頭圧痕が残存している。49は小型のものである。口縁端部は丸く納められている。焼成はやや悪い。55も同様のものである。

50~54は細片であるが一応土師器とした。壺、または要の口縁部であろう。

56~82は弥生土器である。58は鉢である。屈曲して大きく聞く口縁部をもつ。口縁端部は丸く納められている。口縁部にはよこなで調整、体部外面には粗いはけ目調整、内面にはへら削り調整が施されている。56・57も同様の鉢の口縁部であろう。59~64は底部である。59の器壁は薄く、脚部の立ち上がりも急である。61はやや上げ底で、外面にはへら磨き調整が施されている。62の底面は凹凸が著しく不安定である。64の器壁は非常に薄い。底部は明條である。外面にはへら磨き調整、内面にはへら削り調整、底面にはなで調整が施されている。65~72は高杯である。65~67は脚端部である。65の端部は上方に引き上げられ、4条の凹線文が施されている。66の端部は水平に引き出されている。67の端部は肥大し、面をもつ。68は杯部である。口縁部は、杯部との境に段を成して、外反しながら大きく聞く。表面磨滅のため調整は不明だが、口縁端部外面に丹塗りかと思われる明茶色の部分がある。胎土は割合に良い。69・70は類似の脚部である。端部は直立する面を成す。なで調整が施されている。71は杯部口縁部である。やや外反している。内外面ともへら磨き調整で仕上げられている。胎土は精良である。72も同様の杯部口縁部である。表面には丹塗りが施されている。73は台付壺の脚柱部である。脚柱部は短く、脚部、脚部との境は明條である。外面にはへら磨き調整、脚部内面にはなで調整が施されている。脚柱部内面には絞り痕と差し込み技法の工具痕が残存している。胎土は精良である。外面には丹塗りが施されている。74も脚柱部である。体部内面に丹塗りが見られることから高杯であろう。杯部との境は不明條である。胎土は悪い。焼成もやや悪く、表面磨滅が著しい。75~79は脚部である。75は差し込み技法の脚部である。脚柱部内面に絞り痕が残存している。端部外面に1条の沈線が施されている。胎土は精良である。76~79も同様の脚端部である。76・77は外反しながら、78は内弯しながら立ち上がる。いずれも胎土は精良である。80・81は直口壺の口縁部である。外反しながら立ち上がる。端部外面に2条の凹線が施されている。内外面ともへら磨き調整が施されている。胎土は精良である。80には丹塗りが施されている。82は鉢である。口縁端部は斜め上方に引き上げられている。

83~86は土師器である。83はいわゆる早島式土器の体部である。よこなで調整が施され

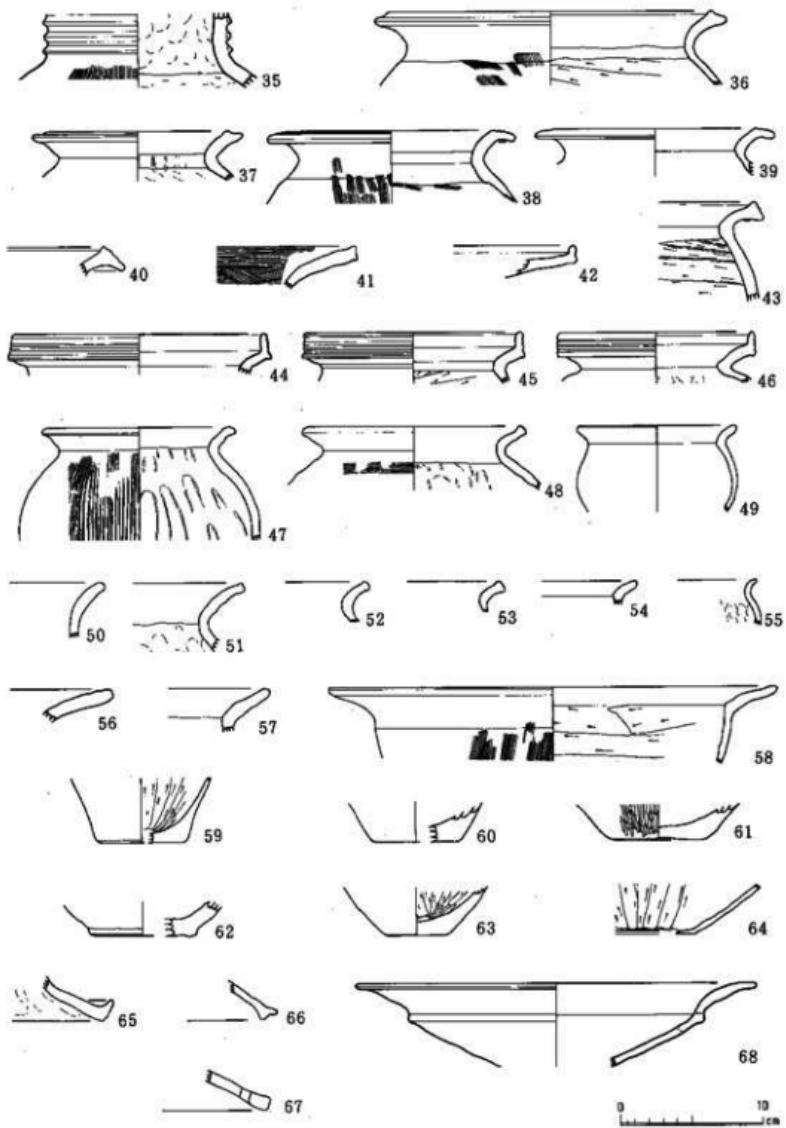


図9 第2層出土遺物実測図 (1)

ている。84は貼付け高台の底部である。高台は断面三角形で、外方へ踏張っている。85は平底の底部である。86は皿の底部であろう。

87~92は須恵器である。87は杯蓋である。天井部と口縁部との境には明瞭な綫をもつ。天井部外面には回転ヘラ削り調整、他には回転ヨコナデ調整が施されている。88は碗である。回転ヨコナデ調整が施されている。89~92は平底の底部である。90の底面はやや突出し、糸切り痕が残存している。

93は体部の破片である。外面には凹線で文様のようなものが描かれている。内面には貝殻条痕が縦横に刻まれている。胎土には細かい砂粒を多く含む。外面は赤褐色~淡灰茶色、内面は

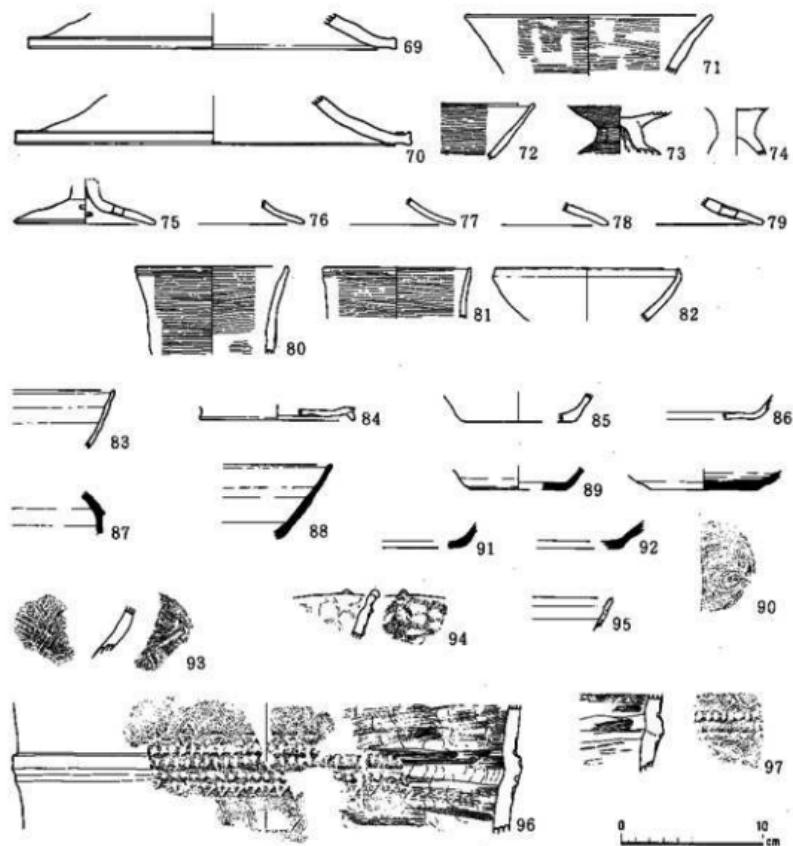


図10 第2層出土遺物実測図 (2)

灰茶色、断面は黒灰色を呈する。縄文土器であろうか。

94は口縁部の破片である。縁部に豆粒状の粘土を貼付けている。その下に縦方向に突帯を貼付けていた痕跡が見られる。外面には規則性をもって一面に指で粘土を擠み出している。凹部には爪の跡痕すら残存している。内面には指頭圧痕が残存している。

95は瓦器の口縁部である。

96は器台の体部である。突帯部で復元径が36cmにもなる。突帯は低く、器壁を内側から押し出して形成されている。内面には指頭圧痕が残存し、粗いはけ目調整が跡間に施されている。

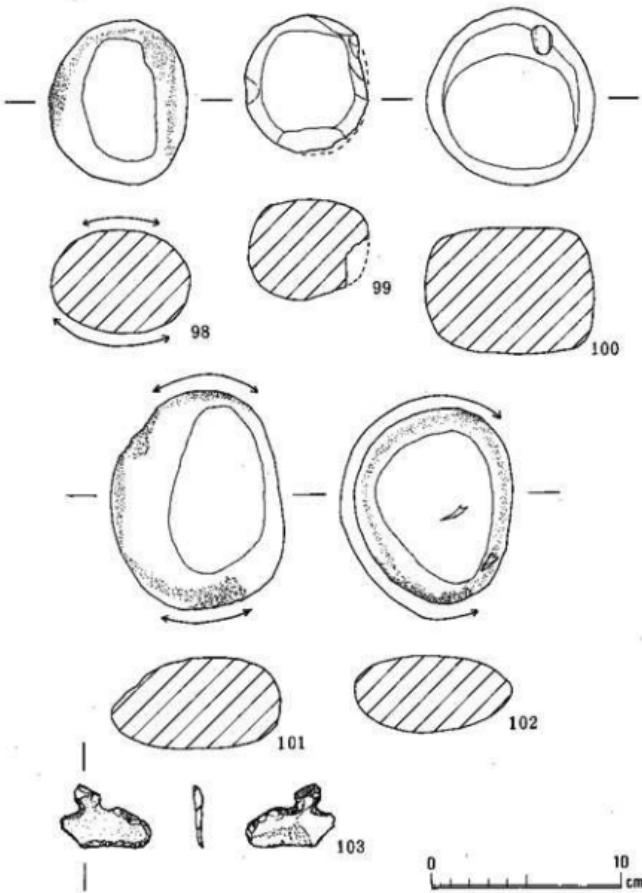


図11 第2層出土物実測図 (3)

外面には粗いはけ目調整の後、施文されている。文様は上から5条の並行する波状文、5条の凸線をもつ下向きの三角形文のスタンプ文、突帯の上下と突帯側面に1列ずつの刺突文、5条の凸線をもつ下向きの三角形文のスタンプ文、5条の並行する波状文である。それぞれの原体は同じものを用いている。スタンプ文は左から右へ施文され、これらのうちでは三角形文が最後に施文されている。大まかに施文され、割付けはなされていない様である。胎土には径0.5～2mmの花崗岩起源の細礫を含む。焼成は良く、外面は灰肌色～淡灰褐色、内面は淡灰茶色、断面は褐色を呈する。97と96と同様の器台の破片であろう。突帯側面の文様が2条の並行する波状文である以外は、文様、調整等96と同じである。

98～103は石製品である。98～100は花崗岩製の磨石である。画面が良く磨滅している。101は花崗岩製の、102は砂岩製の叩石である。周縁に打撃痕が認められる。重量は98が508g、99が361g、100が919g、101が780g、102が521gを測る。103はサヌカイト製の石匕である。扁平な横型のものである。刀部はほぼ水平である。接ぎみの一部に自然面を残す。9gを測る。

## 6 第2遺構面

第2遺構面は第2層を除いた面で、地山面である。検出面のレベルはT.P.+70.4～72.2mである。

第2遺構面では堅穴住居2軒、流路、ピット等を検出した。遺構検出途上で、流路上にピットが存在することが判明した。まず、それらのピットを掘削した。ピットは径20～46cm、深さ7～16cm、平面円形を呈する。埋土は暗黄灰色砂質土が主である。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

SP18～22は流路の合流点付近で近接して検出した。

SP18は径22cm、深さ7cmの平面円形のピットである。埋土は暗黄灰色砂質土である。埋土からは弥生土器、須恵器が出土した。104は須恵器の碗である。回転ヨコナデ調整が施されている。

SP19は径46cm、深さ12cmの平面円形のピットである。埋土は暗黄灰色砂質土である。埋土からは土師器、須恵器が出土した。105・106は土師器である。105は口縁部である。縁部はわずかに肥大している。胎土は精良である。表面には丹塗りが施されている。106は平底の杯である。体部にはよこなで調整、底部にはなで調整が施されている。焼成不良の須恵器の可能性もある。107は須恵器である。体部には回転ヨコナデ調整、底部にはナデ調整が施されている。焼成はやや悪い。

SP21は径30cm、深さ17cmの平面円形のピットである。埋土は灰黄色砂質土である。埋土か

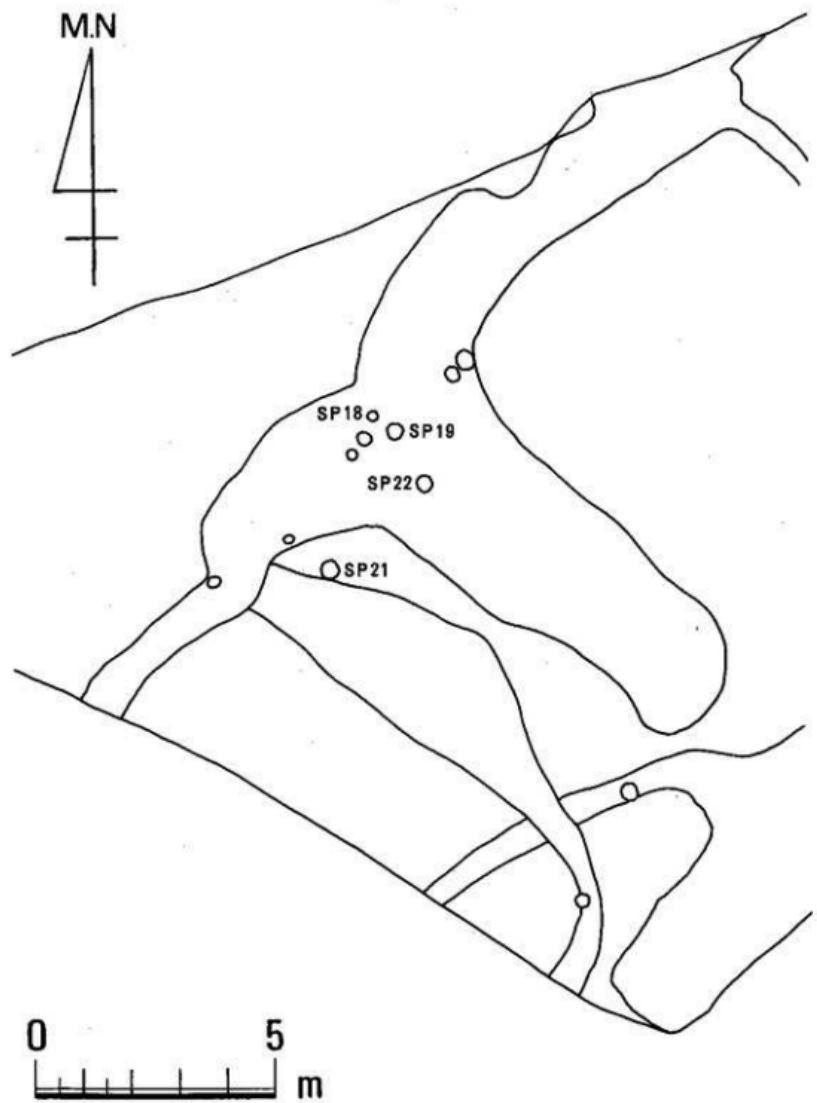


図12 第2造様面平面図 (1)

らは土師器が出土した。108は土師器の口縁部である。胎土は良い。焼成はやや悪く、表面磨滅のため調整は不明である。

S P22は径34cm、深さ16cmの平面円形のピットである。埋土は灰黄色砂質土である。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。109は土師器の口縁部である。端部は肥大している。よこなで調整が施されている。110・111は須恵器である。110は椀の口縁部である。端部は外反している。回転ヨコナデ調整が施されている。111は平底の底部である。体部には回転ヨコナデ調整、底部にはナデ調整が施されている。

これらのピットは、その出土遺物の年代から、第1造形面の時期と大差無い時期に位置付けられよう。

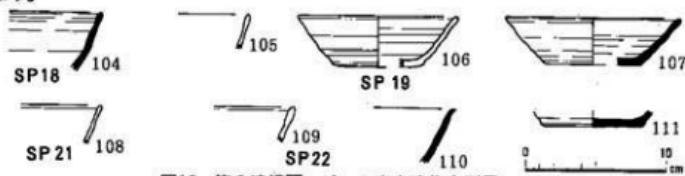


図13 第2造形面 ピット出土遺物実測図

調査地中央東側で検出した竪穴住居S B01と重なって、落ち込みS K07を検出した。S K07はS B01廃絶後の堆みに、北からの流路が搬入した砂泥が堆積したものである。また、堆積が完了するのに長時間を要していない様である。平面は不定形で、深さ30cm程度である。埋土は暗茶褐色砂質土である。埋土からは弥生土器、土師器が出土した。当初、S K07の存在に気付かず、S B01の掘削を進めてしまったため、S K07の平面形を正確に捕らえられなかった。S K07の内部には比較的大きな角礫と土器が散在して検出された。出土遺物のうち、146～161は角礫の近辺、他は埋土から出土したものである。

112は直立する頸部をもつ壺である。頸部には残存部で3条の凹線をもつ。頸部内面には粗いなで調整が施され、成形時の圧痕が残存している。頸部外面にはへら磨き調整、内面にはへら削り調整が施されている。外面頸部近くに一列の竹管文のスタンプが施されている。3個のスタンプが残存している。113～116は壺である。113の口縁部は屈曲し、やや外反している。端部はわずかに上方に摘み上げられている。口縁部にはよこなで調整、頸部外面にははけ目調整、内面にはへら削り調整が施されている。頸部上方のはけ目調整は、口縁部のよこなで調整によって消されている。口縁部外面にははけ目の原体の圧痕が残存している。114の口縁部は外反し、端部は下方に引き出されている。口縁部にはよこなで調整、頸部内面にはへら削り調整が施されている。115の口縁端部は拡張され、面を成し、2条の凹線が施されている。口縁部にはよこなで調整、頸部内面にはへら削り調整が施されている。116は短かい頸部をもち、口縁部は大きく聞く。端部はやや下方に拡張されている。口縁部にはよこ

なで調整、脇部外面には粗いはけ目調整、内面にはへら削り調整が施こされている。117は口縁部である。器壁は厚手で、立ち上がりは急である。端部は拡張され、面をもつ。端部にはよこなで調整、内面には粗いよこなで調整、外面にはなで調整の後、縦方向の平行する沈線文が施こされている。118～120は115・116と同様の口縁部である。端部は拡張され、面をもち、数条の凹線文が施こされている。121は内傾する短かい頸部に、小さな口縁部をもつ壺である。口縁部は頸部に比べて薄い。端部は丸く納められている。122～124は壺、または壺の口縁部である。端部はわずかに拡張され、丸く納められている。口縁部にはよこなで調整、脇部内面にはへら削り調整が施こされている。125は大きく外反する口縁部である。高杯の杯部の可能性もある。126は外反する口縁部である。内面にはへら磨き調整が施こされているが、外面の調整は磨減のため不明である。下端の形状、胎土の粗さから、二重口縁の口縁部と思われるが、高杯杯部の可能性も捨て切れない。127～129は底部である。127・128の脇部外面にはへら磨き調整、内面にはへら削り調整、底面にはなで調整が施こされている。129は球形の脇部をもつ。底部は突出し、なで調整も粗く、不安定である。130は高杯杯部である。内外面ともへら磨き調整が施こされている。胎土は精良である。表面には丹塗りが施こされている。131・132は高杯脚端部である。131の端部は水平に引き出されている。132の器壁は厚手である。端部は水平に引き出され、立ち上がりは急である。円形の透し穴が穿かれている。133・134は高杯脚柱部である。133の外面には粗いはけ目調整、内面にはへら削り調整が施こされている。多少位置にすれば有るが、上下2段に円形の透し穴が穿かれている。134も外面には粗いはけ目調整、内面にはへら削り調整が施こされている。長方形と思われる透し穴が穿かれている。透し穴の上に3条、下に2条の凹線が施こされている。135の口縁部は体部から垂直に立ち上がり、端部は水平に開く。壁器はやや厚目である。内外面ともへら磨き調整が施こされている。胎土は粗い。鉢であろうか。136～138は鉢である。136・137は丸い体部と外反する口縁部をもつ。端部はほぼ水平に引き出されている。口縁部にはよこなで調整、体部内面にはへら削り調整、外面にはなで調整が施こされている。138は平底からやや内巻する体部が立ち上がり、口縁部は水平に折り曲げられている。体部内面には成形時の指頭圧痕が残存している。口縁部にはよこなで調整が施こされている。底面はやや不安定である。胎土は良い。139～142は鉢の口縁部であろう。139は体部と口縁部の境が不明瞭である。140・141の器壁は厚手で、外反している。142は138と同様のものであろう。143は脚台部である。胎土は粗い。焼成も悪く、表面磨減が著しい。144は脚台の脚端部である。端部は水平に撻まみ出されている。端部にはよこなで調整、外面にはへら磨き調整、内面には粗いなで調整が施こされている。外面には4条の凹線文が施こされている。胎土は粗い。145は卵形の体部をもつ無脚壺である。外面には疎らに粗いはけ目調整が施こされている。内面には成形時の指頭圧痕が残存している。底部は

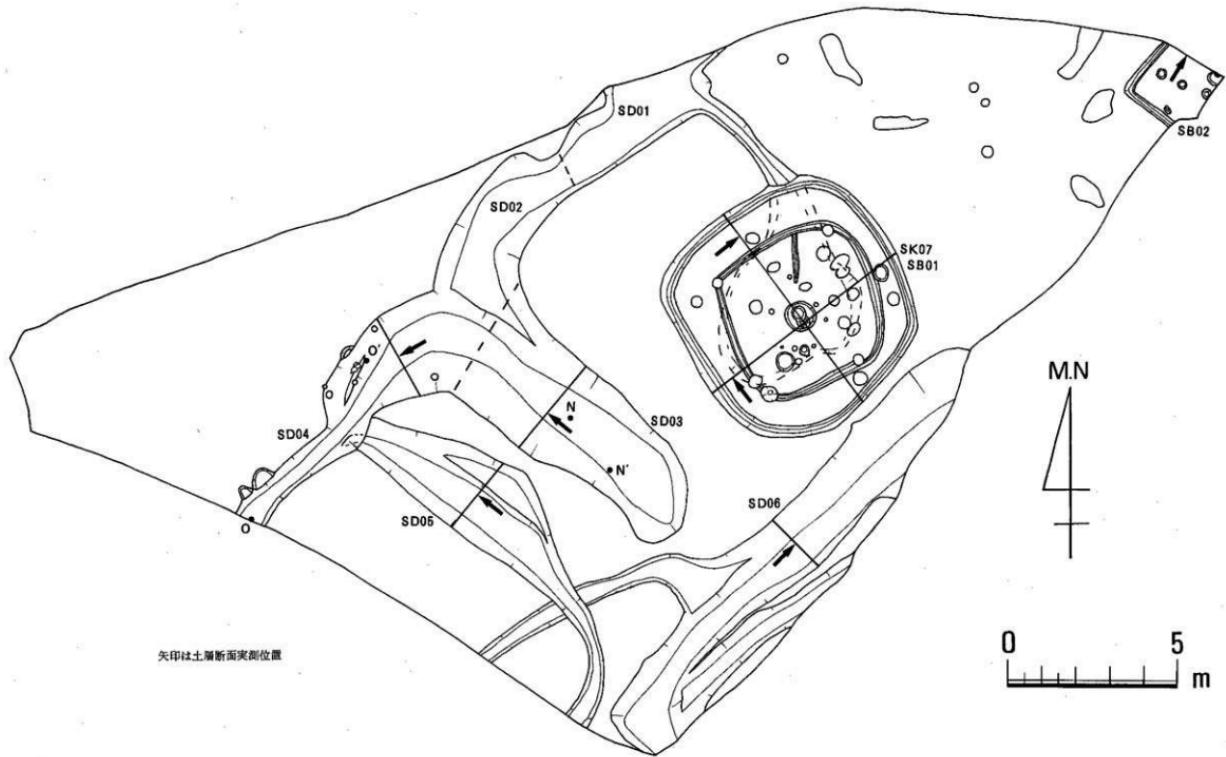


図14 第2建構面平面図(2)

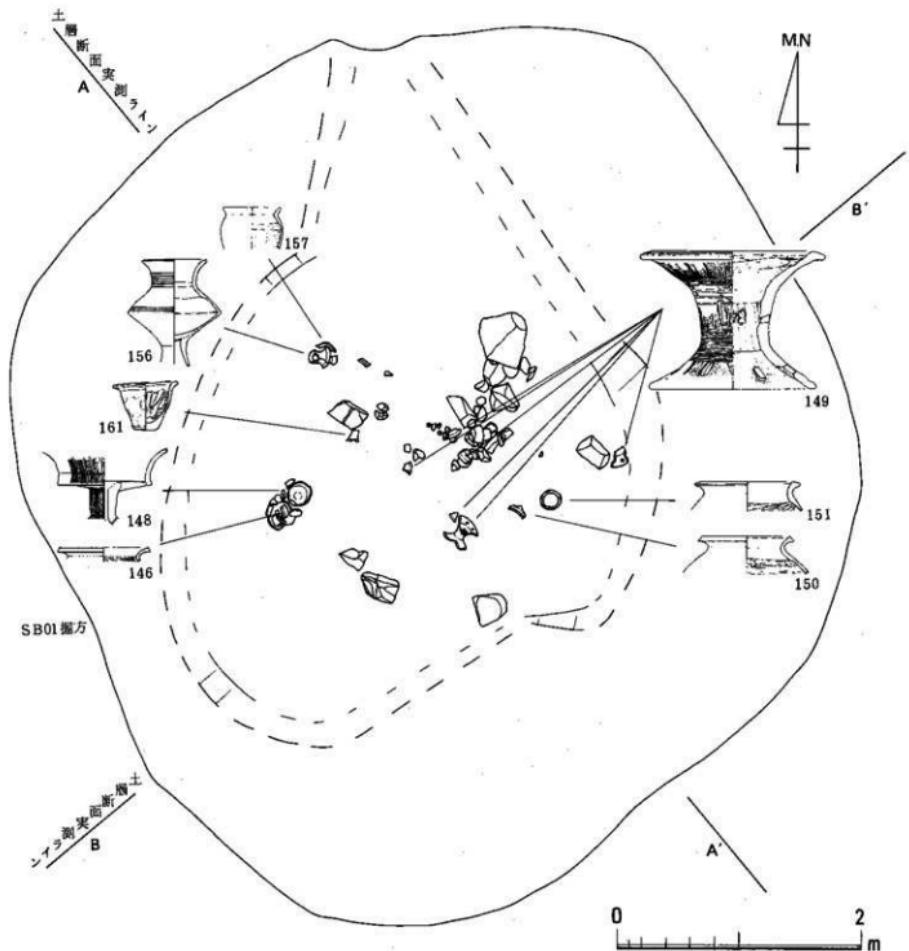


図15 SK07 遺物出土状況平面図

平底であるが、不安定である。

鍍の近辺で出土した土器を取り上げるのに際して便宜的に4群に分けた。146～148、149～152、153～155、156～161である。

146は外反する邊の口縁部である。端部は下方にやや拡張されている。脇部内面にはへら削り調整が施こされている。147は上げ底の底部である。外面には粗いはけ目調整、内面にはへら削り調整が施こされている。黒斑をもつ。148は高杯である。大きく外反する口縁部をもつ杯部に、中彫れの管状の脚柱部を接合し、杯部内面より粘土板を充填している。全体に作りは粗く、脚柱部は傾いて接合されている。杯部との接合部分から多くのひびが発生している。充填された粘土板も剥離している。外面にはへら磨き調整、口縁部にはよこなで調整が施こされている。胎土は粗く、径1～5mmの細縫が多く含む。

149は器台である。破片は散在していたが、ほぼ完形に復元出来た。脚端部は丸く納められている。口縁端部は下方に折り曲げられ、3条の凹線が施こされている。端部にはよこなで調整、外面には粗いはけ目調整が施こされている。内面には成形時の圧痕が残存している。くびれ部と脚部に、円形と長円形の透し穴が交互に4ヶ所ずつ穿かれている。上下の透し穴の位置と形は対応している。上の長円形の透し穴のうち1ヶ所は埋められている。それぞれの透し穴の上方に凹線文が施こされている。かなりラフな描き方である。はけ目調整、凹線文、透し穴の順に施こされている。150・151は妻の脇部上半から口縁部である。150の口縁端部は上下に拡張されている。口縁部にはよこなで調整、脇部内面には口縁部のやや下までへら削り調整が施こされている。151の口縁部はやや厚手で、端部は水平に引き出されている。口縁部にはよこなで調整、脇部内面には口縁部のやや下までへら削り調整が施こされている。152は底部である。平底の底部から大きく開きながら立ち上がる脇部をもつ。底部にはなで調整、脇部外面には疎らに粗いはけ目調整、内面にはへら削り調整が施こされている。

153は小型壺の口縁部であろう。胎土は良い。焼成が悪いため、磨滅が著しい。154は底部である。平底の底部から急に立ち上がる脇部をもつ。底面にはへら削り調整、脇部外面にはなで調整、内面にはへら削り調整が施こされている。底部内面には成形時の圧痕が残存している。胎土は粗い。155は器台の口縁部である。端部はやや下方に拡張され、4条の凹線が施こされている。端部にはよこなで調整、外面には粗いはけ目調整、内面にはへら磨き調整、はけ目調整が施こされている。

156は脚付短頸壺である。鋭い稜のそろばん玉状の脇部に、脇部から外反する口縁部をもつ。底部には粘土を充填してふさいでいる。脇部に数条、脇部に2条の凹線が施こされている。胎土は良い。焼成は悪く、灰褐色を呈する。157は小型壺である。口縁部は屈曲して広がる。口縁部にはよこなで調整、脇部外面にはなで調整が施こされている。内面には成形時の圧痕、粘

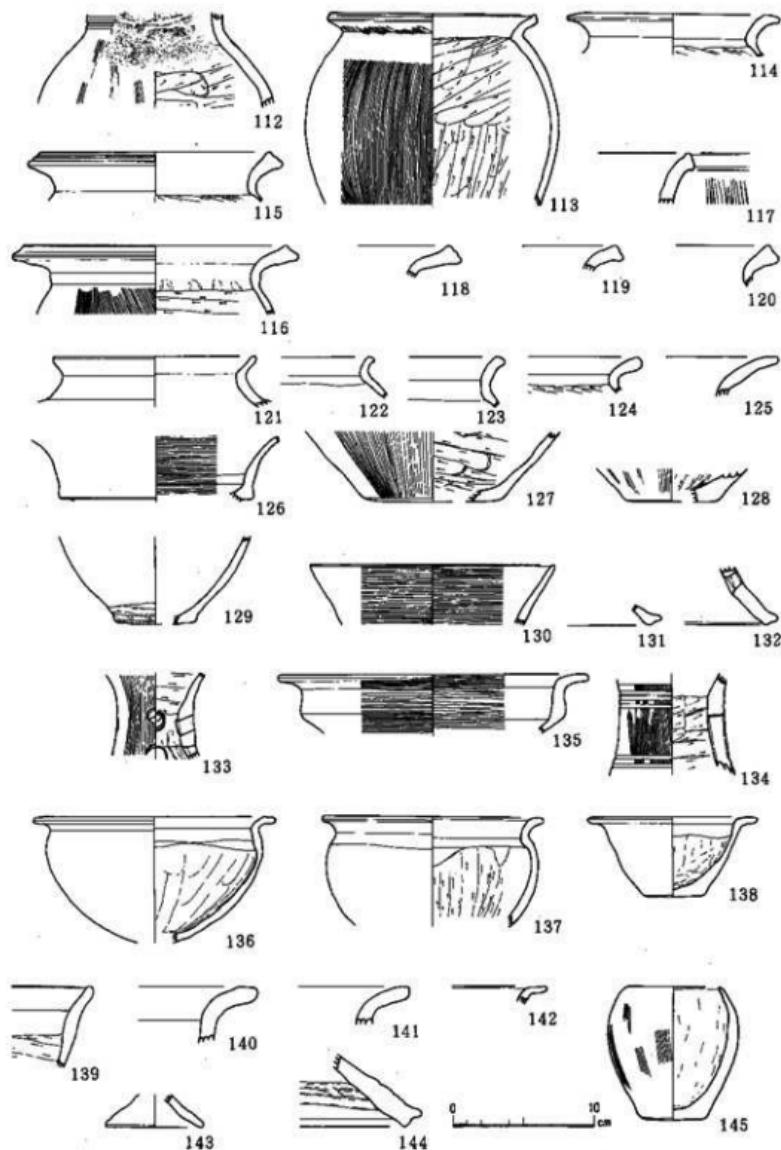


図16 SK07出土遺物実測図 (1)

土圧痕が残存している。158は大きく外反する口縁部である。端部は丸く納められている。159は底部である。やや上げ底である。大きく開く脚部をもつ。内面には横方向の押圧痕が残存している。160は丸い脚部に小さな脚台部をもつ底部である。脚台は外方に摘み出されて形成されており、その圧痕が残存している。161はカップ状の鉢である。ほぼ完形で出土した。

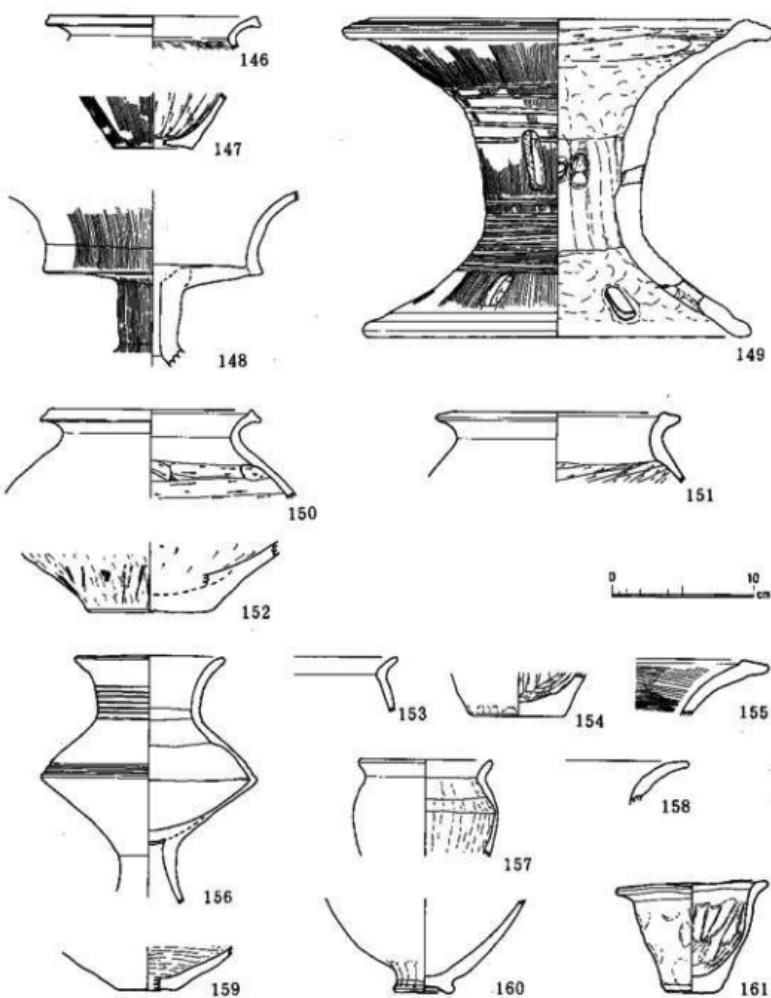


図17 SK 07出土遺物実測図 (2)

厚い底部から、やや内側する体部が立ち上がり、口縁部は水平に引き出されている。口縁部によくなで調整が施こされている以外は、内外面とも圧痕が残存している。底面近くに黒斑をもつ。

竪穴住居は調査地中央東側と北東角で2軒検出した。

SB 01は調査地中央東側で検出した。柱穴、壁体溝等から3回の建替えが行われたと考えられる。順にSB 01-A, -B, -Cとする。

SB 01-Aは平面円形に近い方形で、1辺3.7mである。壁体溝、中央穴をもつ4本柱の住居である。柱穴の埋土に木炭を含むことから、火災を受けた可能性がある。SB 01-Aに伴う柱穴で遺物が出土したのはSP 27のみである。SP 27からは167の弥生土器が1点出土した。167は円板充填技法の高杯である。全面になで調整が施こされている。壁体溝からは弥生土器の小片が数点出土した。

SB 01-BはSB 01-Aを拡張したものである。平面や長円形で長径7.6m、短径7.0mである。6本柱の住居である。中央穴、壁体溝はこの住居に伴うものかどうか不明であるが、規模を同じくするSB 01-Cがこれらをもつことから、SB 01-Bにも存在したとした。SB 01-Bに伴う柱穴からは縄文土器1点、弥生土器2点が出土した。図示出来たのはSP 29から出土した169のみである。169は縄文土器である。いわゆる織維土器である。外面には綾杉状の縄文が施こされている。焼成はやや悪く、胎土には径0.5~5mmの細礫を少量含み、脆い。外面は明灰橙色~淡灰茶色、内面は明白茶色、断面は暗褐色を呈する。

SB 01-CはSB 01-Bと同じ竪穴で建替えられたものである。壁に沿う深さ5cm前後の壁体溝、中

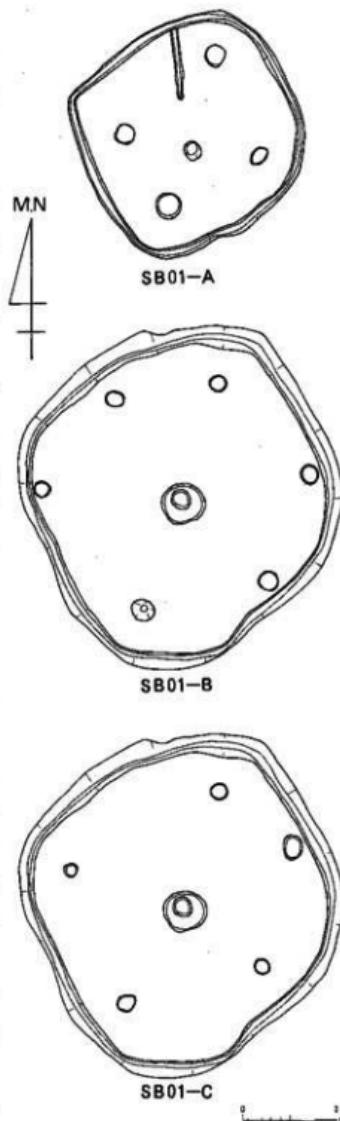


図21 SB 01変遷図

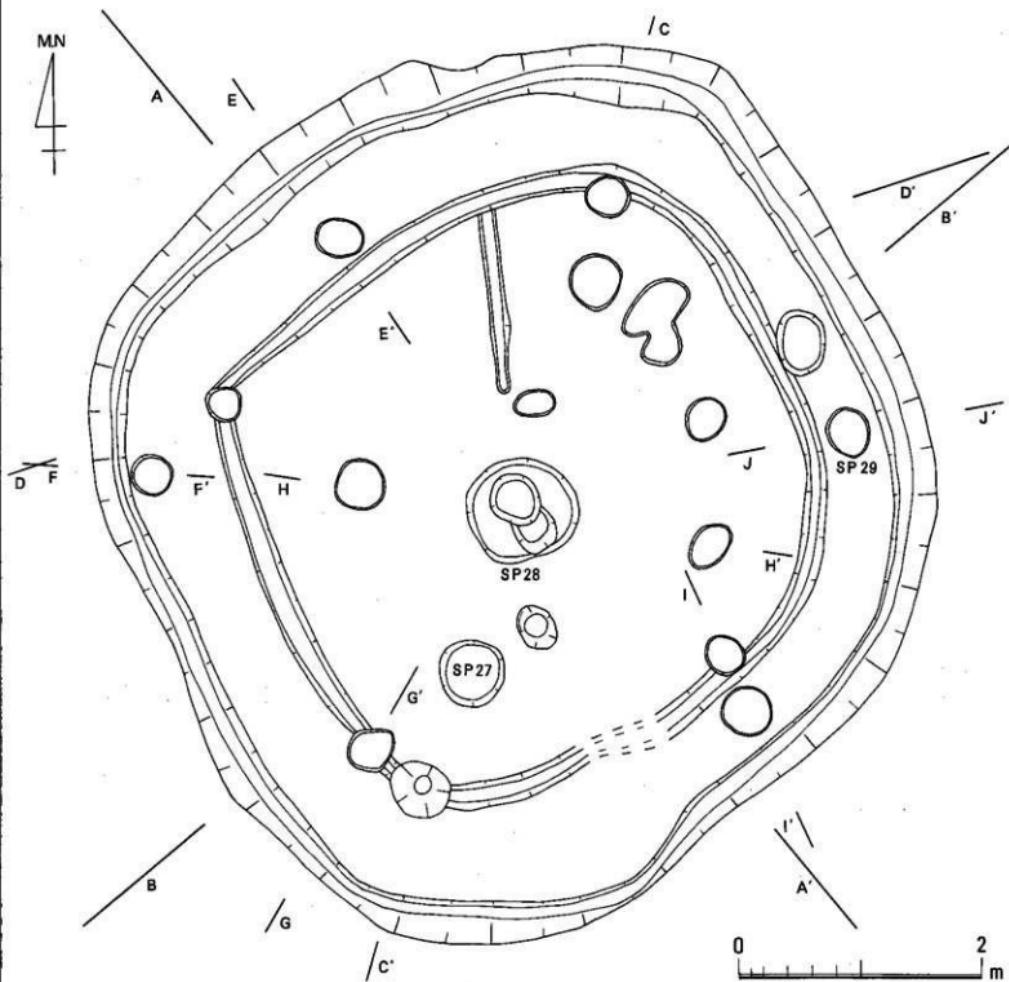


图18 SB01 平面图

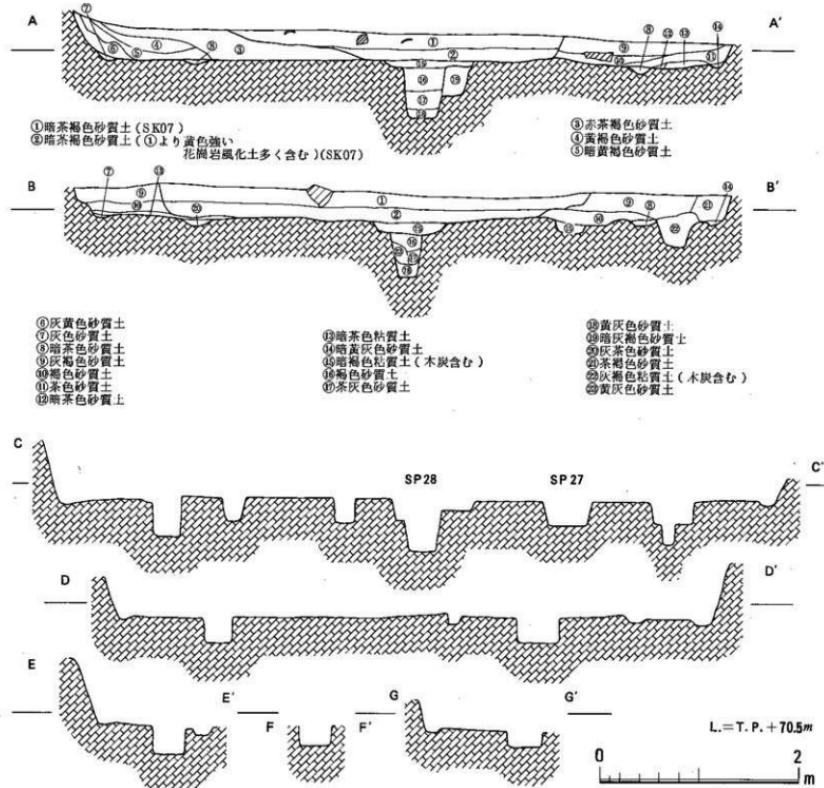


図19 SB01 断面図(1)

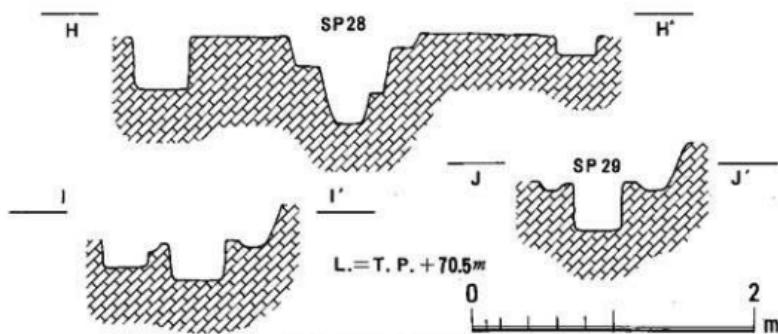


図20 SB01 断面図 (2)

央穴をもつ5本柱の住居である。中央穴はSB01-Aのもの北西に掘替えられている。検出面から床面までは最深で73cmである。柱穴、中央穴の埋土に木炭を含むものがあることから、火災を受けた可能性がある。壁体溝はSB01-Aのもの外側1m前後のところに掘削されている。中央穴、SP28からは弥生土器片が少量出土した。図示出来たのは168のみである。168は直立する頸部を持つ壺の肩部である。頸部には残存部で2条の凹線が施されている。外面にはへら磨き調整、頸部内面にはよこなで調整が施されている。頸部内面には成形時の圧痕が残存している。

また、SB01の埋土からは弥生土器が出土した。162・163は鉢である。162は内堀しながら立ち上がる体部に、外反する口縁部をもつ。口縁部と体部内面にはよこなで調整、外面にはなで調整が施されている。163はくの字形に組曲して立ち上がる体部に、外反する口縁部をもつ。内面にはへら磨き調整、口縁部外面にはよこなで調整、体部外面には疎らに粗いはけ目調整が施されている。164は口縁部である。端部は水平に拡張されている。165・166は器台の口縁部である。端部は上下に拡張されている。端面に2条の凹線が施されている。

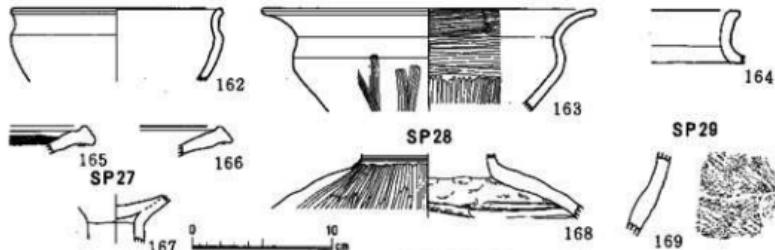


図22 SB01出土遺物実測図

S B01とそれに伴うSK07の時期は、S B01が弥生時代中期後葉から後期前葉に、SK07が後期後半に位置付けられよう。

S B02は調査区北東角で検出した。床面に多量の炭化材と焼土が残存していた。炭化材の遺存状態は良く、柄穴かと思われる方形の穴が穿かれているものも見られた。S B02の東側は後世に削られ、北側は調査地外へ広がっているため、検出出来たのは全体の4分の1である。全体の平面は1辺4.2mの方形と思われる。検出面から床面までは最深で20cmである。壁に沿って深さ5cm前後の壁体溝をもつ。中央穴付近は特に熱を受けた様で、地山までが赤変していた。埋土からは土師器片が2点出土した。炭化材と床面との間から170の須恵器が1点出土した。170は杯蓋である。口縁部は内傾しながら立ち上がる。端部には段をもつ。天井部との境の縁は形骸化し、凹線によって浮き出されている。口縁部外面に自然釉が付着している。

S B02の時期は6世紀前葉に位置付けられよう。

流路は調査地西半と南東辺で検出した。

S D01・02は調査地北辺中央の湧水点に源を発し、すぐに直角に流向を変え、南西へ延びSD03と合流する流路である。本来は一体のものであるが、遺物の取り上げ都合上、ほぼ中央でSD01・02に分けた。

S D04は調査地南西辺中央から北東へ延び、SD03に続く流路である。調査地外は後世の削平によって消滅している。

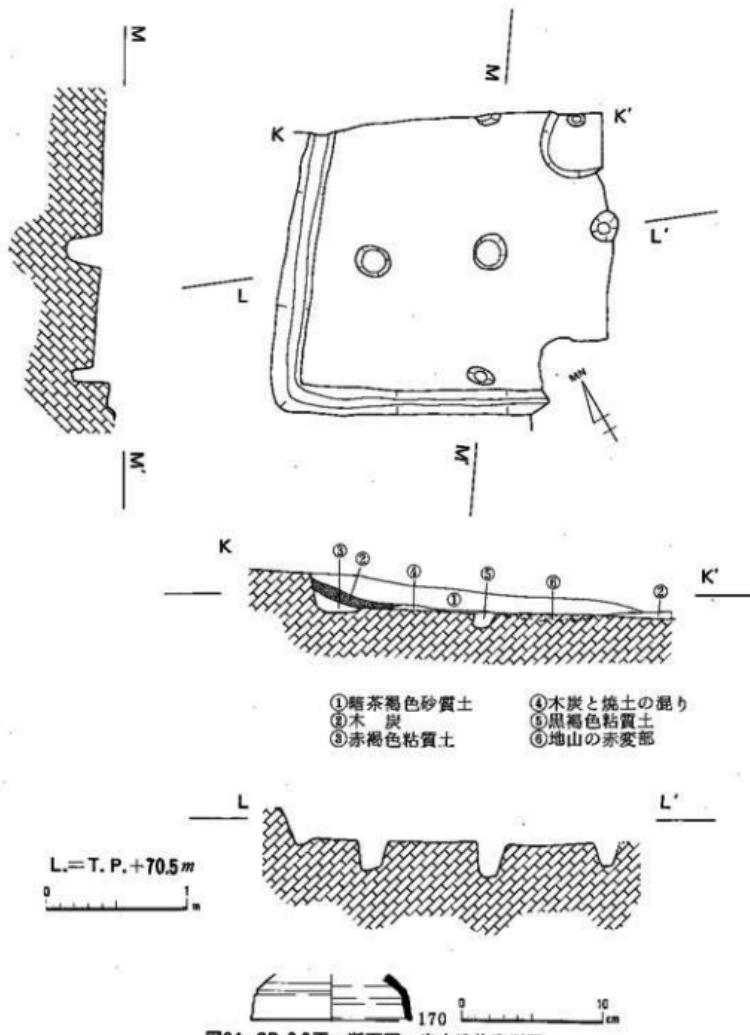
SD03はSD04の延長で、SD02との合流点から直角に南東へ流向を変え、調査地中央で終わる流路である。

当初、その規模からSD01～03の流路が主と考えていたため、SD02と03の境、SD02と04の境を図14の点線、SD04の土層断面実測ラインに設定した。『SD02出土』として取り上げた遺物の中には、SD03に属するものも含まれている可能性がある。

SD01はSD02へ続く幅1.7m、深さ0.4m前後の流路である。SD01から直角に分かれて、南東へ延び、SK07に至る幅0.5m、深さ0.2m前後の流路も検出した。遺物は出土しなかった。SD01の埋土は暗褐色粘質土が主である。埋土からは弥生土器、土師器が出土した。171～173は壺の胴部上半から口縁部である。端部は内傾しながら上方に引き上げられ、4～5条の凹線文が施されている。下端はやや突出している。口縁部にはよこなで調整、胴部外面に



図23 SB02炭化材検出状況平面図



は粗いはけ目調整、内面にはへら削り調整が施されている。174は高杯の脚柱部である。脚部差し込み技法である。外観は細長い。全体に厚手で、作りは粗く、接合部には圧痕が残している。175は高杯の口縁部である。表面磨滅のため調整は不明である。胎土は精良である。

176は高杯の脚部である。脚部差し込み技法である。脚部はやや内彌しながら立ち上がる。脚柱部は短い。端部にはよこなで調整、外面にはへら磨き調整、内面にはなで調整が施こされている。脚柱部では原体の押圧が強過ぎたためか、粗いはけ目調整状を呈している。胎土は精良である。外面に丹塗り痕かと思われるものが見られる。177・178は脚端部である。外面にはへら磨き調整、内面にはなで調整が施こされている。胎土は精良である。178の端部外面には1条の凹線が施こされている。179は口縁部である。端部外面に1条の突帯が貼付けられ、その下に数条の凹線文が施こされている。胎土には径0.5~1.5mmの砂粒を含む。焼成は良く、表面は暗灰肌色、断面は暗黄灰色を呈する。

S D01の最下層からは弥生土器、土師器の細片が少量出土した。図示出来たのは、180の口縁部のみである。わずかに外反している。胎土は精良である。表面磨滅のため調整は不明である。

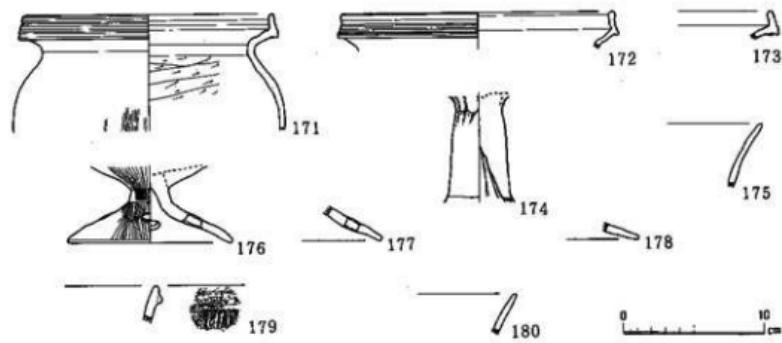


図25 SD 01出土遺物実測図

SD 02はS D01に続き、直角に南東へ流向を変えながら、S D03と合流する流路である。幅2.1m、深さ0.25m前後である。底面はS D01から02にかけて緩やかに傾斜している。S D03との切り合いは不明である。前述の様に、検出時の誤りから、S D03の遺物の一部を、「S D02出土」として取り上げてしまった可能性がある。埋土は暗褐色粘質土が主である。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

181~211は弥生土器である。181は短頸壺である。外反しながら立ち上がる頸部と胴部との境に断面三角形の突帯が貼付けられている。頸部外面には粗いはけ目調整が施こされた後、右回りに4条の凹線文が描かれている。突帯の下には2ヶ所1組の竹管文をほば等間隔に4ヶ所に施文している。182~188は壺、または甕の口縁部である。182の端部は上下にやや拡張されている。胴部内面には成形時の圧痕が残存している。183も同様である。184は屈曲してほぼ水平に開く口縁部である。端部は上下にわずかに拡張されている。185の口縁端部はやや

下方に引き出されている。186～189も同様のものである。186の口縁端面には3条の凹線文が施こされている。185・186・188の端面にも凹線文は施こされていたのであろうが、磨滅のため観察出来ない。189の口縁端部上端はわずかに突出している。190の口縁端部は下方に引き出された後、上方に折り返すことによって面を成し、そこへ凹線文が施こされている。内面には粗いはけ目調整状のものが残存している。191の口縁端部は下方にやや拡張されている。端面には2条の細い凹線文が施こされている。192は厚手の口縁部である。193は外反しながら大きく開く口縁部である。端部は拡張され、端面には2条の凹線文が施こされている。194の口縁部は直立気味に立ち上がる。端部は上下に拡張され、端面には4条の凹線文が施こされている。胸部内面にはへら削り調整が施こされている。195・196の口縁端部は水平に折り曲げられ、3条の凹線文が施こされている。197は球形の腹部上半から屈曲して広がる口縁部である。端部は内傾して、上方に引き上げられ、5条の凹線文が施こされている。口縁部にはよこなで調整、胸部内面にはへら削り調整が施こされている。198も同様のものである。199～206は底部である。199は平底から大きく広がりながら腹部が立ち上がる。200はやや上げ底である。201の底面と内面には成形時の凹凸が残存している。203は厚手の底部から急に胸部が立ち上がる。内面にはへら削り調整が施こされている。204はやや上げ底で、底部は突出気味である。205の底面周囲は高台状に突出している。206は底面から緩やかに胸部が立ち上がる。内外面に指頭圧痕が残存している。119～205に比して胎土は良い。207は高杯の脚柱部である。円板充填技法である。器壁は厚手である。脚柱部が短いため、どっしりしている。外面には粗いはけ目調整が施こされている。208は高杯である。完形に復元出来た。口縁部は外反している。脚端径は口径のはば2分の1である。脚柱部は極めて短かい。差し込み技法である。杯部内面と外面にはへら磨き調整、脚部内面にははけ目調整が施こされている。胎土は精良である。丹塗りが施こされている。209は口縁部である。外面には疎らになで調整が施こされているが、成形時の凹凸が残存している。内面にははけ目調整が施こされている。210は器台である。くびれ部には長円形の透し穴が5ヶ所開かれている。間隔は一定していない。透し穴間には縱方向の沈線文、上下には凹線文が施こされている。施文は粗く、線の重み、重なりが見られる。透し穴、凹線文、沈線文の順に施こされている。内面には成形時の圧痕が残存している。211は直口壺の口縁部である。やや外反しながら立ち上がる。外面にはへら磨き調整、端部内面にはよこなで調整が施こされている。内面には成形時の圧痕が残存している。胎土は精良である。外面には丹塗りが施こされている。

212～220は土師器である。212～216は壺、または甕の口縁部である。212は外反する口縁部である。端部は上下にわずかに拡張され、面を成している。内面下端にははけ目調整、他にはよこなで調整が施こされている。表面調整後、5条の凸線をもつ三角形文のスタンプ文が

施文されている。外面胴部との境付近、口縁端面、口縁端部内面に1列ずつ施文されている。外面は下向き、内面は上向きである。上から見て、外面は右回りに、内面は左回りに施文されている。213の口縁部はほぼ直立して立ち上がり、端部は外反し、丸く納められている。器壁は厚手である。よこなで調整が施されているが、外面には成形時の圧痕が残存している。214はやや長脚の腹部に、外反する口縁部をもつ。端部はわずかに内巻し、丸く納められている。口縁部にはよこなで調整、胴部内面にはへら削り調整が施されている。215は外反しながら立ち上がる口縁部である。端部はわずかに拡張され、丸く納められている。口縁部にはよこなで調整が施されている。腹部内面には成形時の圧痕が残存している。216は外反する口縁部である。外面には端部を外方へ折り曲げた際の圧痕が残存している。鉢の口縁部であろうか。217は鉢の体部上半から口縁部である。口縁部は屈曲して開く。わずかに外反している。口縁部にはよこなで調整、体部内面にはへら削り調整が施されている。218~220も同様のものであろう。220は口縁部の屈曲が強いため、外面に粘土のしわを生じている。

221は手捏ねの鉢である。内外面ともなで調整が疎らに施されているが、成形時の指頭圧痕が全面に残存している。粘土には径0.5~2mmの細謹を含む。

222は口縁部である。残存部で2ヶ所穿孔されている。よこなで調整が施されている。端部外面に2条の凹線状のものが施されている。

223は高杯の脚部である。細い脚柱部から端部は水平に大きく開く。差し込み技法の杯部との接合部には粗いはけ目調整、端部にはよこなで調整が施されている。外面には指頭圧痕、内面には成形時の圧痕が残存している。

224~226はいわゆる早島式土器碗である。224は貼付け高台の底部である。高台は断面三角形を呈する。回転よこなで調整が施されている。225~226は口縁部である。225の器壁は薄く、端部は外反している。回転よこなで調整が施されている。

227~232は須恵器である。227は杯蓋である。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く納められている。口縁部と天井部の境の継ぎはほとんど見られない。228は平底の杯である。体部はわずかに内巻しながら立ち上がる。口縁端部はやや肥大している。底面には成形時の圧痕が残存している。体部には回転ヨコナデ調整が施されている。229も同様の口縁部である。端部は薄く、外反している。230は平底の底部である。底面には粘土圧痕が残存している。体部には回転ヨコナデ調整が施されている。焼成はやや悪い。231は甕の体部であろう。外面には格子目叩きの後、疎らにナデ調整が施されている。内面には同心円叩きが残存している。

S D02の最下層からは弥生土器、土師器の細片が少量出土した。232は甕の口縁部であろう。端部は水平に引き出されている。残存部で1ヶ所穿孔されている。233は口縁部である。端部は水平に引き出されている。焼成はやや悪い。234は脚端部である。外面にはへら磨き調整、

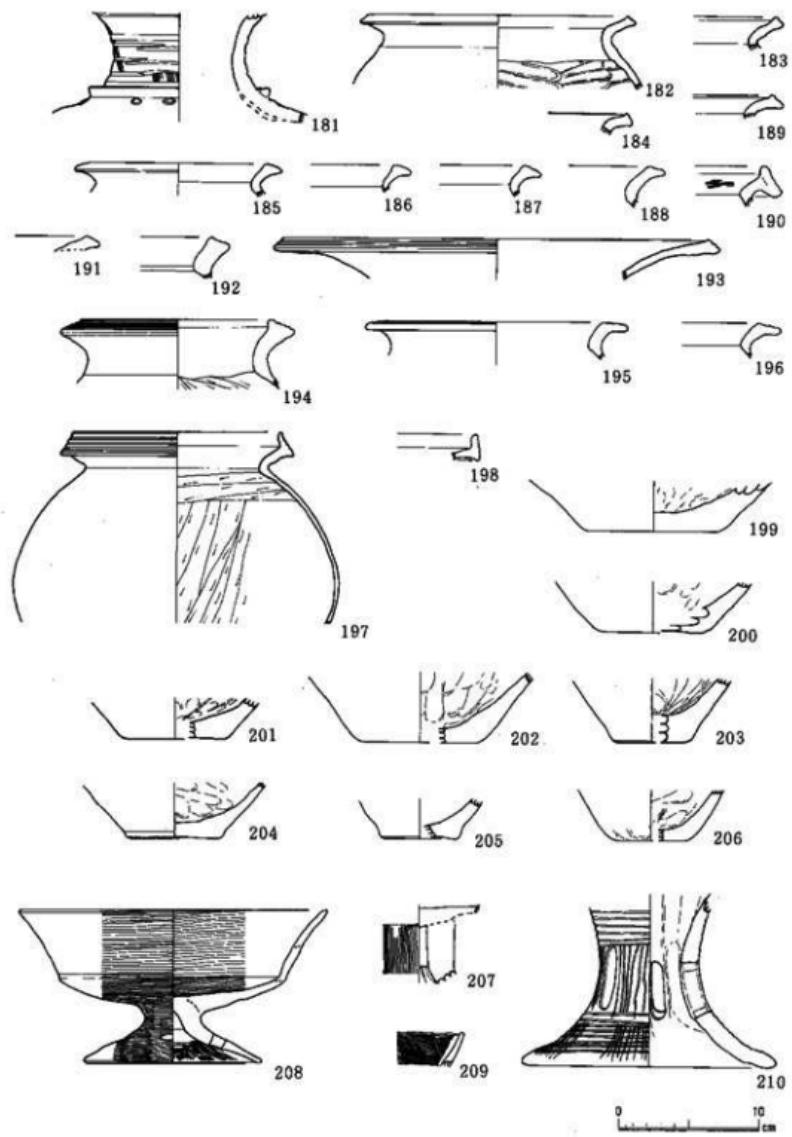


图26 S D 02出土遗物实测图 (1)

内面にはなで調整が施されている。胎土は精良である。

S D03は、北東からのS D02、南西からのS D04の流れを合わせて、南東へ向う路である。  
幅 3.1 m、深さ 0.9 m前後であるが、検出面が南へ傾斜しているため、南東へ行くにつれ、深

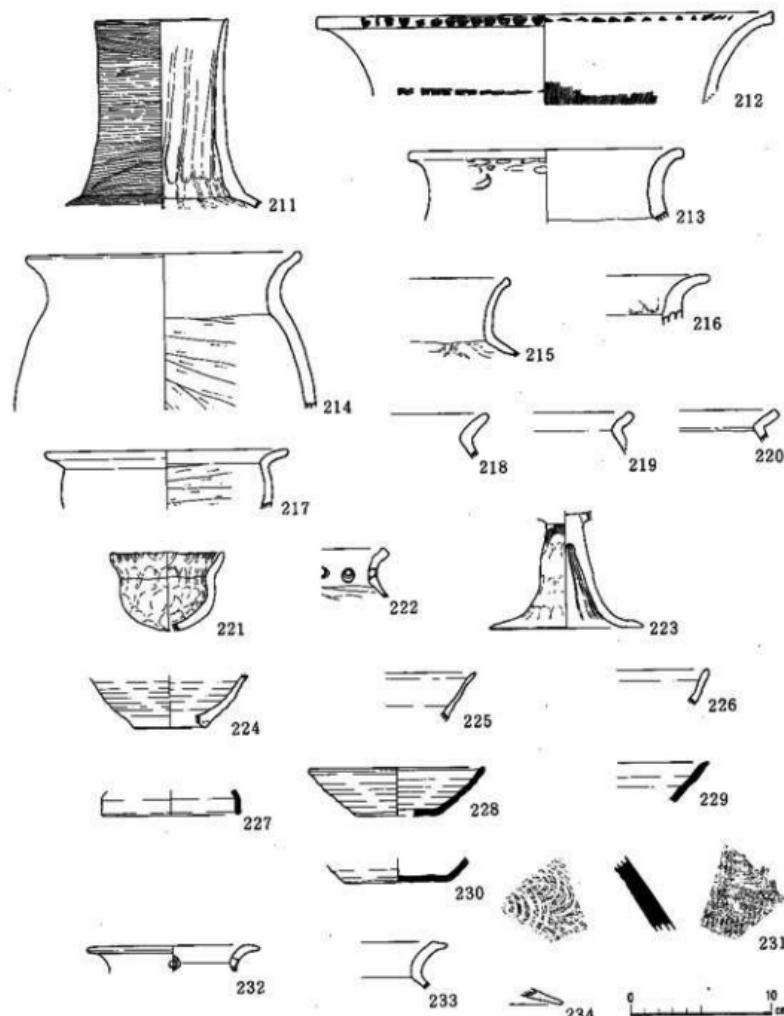


図27 S D02出土遺物実測図 (2)

きを減じ、調査地は

ば中央で消滅する。

S D02との切り合い

は不明である。埋土

からは弥生土器が出

土した。

235は彎曲する口

縁部をもつ壺である。

口縁部はよこなで調

整時の押圧のため凹

凸が著しい。端部は

わずかに上方に拡張

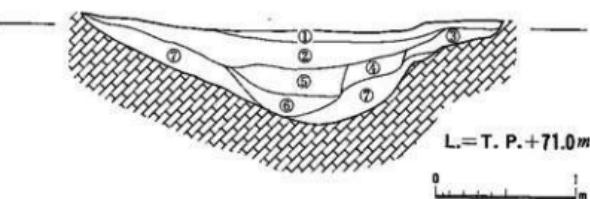


図28 S D 03土層断面図

されている。肩部外面にはけ目調整、内面にはへら削り調整が施されている。236は厚手の口縁部をもつ壺である。端部は上方に引き上げられている。口縁部にはよこなで調整、肩部外面には粗いはけ目調整、内面にはへら削り調整が施されている。237~239は壺の口縁部である。237~238の端部はよこなで調整の押圧によって拡張されている。239の端部は上方に引き上げられ、端面には2条の凹線が施されている。表面には丹塗りが施されている。図示していないが、この口縁部は折れる様に屈曲して肩部に続く。肩部は球形に大きく膨らむ様である。外面にはへら磨き調整、内面にはへら削り調整が施されている。胎土には径0.5~3mmの細礫を含む。外面には丹塗りが施されている。240は壺である。肩部の最大径部は中央より上である。口縁端部は内傾しながら、上方に引き上げられ、5条の凹線文が施されている。下端も下方に拡張されている。口縁部にはよこなで調整、肩部外面にはへら磨き調整、内面にはへら削り調整が施されている。241~248は底部である。241は平底である。外面にはへら磨き調整が施されている。242の底面は凹凸が著しい。外面にはなで調整、内面にはへら削り調整が施されている。244の器壁は薄い。焼成はやや悪く、表面磨滅のため調整は不明である。245の底部はやや突出し不安定である。外面は底面にまでへら磨き調整が施されている。246は小さな底部から緩やかに肩部が立ち上がる。底面から肩部にかけて外面にはへら磨き調整、内面にはけ目調整が施されている。胎土は精良である。247の底部はわずかに突出し不安定である。外面には粗いはけ目調整、内面にはへら削り調整が施されている。248の底面は突出し丸底に近い。外面にはへら磨き調整が施されている。249~254は高杯の杯部である。249~253は外反する、254はわずかに外反する口縁部である。内外面ともへら磨き調整で仕上げられている。胎土は精良である。249~250~252~253には丹塗りが施

されている。251の器壁は他に比して厚手である。口縁部と体部との境に段をもつ。255～258は高杯の脚端部である。255の器壁は厚手で、端部は水平に引き出されている。円形の透し穴が残存部で2段に穿かれている。復元すると、それぞれ7ヶ所穿孔されているようである。256は外面にはへら磨き調整、内面には粗いはけ目調整が施こされている。胎土は精良である。外面には丹塗りが施こされている。257・258も同様のものである。259は高杯の脚部である。円筒状の脚柱部をもつ。脚部差し込み技法で内面には棒状工具痕が残存している。杯部外面に粗いはけ目調整が見られる他は表面磨滅のため調整は不明である。260・261は高杯の脚部である。差し込み技法の短い脚柱部をもつ。脚部内面にはなで調整。他にはへら磨き調整が施こされている。胎土は精良である。261の外面と杯部内面には丹塗りが施こされている。262・263は脚端部と思われる。外面にはへら磨き調整、内面にはなで調整が施こされている。胎土は精良である。264～270は碗である。264は半球状の器形である。外面下半にははけ目調整、他にはなで調整が施こされている。胎土は精良である。265の口縁部は垂直に引き上げられている。胎土には砂粒が多いため、重い。266の口縁部はわずかに外反しながら引き上げられている。口縁部にはよこなで調整、体部外面にははけ目調整が施こされている。267の口縁部もわずかに外反しながら引き上げられている。内外面ともへら磨き調整が施こされている。胎土は精良である。外面には丹塗りが施こされている。268も同様のものである。体部がやや深い。269は口縁部である。わずかに内彎している。内外面ともへら磨き調整が施こされている。胎土は精良である。表面には丹塗りが施こされている。271は半球形の体部に水平に開く口縁部をもつ。端部は上方に引き上げられている。口縁部から体部上半にはよこなで調整、体部下半外面にははけ目調整が施こされている。内面には指頭圧痕が残存している。271は台付壺であろう。器壁は厚手である。低くしっかりした脚台に球形の脚部が乗る。外面にはへら磨き調整、脚部内面には粗いはけ目調整が施こされている。くびれ部と脚端部には成形時の指頭圧痕が残存している。272～275も台付壺であろう。272は脚部下半である。内外面ともへら磨き調整が施こされている。273はくびれ部である。外面にはへら磨き調整が施こされている。焼成はやや悪い。胎土は精良である。274は脚部上半から脚部下半である。脚部は大きく開いている。短い脚柱部をもつ。脚部外面にはへら磨き調整、内面には粗いはけ目調整が施こされている。胎土は精良である。275はハの字形に開き、高い脚部である。外面にはへら磨き調整、内面にはへら削り調整が施こされている。外面には丹塗りが施こされている。276は直口壺である。扁平な球形の脚部に外反する口縁部をもつ。口縁端部外面には1条の凹線が施こされている。内面には粘土の接合痕が残存している。外面にはへら磨き調整、内面上半には粗いはけ目調整、下半にはよこなで調整が施こされている。胎土は精良である。277は台付壺である。扁平な球形の脚部に短い脚柱部をもつ。脚柱部に重みがある。脚部差し込み技法である。外面にはへら

磨き調整、内面にはなで調整が施されている。脚部内面には工具痕が残存している。胎土は精良である。278は台部である。端部は摘まみ出されて形成されている。279は高台状の台部である。成形時の指頭圧痕が残存している。280は広口壺の口縁部である。端部は外反しながら上方に引き上げられている。内外面ともへら磨き調整が施されている。胎土は精良である。281も同様のものである。内外面ともへら磨き調整が施されている。胎土は精良である。282の口縁端部もやや外反しながら上方に引き上げられている。口縁部にはへら磨き調整、体部内面にはへら削り調整が施されている。鉢であろうか。283は小型の壺の脚部下半であろう。外面にはなで調整が施されている。内面には成形時の圧痕が残存し、凹凸が著しい。胎土は粗い。284は小堀の鉢である。半球状の体部にやや内彎しながら開く口縁部をもつ。口縁部にはよこなで調整、体部外面にはけ目調整が施されている。内面には指頭圧痕が残存している。285は直口壺である。丸底で扁平な球形の脚部に、やや内彎しながら開く口縁部をもつ。外面は底面にへら削り調整後なで調整が施されている他はへら磨き調整が施されている。内面は脚部下半に粗いはけ目調整、上半にへら削り調整、口縁部になで調整が施されているが、成形時の圧痕や粘土の接合痕が残存している。胎土は精良である。焼成後、口縁部外面上半に極細い線で絵画が描かれている。絵画は左から右へ数条の並行して蛇行する横線を描いた後、一番上と二番目の線間に、それと直交する縱線を描いている。右端では、一番上の線に接して匂状の区画を描き、その中を横線で埋めている。286は小型の台付直口壺である。浅い扁平な脚部にわずかに外反しながら立ち上がる口縁部をもつ。脚台部は差し込み技法で、内面に工具痕が残存している。外面にはへら磨き調整、内面にはよこなで調整が施されている。胎土は精良である。287～291は高杯の杯部である。287の口縁部はわずかに外反している。杯部は深い。内外面ともへら磨き調整が施されている。胎土は精良である。288～291も同様の口縁端部である。内外面ともへら磨き調整が施されている。胎土は精良である。288・290・291の表面には丹塗りが施されている。

292は壺形土器である。扁平な球形の脚部から内傾しながら頸部が立ち上がる。口縁部は欠損している。断面台形の突帯が、残存部で頸部に1条、頸部と脚部の境に1条、脚部上半に1条貼付けられている。底部は焼成前に外側から押し分ける様にして、径約7cmの円形に割り貫かれている。内面は脚部上半に粗いはけ目調整が施されている他は成形時の圧痕や粘土の接合痕が残存している。外面は脚部にへら磨き調整が施されているが、外面全面に施されていたのであろう。さらに、脚部上半から頸部にかけてスタンプ文が施文されている。スタンプ文は頸部の突帯から上に逆S字形文、竹管文、突帯の上面と側面に竹管文、突帯から下に竹管文、横方向の逆S字形文、竹管文、横方向の逆S字形文、竹管文、脚部との境の突帯側面に竹管文、突帯から下に竹管文、鳥形文、竹管文、さらに脚部の突帯から下に鳥形文である。スタ

ンプ文は右から左へ施文されている。また、竹管文が最後に施文されている。逆S字形文は幅約7mmの蛇腹状のものが逆S字形に、8の字形に巡るものである。鳥形文は幅約9mmの蛇腹状のものが径約25mmの円形を成すものを胴体とし、その一端を狭めて頸部とした部分に、径約10mmの円形の頭部が続くものである。頭部の左側には長さ約17mmのくちばしが付く。また、頭部中央には径約4mmの円形の突起で目を表わしている。竹管文は径約8mmで、太いものと細いものの2種類がある。胎土には径0.5～5mmの花崗岩起源の細礫を含む。焼成は良く、外面は淡灰赤茶色、内面は灰橙色、断面は暗灰黄色を呈する。黒斑が見られる。

293は口縁部と底部を欠損しているが、292と同様の壺形土器であろう。扁平な球形の胴部から内傾しながら頸部が立ち上がる。頸部の残存部上方に断面三角形の、下方に断面台形の突帯が貼付けられている。頸部と胴部の境と、そこから2cmほど下方に低い断面三角形の突帯状に粘土を盛上げている。内面は胴部下半に粗いはけ目調整が施こされている他は成形時の圧痕や粘土の接合痕が残存している。外面にはなで調整が施こされ、さらに、胴部上半から頸部にかけてスタンプ文が施文されている。スタンプ文は頸部の上側の突帯から上に逆S字形文、竹管文、突帯間に竹管文、一部に横方向の逆S字形文、下側の突帯の上面に竹管文、側面に4条の凸線をもつ上向きの三角形文、突帯の下に逆S字形文、竹管文、胴部の突帯状の高まりの間に横方向の逆S字形文、突帯から下に竹管文、逆S字形文、竹管文2段である。頸部の突帯側面には、竹管文を施した後、それを消す様に三角形文を施文している部分がある。スタンプ文は右から左へ施文されている。また、竹管文が最後に施文されている。293の逆S字形文は292と同じ原体と見られる。竹管文の原体は292とは異なるものを使用している。胎土には径1～3mmの花崗岩起源の細礫を含む。焼成は良く、外面は灰黄色から淡灰橙色、内面は白灰橙色、断面は明淡黄色を呈する。黒斑が見られる。

294も壺形土器の胴部上半であろう。断面台形の突帯が1条貼付けられている。内面には成形時の圧痕や粘土の接合痕が残存している。外面にはなで調整が施こされ、さらにスタンプ文が施文されている。スタンプ文は突帯から上に逆S字形文、竹管文、突帯の側面に竹管文である。竹管文が後から施文されている。294の逆S字形文の原体は292・293とは異なる。竹管文の原体は太いものと細いものの2種類がある。いずれも292と同じ原体である。胎土には径0.5～2mmの細礫を多く含む。焼成は良く、外面は白灰茶色、内面は灰肌色、断面は黒灰色を呈する。

295・296は同一個体の壺と思われる。口縁部はSD03の中層で反転して、胴部はその周辺で破片で出土した。295は球形の胴部からやや外反しながら口縁部が立ち上がる。口縁部は楕円形に歪んでいる。端部は丸く納められている。口縁部外面は中央に2条の太い凹線が施こされている。内面の対応する位置にも1条の太い凹線状のものがある。口縁部の突帯が段を模し

ているのであるか。口縁部にはよこなで調整、胴部外面には薄らに粗いはけ目調整、内面にはへら削り調整が施されている。胎土には径1mmの砂粒を含む。口縁部内面と外面のはけ目調整の溝の中に暗褐色の付着物が見られる。296は球形の胴部下半である。底部は丸底である。外面にははけ目調整、内面にはへら削り調整が施されている。胎土には径1mmの砂粒を含む。297は口縁部である。端部は面をもつ。1条の突帯が端部より下がった位置に貼付けられている。突帯は断面三角形で、刻み目が施されている。胎土には径0.5~1mmの砂粒を含む。焼成はやや悪く、外面は灰黄橙色、内面は暗黄灰色、断面は淡灰色を呈する。縄文土器であろうか。

298は花崗岩製の叩石である。半分は欠損している。周縁に打撃痕が認められる。

S D03の最下層からは弥生土器が出土した。

299は壺である。底面で横転して、ほぼ完形で出土した。口縁端部は上方に引き上げられている。胴部はやや長脛である。底部はやや突出し、不安定である。焼成後に穿孔されている。

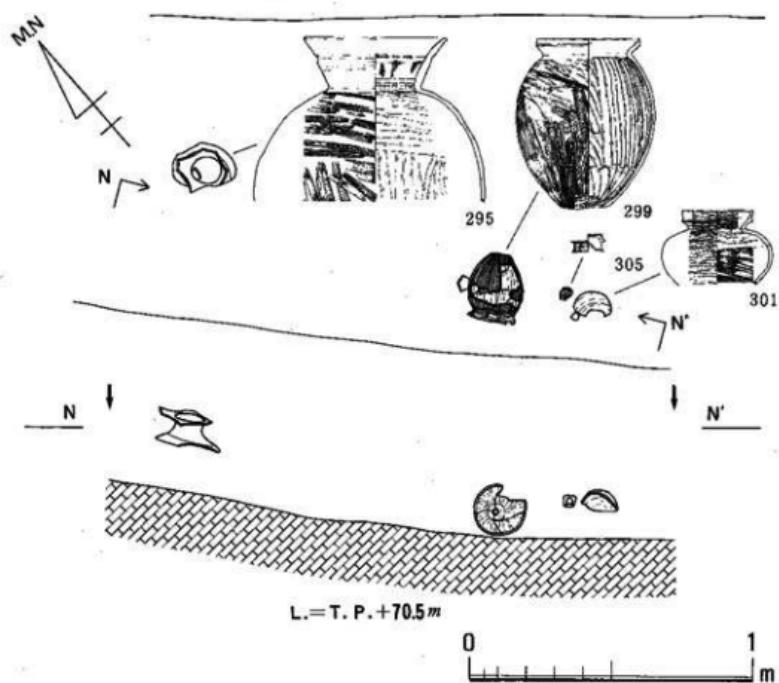


図29 S D03遺物出土状況平・断面図

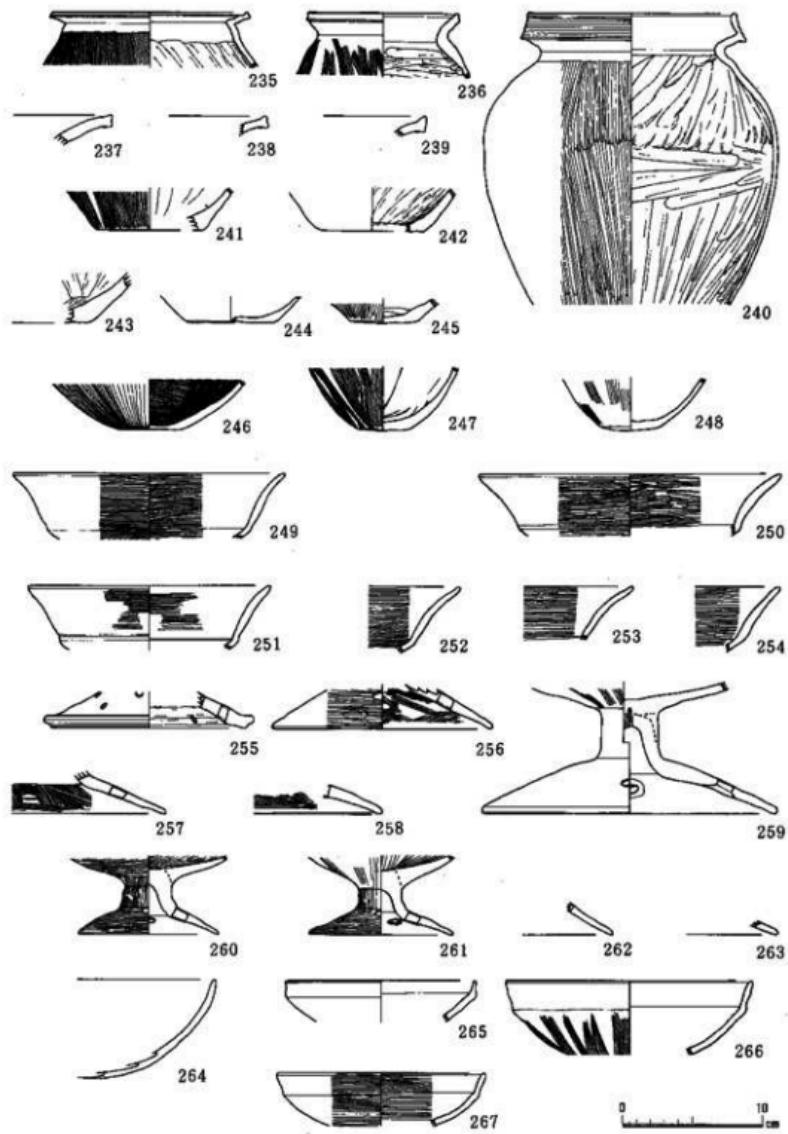


图30 SD03 出土遗物实测图 (1)

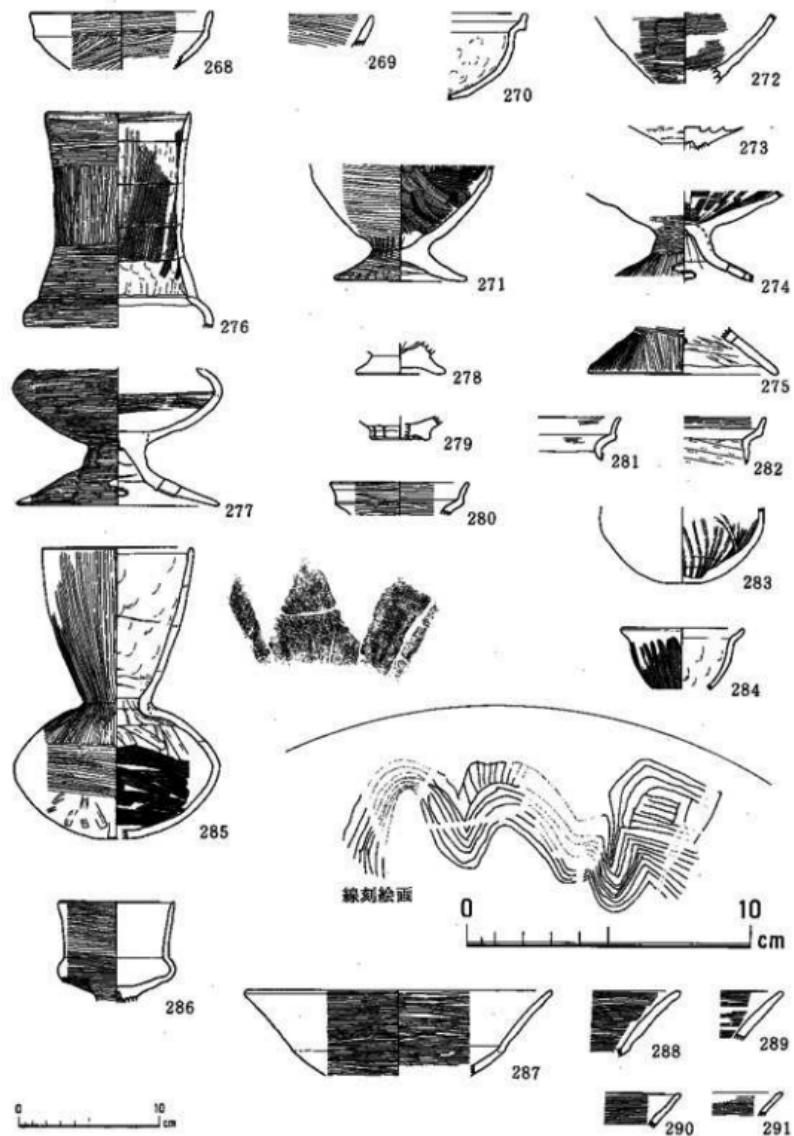


図31 S D03出土遺物実測図 (2)

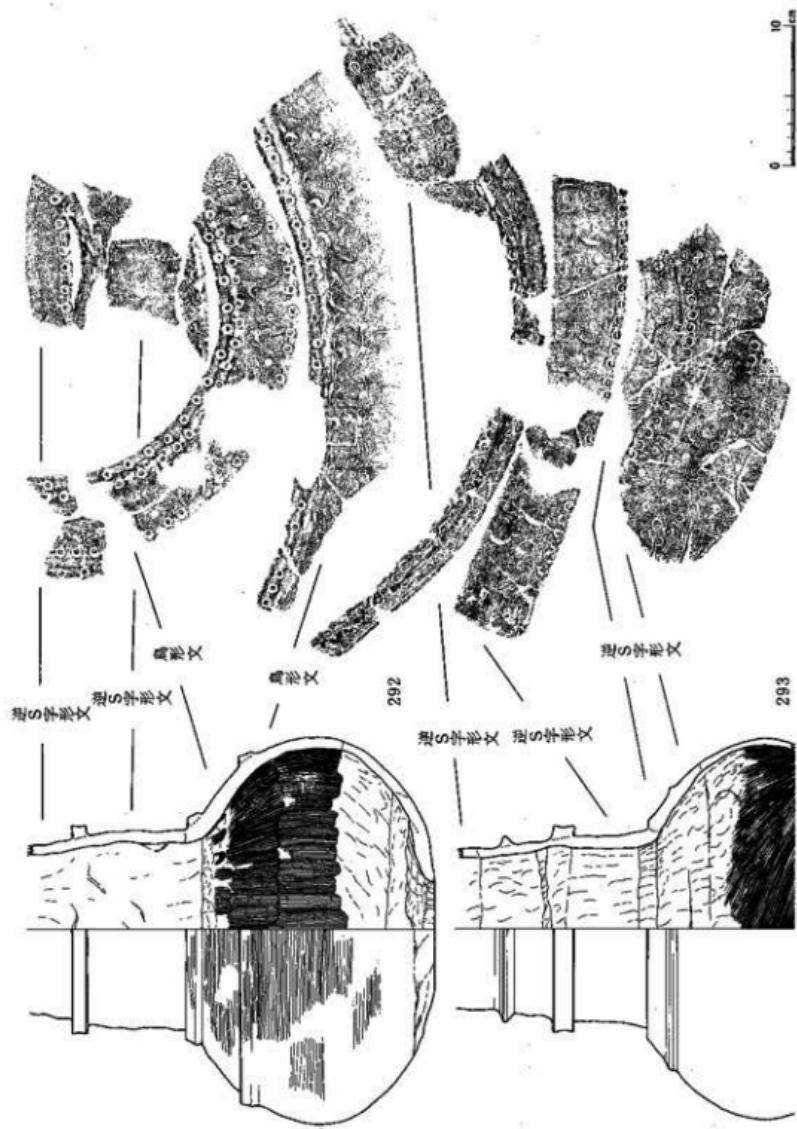


図32 SD03出土遺物実測図 (3)

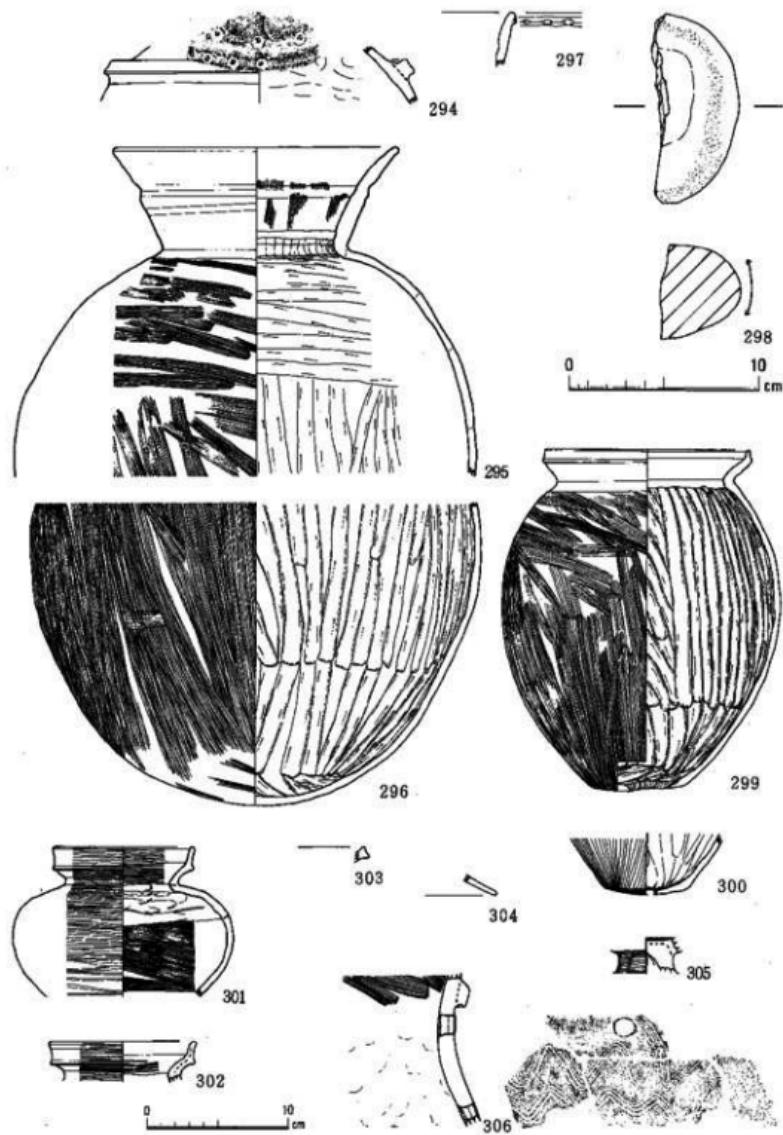


图33 SD03出土遗物实测图 (4)

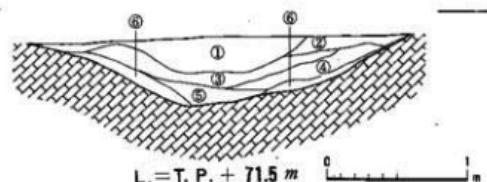
口縁部にはよこなで調整、頸部外面から底面には粗いはけ目調整、内面にはへら削り調整が施されている。黒斑をもつ。300は甕の頸部下半である。底部は突出している。頸部外面から底面にはへら磨き調整が施されている。内面には成形時の圧痕が残存している。301は広口壺である。口縁端部は上方に引き上げられている。下端はわずかに突出している。頸部は扁平な球形である。頸部外面には口縁部成形時の指頭圧痕が残存している。口縁部から頸部外面にはへら磨き調整、内面下半にははけ目調整が施されている。内面上半には成形時の圧痕が残存している。外面のへら磨き調整は底部に向かうにつれ疎らになっている。胎土は精良である。黒斑をもつ。302も広口壺の口縁部である。端部は外反しながら上方に引き上げられている。下端はわずかに突出している。内外面ともへら磨き調整が施されている。胎土は精良である。303は壺、または甕の口縁端部である。よこなで調整の押圧のためか、上下に拡張されている。304は脚端部である。外面にはへら磨き調整が施されている。胎土は精良である。305は台付壺の脚柱部であろう。脚柱部は短い。脚部差し込み技法である。脚柱部内面には工具痕が残存している。体部内面には粗いはけ目調整、外面にはへら磨き調整が施されている。胎土は精良である。外面には丹塗りが施されている。306は第2層から出土した96-97と同様の器台であろう。内焼しながら立ち上がる。下方に広がることから、脚部に近い部分であろう。残存部の上辺に1条の断面台形の突帯が貼付けられ、円形の通し穴が交互に2段に穿かれている。内面上方にははけ目調整が施されている。外面にははけ目調整の後、波状文が施文されている。波状文は4条の並行する線から成り、上下の通し穴の間に2段に施文されている。2つの波状文は同じ原体を用いて施文されている。胎土には径0.5~2mmの細縫を含む。焼成は良く、外面は白肌色、内面は灰肌色、断面は黄灰色を呈する。

SD 04は北東へ延びて SD 03に続く流路である。北東へ向うにつれ、幅、深さともに増す。

幅0.7~2.1m、深さ0.25m

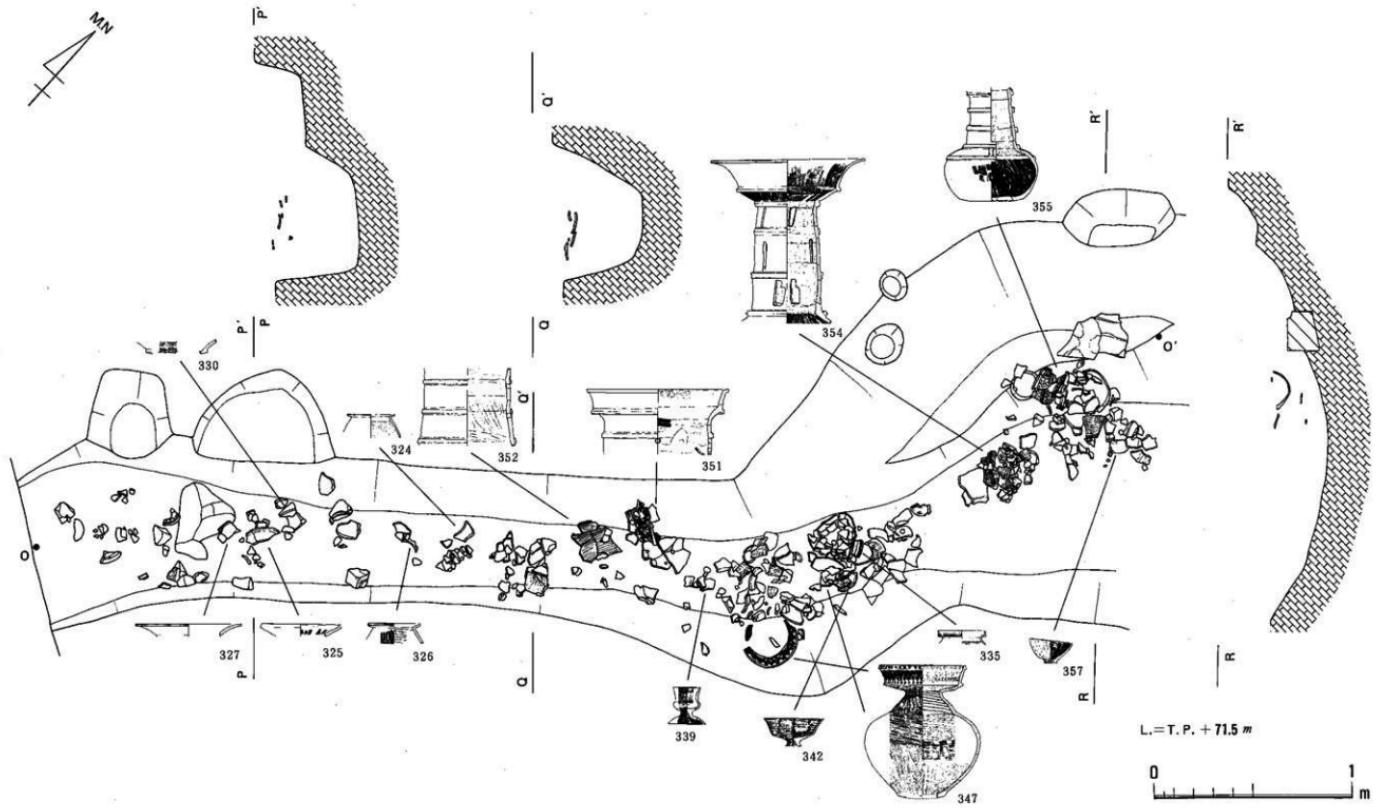
~0.5mである。SD 03との境付近では、幅も広がり、西岸の傾斜が緩やかになっていた。また、検出面で深さ20cmの崖み、

斜面上で幅20cmの平坦面を検出した。一見、階段状を呈している。その周辺では4基のピットも検出した。



- ① 暗褐色粘質土
- ② 褐色粘質土
- ③ 黑褐色砂質土（径2~3cmの角縫含む）
- ④ 灰褐色砂質土
- ⑤ 条褐色粘質土（径2~3cmの角縫含む）

図34 SD 04土層断面図



埋土からは弥生土器が出土した。SD04を半分ほど掘削した時点で、外面に特異な文様をもつ土器を多く検出したので、その出土状況を記録した。遺物はSD04の北半で多く検出した。南半では疎と混在して検出した。また、破片が多く、完形に復元出来るものは少ない。出土遺物のうち、307～321は埋土の上半、322～357は埋土の中間、359～366は最下層から出土した。

307は甕の上半である。口縁部は屈曲して、ほぼ水平に開く。端部はわずかに上方に拡張されている。口縁部にはよこなで調整、脛部外面にはなで調整が施されている。内面には指頭圧痕が残存している。308は甕の口縁部である。外反しながら開く。端部は面を成している。内外面ともよこなで調整が施された後、スタンプ文を施文している。外面のスタンプ文は下向きと上向きにかみ合う様に5条の凸線をもつ三角形文、逆S字形文である。三角形文の一部には横向きに施文されたものもある。内面のスタンプ文は下向きに2段、上向きに1段の三角形文である。内外の三角形文の原体は同じものである。逆S字形文の原体はSD03から出土した292・293とは異なるものである。309～311は底部である。309は底部から脣部が緩やかに立ち上がる。外面には粗いはけ目調整が施されている。内面には指頭圧痕が残存している。310は底面周辺が高台状に引き出されている。外面にはなで調整、内面には疎らにはけ目調整が施されている。底部には成形時の指頭圧痕が残存し、指紋が見られるものもある。311は小さな底面をもつ。外面には粗いはけ目調整、内面にははけ目調整が施されている。312は高杯の杯部である。口縁部は外反している。外面には凹凸が多い。内外面ともへら磨き調整が施されている。胎土は精良である。313は小型の台付直口壺である。浅い扁平な脣部から外反しながら立ち上がる口縁部をもつ。脚柱部は短い。脣部底面と脚柱部内面に脚部差し込み技法の工具痕が残存している。口縁部内面と外面にはへら磨き調整、脣部内面にはなで調整、脚台部内面には粗いはけ目調整が施されている。胎土は精良である。口縁部内面から外面には丹塗りが施されている。314は外反する口縁部である。下端が内側へ屈曲している。端部外面に沈線と凹線が1条ずつ施されている。胎土は精良である。表面には丹塗りが施されている。315は台付壺の下半であろう。器壁は厚手である。脚台部はハの字形に開き、高い。脣部の立ち上がりは緩やかである。脣部内面、外面には粗いはけ目調整、脚台部内面にはなで調整が施されている。脚柱部内面には絞り痕が残存している。脣部に1ヶ所内側から焼成後に穿孔されている。316は楕である。口縁部はよこなで調整の押圧のため、わずかに外反している。体部には内外面とも粗いはけ目調整が施されている。317～319も楕の口縁部であろう。317の端部はよこなで調整の押圧のため、わずかに外反している。318・319の器壁は厚手である。口縁部にはよこなで調整、体部にははけ目調整が施されている。320は薄い体部の破片である。外面には繩文、内面にはなで調整が施されている。焼成は良いが、胎土に砂粒を多く含

むため、脆い。外面は暗黄灰色、内面は淡灰色、断面は黒灰色を呈する。绳文時代前期後半に位置付けられよう。321は口縁部である。端部は丸く納められている。口縁から下がった位置に、1条の突帯が貼付けられている。突帯は断面三角形で、割み目が施こされている。焼成は良く、外面は灰肌色、内面は淡黄褐色、断面は褐色を呈する。

埋土の中層から出土した土器を取り上げるのに際して、便宜的に南から5群に分けた。322・323、324～332、333・334・351～353、335～348、349・350・354～357である。

322は壺、または甕の口縁部である。端部はわずかに上下に拡張されている。323は高杯の杯部口縁部である。外反している。外面には凹凸が多い。内外面ともへら磨き調整が施こされている。胎土は精良である。表面には丹塗りが施こされている。

324は甕の上半である。307に似る。口縁部は脣部から屈曲して聞く。器壁は薄手である。口縁部にはよこなで調整が施こされている。脣部内面には指頭圧痕が残存している。325は壺の口縁部である。大きく開き、端部は上方に引き上げられている。内面に粗いはけ目調整が施こされている他はよこなで調整が施こされている。胎土は粗い。326は甕の上半である。口縁端部は上方に引き上げられ、外面に2条の凹線が施こされている。口縁部にはよこなで調整、脣部外面にははけ目調整、内面にはへら削り調整が施こされている。胎土には砂粒を多く含む。327は甕の口縁部である。外反しながら大きく聞く。端部は丸く納められている。下端は下方へ延びている。内外面ともよこなで調整が施こされている。328・329は壺、または甕の口縁部である。328は大きく開き、端部は面をもつ。329の立ち上がりは緩やかで、端部は丸く納められている。330は段を成して聞く口縁部である。内面にはなで調整、外面にはよこなで調整が施こされ、へら磨き調整状のものも見られる。327と同一個体の可能性がある。二重口縁の口縁部であろうか。331は直口壺の口縁部である。やや内反しながら立ち上がる。口縁部にはよこなで調整、外面にはへら磨き調整、内面にははけ目調整が施こされている。胎土は精良である。口縁部内面から外面には丹塗りが施こされている。332は高杯である。楕円形の杯部をもつ。口縁端部は外反しながら上方に引き上げられている。脚柱部は極めて短い。脚部差し込み技法である。杯部内面には粗いはけ目調整後へら磨き調整、外面にはへら磨き調整、脚部外面にははけ目調整後へら磨き調整、内面には粗いはけ目調整が施こされている。胎土は精良である。杯部内面から外面には丹塗りが施こされている。

333は底部である。わずかに突出している。334も底部である。底面周囲は高台状に摘み出され、その指頭圧痕が残存している。脣部外面には粗いなで調整、内面にははけ目調整が施こされている。

351・352は器台である。SD04の西側斜面で隣接して、押し潰された様な状態で出土した。

351は口縁部である。口径を復元すると43.1cmにもなる。口縁部は外反し、さらに上方に立

ち上がる。端部はほぼ水平に折り曲げられている。下端も斜め下方に拡張されている。腹部に断面長方形の突帯を1条貼付けている。口縁部から体部外面にはよこなで調整が施されている。体部内面にはなで調整と疊らにはけ目調整が施されているが、成形時の圧痕が残存している。表面調整後、口縁端部内面から外面全面に文様が施文されている。文様は、口縁端部が折り曲げられたため、上方を向いた端部内面に3条の並行する波状文、口縁端面に3条の凹線文、口縁部外面上半に5条の並行する波状文が2段、突帯状に突出した下端の上面に刺突文、口縁部から体部にかけて20数条の凹線文、突帯上方と突帯側面に刺突文、突帯下方の一部に5条の凸線をもつ下向きの三角形文のスタンプ文、径10mmの竹管文のスタンプ文、さらに4条の並行する波状文が2段である。施文後に体部の突帯直下に径約12mmの円形の透し穴が穿かれている。口縁部外面の波状文の原体と口縁部から体部にかけての凹線文の原体は同じである。胎土には径1～3mmの細謹を含む。焼成は良く、外面は灰橙色、内面は淡灰橙色を呈する。

352は体部である。下方に開いている。残存部で断面台形の突帯を3条貼付けている。外面には粗いはけ目調整の後、全面に施文されている。内面には成形時の圧痕が残存している。文様は、上から、5条の並行する波状文が2段、一部に突帯のすぐ上方に5条の凸線をもつ下向きの三角形文、突帯の上面と側面に刺突文、5条の並行する波状文、3条の並行する波状文、突帯の上面、側面、一部の下面に刺突文、4条の並行する波状文が2段、突帯の上面に刺突文、側面に3条と思われる並行する波状文、突帯の下に波状文である。文様は左から右へ施文されている。施文後に突帯直下に径約14mmの円形の透し穴が穿かれている。波状文の原体は、条数によって各々異なる。胎土には径0.5～5mmの花崗岩起源の細謹を含む。焼成は良く、外面は暗褐色～黄褐色、内面は淡灰茶色、断面は茶灰色を呈する。

353も体部の破片であろう。1条の低い突帯が貼付けられている。内面上半にははけ目調整が施されているが、下半には指頭圧痕が残存している。外面にはなで調整の後、施文されている。文様は5条の凸線をもつ下向きの三角形文、突帯の上面、側面、下面に刺突文、突帯の下方に上と同じ三角形文、一部にそれに重ねて径約9mmの竹管文、さらに下に波状文である。胎土には径0.2～2mmの細謹を含む。焼成は良く、外面は灰褐色、内面は暗灰橙色、断面は灰茶色を呈する。

355は甕の口縁部である。端部は上方へ引き上げられている。外面には5条の凹線文が施されている。口縁部から脛部外面にはよこなで調整、内面にはへら削り調整が施されている。

336は大きく開く口縁部である。端部は面をもつ。端部内面には凸線をもつ下向きの三角形文のスタンプ文が2段施文されている。337は底部である。器壁は厚手である。外面にはへら磨き調整、内面にはなで調整、底面にはなで調整が施されている。外面に黒斑をもつ。338も底部である。器壁は薄い。内面には指頭圧痕が残存している。胎土には砂粒を多く含む。339

は小型の台付直口壺である。浅い扁平な胴部から外反しながら立ち上がる口縁部をもつ。脚柱部は短い。脚台部は楕を伏せた様に、内彎しながら立ち上がる。胴部下半に1ヶ所焼成後に内側から穿孔されている。口縁部内面、外面にはへら磨き調整、胴部内面にはなで調整、脚台部内面には粗いはけ目調整が施こされている。胎土は精良である。口縁部内面から外面には丹塗りが施こされている。340は高杯の下半である。杯部はやや内彎している。脚部差し込み技法である。脚柱部は短い。杯部内面、外面にはへら磨き調整、脚部内面にはなで調整が施こされている。胎土は精良である。杯部内面、外面には丹塗りが施こされている。341・342は高杯である。脚部を欠損している。341の方が小型で、器壁が厚い。口縁部は外反している。脚柱部は短い。342は杯部からすぐに脚部が開き、脚柱部が明確でない。杯部内面、外面にはへら磨き調整が施こされている。脚柱部内面には絞り痕が残存している。胎土は精良である。杯部内面から外面には丹塗りが施こされている。343・344は高杯の口縁部である。343の器壁は厚手で、外反しながら立ち上がる。内外面ともへら磨き調整が施こされている。344の器壁は薄く斜め上方に真直ぐ立ち上がる。内外面ともへら磨き調整が施こされている。胎土は精良である。表面には丹塗りが施こされている。345・346は脚端部である。345の外面にはへら磨き調整、内面にははけ目調整が施こされている。胎土は精良である。外面には丹塗りが施こされている。346はやや内彎している。脚端部外面に沈線が1条巡る。外面にはへら磨き調整、内面にはなで調整が施こされている。胎土は精良である。外面には丹塗りが施こされている。347は二重口縁の壺である。口縁部はSD04の東側斜面で反転して、脚部はその北0.6mの所で破片で出土した。口縁部は大きく開き、断面三角形の突帯状の段を成して、斜め上方に伸びている。端部は拡張され、断面三角形を呈する。頸部は内傾し、短い。胴部はやや扁平な球形で、最大径は中央より上にある。底部は突出している。口縁部内面にはよこなで調整、胴部内面にはへら削り調整、外面の口縁部から胴部上半にははけ目調整、下半にはへら磨き調整が施こされている。さらに、口縁部と、頸部と胴部の境の外面には施文されている。文様は、口縁部には5条の凸線をもつ下向きの三角形文のスタンプ文、5条の並行する波状文、下向きの三角形文のスタンプ文が2段、頸部と胴部の境には下向きの三角形文のスタンプ文が2段である。文様は左から右へ施文されている。三角形文のスタンプ文の原体は同じものである。胎土には径1~8mmの細謹を少量含む。焼成は良く、外面は淡橙色、内面は暗灰茶色、断面は淡灰茶色を呈する。外面に黒斑をもつ。348は台付楕である。台部は欠損している。外面には成形時の指頭圧痕が残存している。

349は壺の口縁部である。端部は下方へ折り曲げて拡張されている。口縁部にはよこなで調整、胴部外面には粗いはけ目調整、内面には粗いなで調整が施こされている。350は壺の口縁部である。大きく開き、端部は上方に引き上げられている。外面にはよこなで調整、内面には

粗いはけ目調整が施されている。さらに、口縁端部外面には4条の凸線をもつ上向きの三角形文のスタンプ文が施文されている。スタンプ文は左から右へ施文されている。356は壺の底部であろう。底面周囲は高台状にやや突出し、指頭圧痕が残存している。腹部は大きく開き、緩やかに立ち上がる。外面には丁寧なで調整が施されている。内面には圧痕が残存している。357は瓶である。全体に歪みが著しい。底部周囲は高台状に外方に擠み出され、指頭圧痕が残存している。内面にははけ目調整が施されている。外面にはなで調整が施されているが、凹凸が著しい。

354は器台である。SD04の西岸近くで出土した。口径を復元すると46.4cmにもなる。体部はわずかに内彎しながら立ち上がり、口縁部は段を成して大きく開く。端部は面を成し、やや下方に張張されている。脚部も大きく開く様であるが、大半は欠損している。口縁部と体部の境に1条、体部に2条、体部と脚部の境に1条の突帯が貼付けられている。口縁部中間にも断面V字形の突帯を作り出している。体部の突帯は押圧のためか断面四角形を成している。また、貼付け位置も上下している。外面には粗いはけ目調整、口縁部内面と脚部内面には粗いはけ目調整が施されている。体部内面には指頭圧痕、粘土紐痕が残存している。表面調整後、口縁部内面と外面全面にスタンプ文が施文されている。口縁部内面に5条の凸線をもつ上向きの三角形文が2段、口縁部外面に蛇腹状の逆S字形文が2段、突帯上面に5条の突線をもつ上向きの三角形文、側面に同じ三角形文が下向きに、一部は上向きにスタンプ文が施文されている。脚部の突帯間を上から第1～3文様帯とする。第1文様帯には逆S字形文、その間に5条の凸線をもつ上向きの三角形文、同じ下向きの三角形文が2段、突帯の上面と側面に同じ下向きの三角形文のスタンプ文が施文された後、長方形の透し穴が5ヶ所穿かれている。第2文様帯には5条の凸線をもつ上向きの三角形文が2段、逆S字形文が2段、その間に同じ下向きの三角形文、突帶上面と側面に同じ下向きの三角形文のスタンプ文が施文された後、長方形の透し穴が5ヶ所穿かれている。突帯の三角形文の一部には左へ60°回転して施文されたものもある。第3文様帯には逆S字形文が2段、その間に5条の凸線をもつ下向きの三角形文、突帯の上面と側面に同じ下向きの三角形文のスタンプ文が施文された後、凸部をもつ長方形の透し穴が4ヶ所穿かれている。三角形文には左右へ回転して施文されたものもある。三角形文の原体は左右へ回転しているものと、そうでないものとで異なる。口縁部の逆S字形文は、上段と下段で、同じ原体を上下逆に用いて施文されている。逆S字形文の原体は口縁部から第1文様帯までと、第2文様帯から下で異なる。胎土には径0.5～5mmの花崗岩起源の細礫を含む。焼成は良く、外面は淡灰褐色、内面は灰褐色を呈する。外面に黒斑をもつ。

355はSD03から出土した292・293に似る壺形土器である。SD04の北端に近い西岸で出土した。354の出土地点から北へ0.5mの所である。扁平な球形の腹部から内傾しながら頸部が立

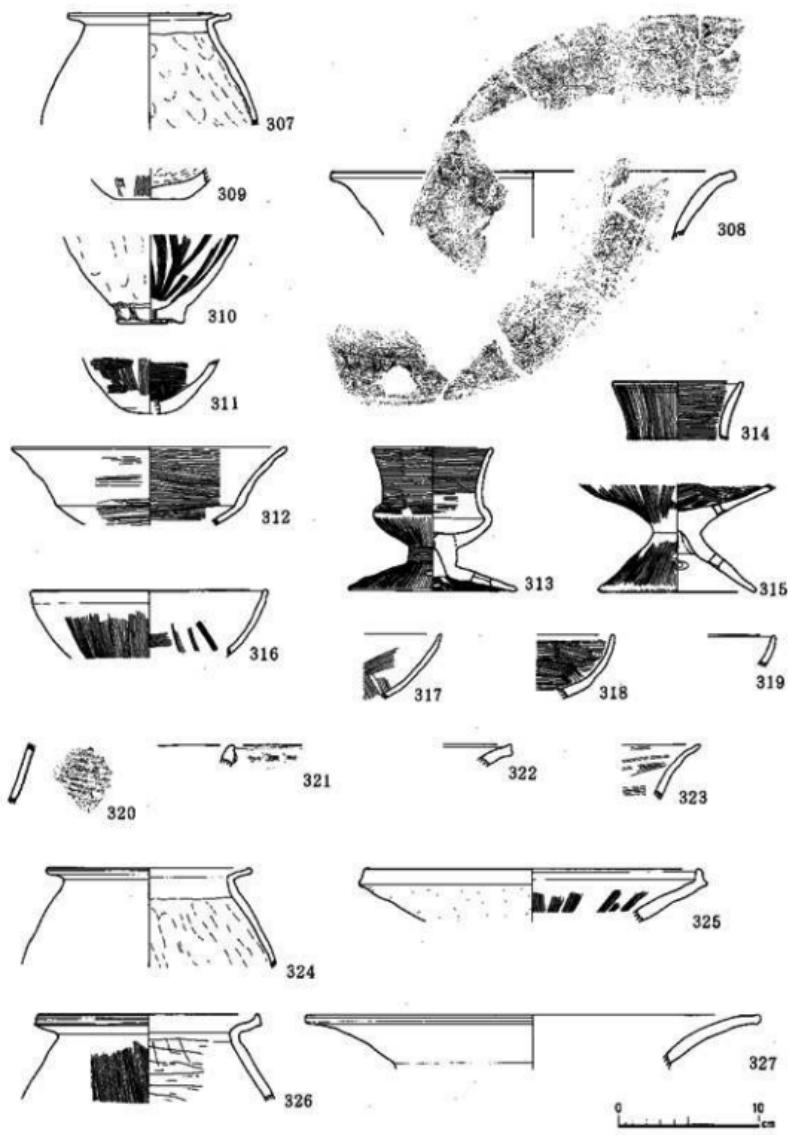


図36 SD04出土遺物実測図 (1)

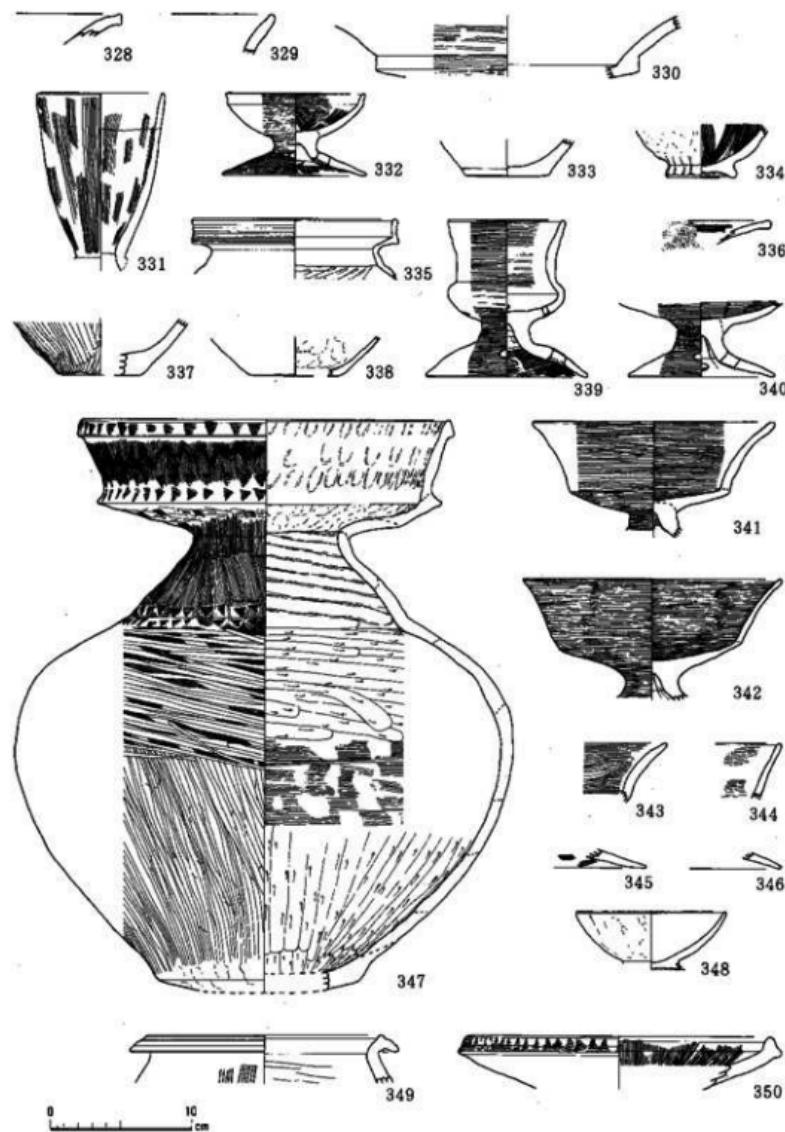


図37 SD04出土遺物実測図 (2)

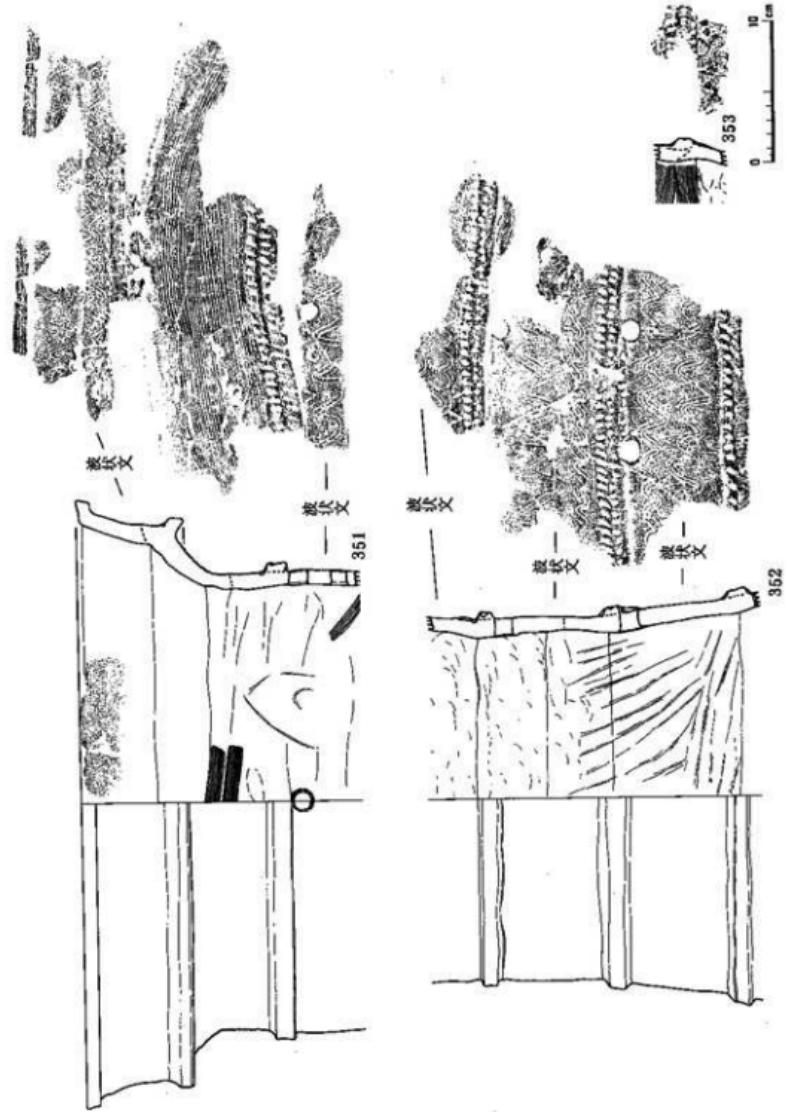


图38 SDO4出土遗物实测图 (3)

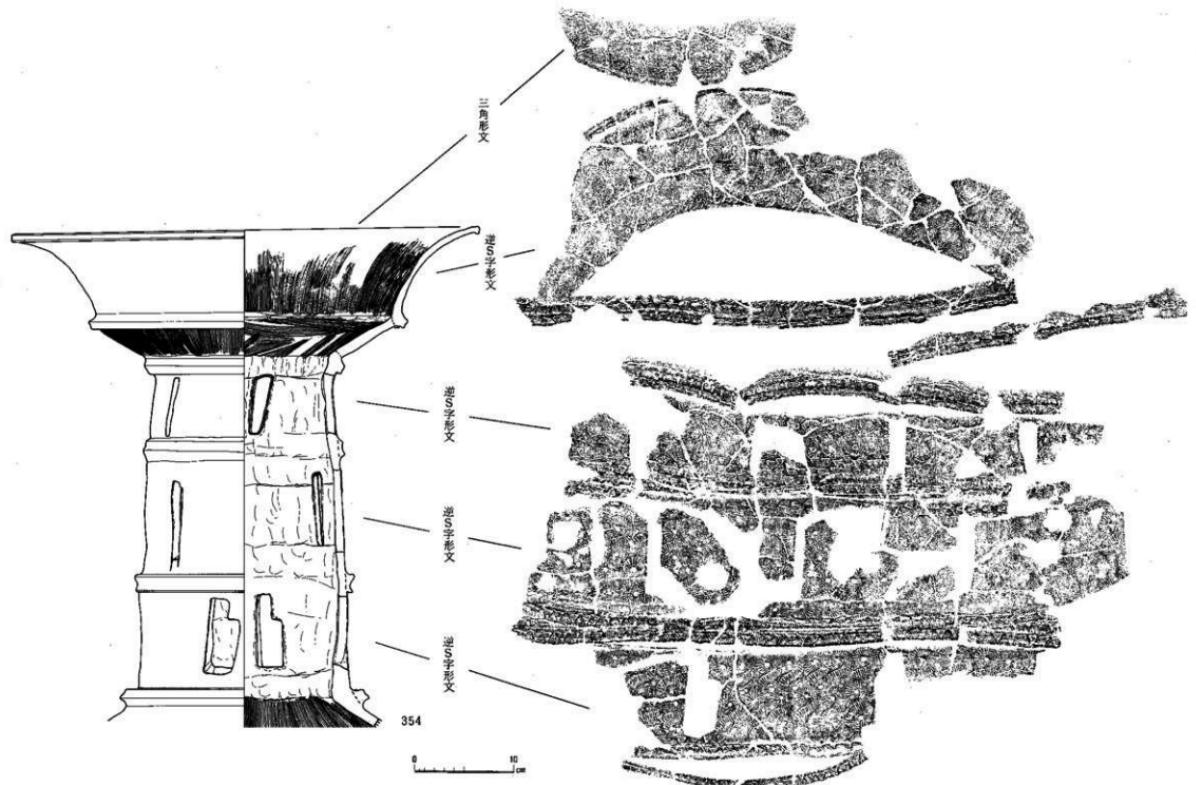


図38 SD04出土遺物実測図 (4)

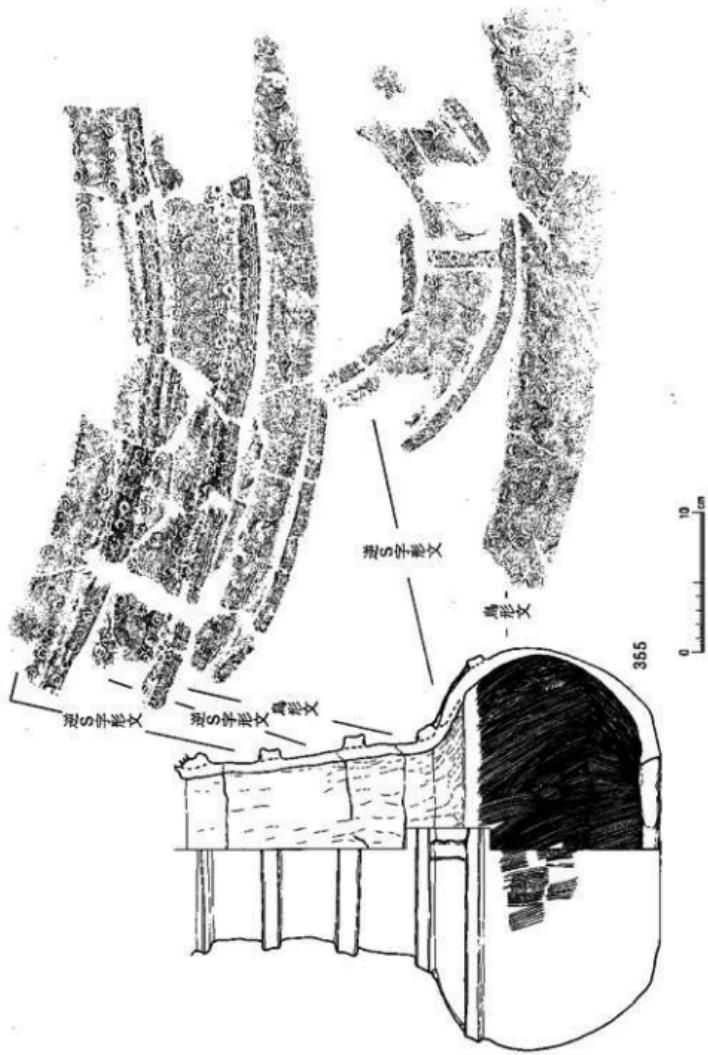


图40 SD04出土遗物复原图 (5)

ち上がり、口縁部は斜め上方に大きく開く。断面台形の突帯が口縁部と頸部の境に1条、頸部に2条、頸部と胸部の境に1条、胸部上半に1条貼付けられている。さらに、頸部最下段の突帯と胸部の突帯をつなぐ縱方向の突帯が、復元すると全体で4ヶ所に貼付けられている。底部は焼成前に径10数cmの円形に外側から割り貫かれている。口縁部にはよこなで調整、胸部外面上半には粗いはけ目調整、下半にはなで調整、内面には粗いはけ目調整が施されている。頸部内面には指頭圧痕、粘土紐痕が残存している。外面の胸部上半から頸部にかけてスタンプ文が施されている。スタンプ文は、上から、竹管文、横方向の蛇腹状の逆S字形文、竹管文、突帯側面に竹管文、また上方と同じく、竹管文、横方向の逆S字形文、竹管文、突帯上面に竹管文、側面に4条の凸線をもつ上向きの三角形文、蛇腹状の胴体をもつ鳥形文、一部に同じ上向きの三角形文、胸部との境の突帯側面に同じ上向きの三角形文、胸部に竹管文、逆S字形文、胸部の突帯側面に同じ上向きの三角形文、さらに突帯から下に鳥形文である。縱方向の突帯上面には竹管文である。竹管文の原体は太いものと細いものの2種類がある。スタンプ文は右から左へ施されている。1つの文様帶の中では、上下の小さなスタンプ文が後に施されている。胎土には径0.5～5mmの花崗岩起源の細礫を含む。焼成は良く、外面は灰褐色～淡灰褐色、内面は淡灰茶色、断面は淡黄灰色を呈する。胸部外面に黒斑が見られる。

SD04の最下層からは弥生土器が出土した。

358～361は壺の口縁部である。358の口縁端部はT字形に上下に拡張され、端面には3条の凹線文が施されている。口縁部にはよこなで調整、胸部内面にはへら削り調整が施されている。359の口縁端部はわずかに拡張され、面を成す。よこなで調整が施されている。360は大きく外反する口縁部である。よこなで調整の押圧のためか、端部はわずかに拡張され、面を成す。361の口縁部は胸部から屈曲して開き、端部はわずかに外反しながら、上方に引き上げられている。下端は突出している。口縁端部外面には5条の凹線文が施されている。362は杯である。底部はやや上げ底で、体部は内彎しながら立ち上がる。外面にははけ目調整、内面にはなで調整が施されているが、内面には指頭圧痕が残存している。胎土は細かい。363は高杯の杯部である。外反する口縁部である。内外面ともへら磨き調整が施されている。胎土は精良である。表面には丹塗りが施されている。364は脚部である。やや内彎しながら立ち上がる。透し穴が重なって穿孔されているため、8の字状を呈している。内外面とも粗いはけ目調整が施されている。胎土は精良である。365は小型の台付直口壺である。浅い扁平な腹部からやや外反しながら立ち上がる口縁部をもつ。脚柱部は極めて短い。脚台部は内彎しながら立ち上がる。腹部内面に道具痕が残存している。脚部下間に2ヶ所焼成後に穿孔されている。脚端部外面に1条の沈線が巡る。口縁部にはよこなで調整、胸部内面にはなで調整、外画にはへら磨き調整、脚台部内面には粗いはけ目調整が施されている。胎土は精良である。

焼成はやや悪い。外面には丹塗りが施こされている。366は脚部である。わずかに外反しながら立ち上がる。端部外面に1条の沈線が施こされている。外面にはへら磨き調整、内面にはなで調整が施こされている。胎土は精良である。外面には丹塗りが施こされている。

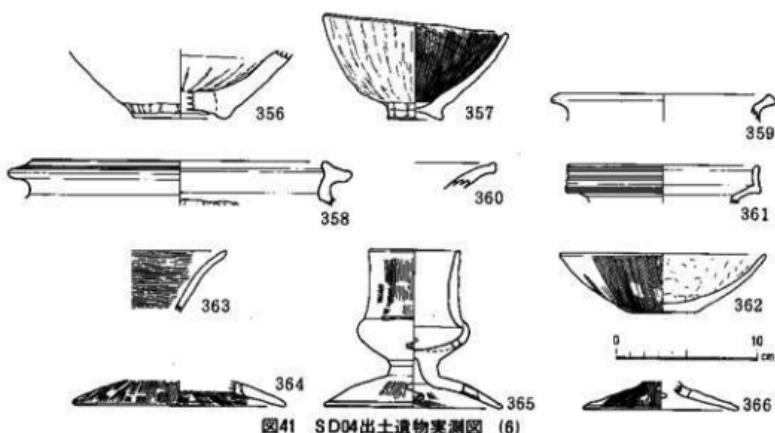


図41 SD04出土物実測図 (6)

SD 05はSD04と切り合い、SD03と平行して南東へ流れ、南西へ向きを変え調査地外へ至る流路である。土壠断面の観察等から、当初の流路が埋没した後、北東側に新しい流路が形成されていた様である。埴土からは绳文土器、弥生土器が少量出土した。367は壺、または甕の口縁部である。端部は上下に拡張され、面を成している。口縁部端面には4条の凹線文が施こされている。368は甕の底部である。底面はやや上げ底である。腹部の立ち上がりは急である。器壁は厚手である。外面にはへら磨き調整、内面には粗いはけ目調整後なで調整、底面にはなで調整が施こされている。

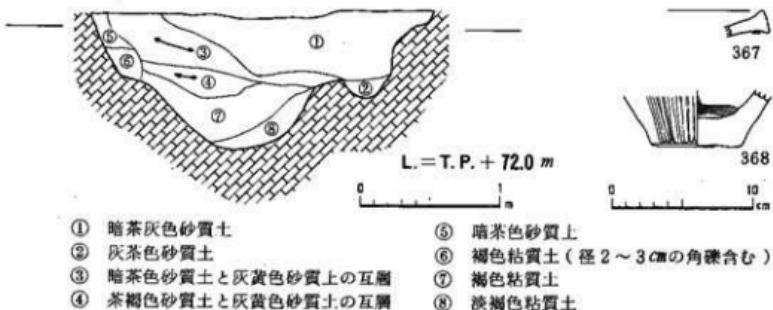


図42 SD05土層断面図 出土遺物実測図

SD 06は調査地外の南東からの流路が、調査地南東辺に沿って南西へ向きを変え、さらに、南東へ向きを変えて調査地外へ至るものである。南東側にSD06に平行する北東への流路や、南西からの合流する流路を検出したが、切り合いは観察出来なかった。埋土からは縄文土器、弥生土器が出土した。369は壺の口縁部である。端部は逆L字形に屈曲している。口縁部下に残存部で8条のへら描き沈線文が施こされている。よこなで調整が施こされている。内面には指頭圧痕が残存している。胎土には径0.5~8mmの花崗岩起礫の細礫を含む。370は壺の上半である。口縁端部はわずかに上方に拡張され、面を成している。肩部のくびれ部に凹線状のものが2条施こされている。口縁部にはよこなで調整、胴部外面上半には粗いはけ目調整、中間にはなで調整、下半にはへら磨き調整、胴部内面上半にははけ目調整、下半にはへら削り調整が施こされている。さらに、へら状工具によって、口縁端面に刻み目、胸部中央に刺突文が施こされている。胎土には砂粒を少量含む。371・372は壺の底部である。371の底面は外方へ揃ま

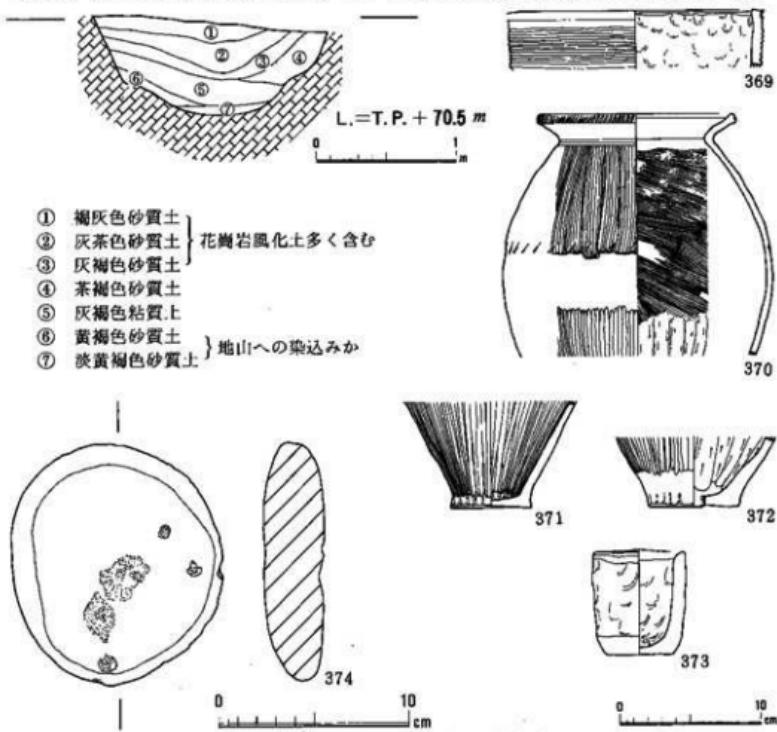


図43 SD06土層断面図 出土遺物実測図

み出す様にして形成され、指頭圧痕が残存している。底面は上げ底である。脛部の立ち上がりは急である。内外面ともへら磨き調整が施されている。372の底部もわずかに外方へ張り、指頭圧痕が残存している。底面は上げ底である。外面にはへら磨き調整、内面にはへら削り調整が施されている。373は手づくねのコップ状土器である。平底の底部から体部が真直ぐに立ち上がる。口縁端部には粘土が継ぎ足され、わずかに外反している。体部内外面にはなで調整が施されているが、全面に指頭圧痕が残存し、歪みが著しい。胎土には径1~2mmの長石粒を極少量含む。焼成は良い。

374は砂岩製の叩石である。周縁に打撲痕が認められる。703#を調る。

出土遺物からSD01~06の時期を考えてみたい。

様々な遺物が出土しているが、最下層から出土したものを基にすると、SD01~04は弥生時代後期末に掘削され、あまり時を置かずして、ほぼ埋没したようである。しかし、しばらくは、座地の様な状態であったため、新しい時期の遺物が混入したのであろう。

SD05は弥生時代後期前半、SD06は弥生時代中期中葉に位置付けられよう。

※ 繩文土器については平井 勝氏（岡山県古代吉備文化財センター）からご教示を頂いた。



# IV まとめ

## 1 遺構について

前章までに検出した遺構、遺物について報告し、その年代を位置付けて来た。ここでそれをまとめてみたい。

### 弥生時代中期前葉以前

縄文時代早・前・晩期を始め、各時期の遺物の出土を見ているが、何れも小片が1~2点出土しているのみである。この時期には調査地では人々の生活は営まれていなかったのであろう。

縄文時代早期末に位置付けられる、いわゆる織錦土器はSB01に伴う柱穴SP29から出土した169以外に、図示していないが、第2層からも1点出土している。この2点をもって、平岡西遺跡の歴史を縄文時代早期にまで溯らせるのは早計に過ぎようが、今後の新たな調査に期待が寄せられる。

### 弥生時代中期中葉

SD06が調査地南東部の一角を横切って流れていた時代。

### 弥生時代中期後葉～後期前葉

SB01が調査地中央に建てられていた時代。SB01は火災に遭う等して、3回疊替えられている。

### 弥生時代後期前半

SD05が調査地の南西を流れていた時代。

### 弥生時代後期後半

SB01廃絶後の産み、SK07に土砂と土器が堆積していた時代。

### 弥生時代後期末

SD01~04が調査地西半に形成されていた時代。

### 6世紀前葉以前

SB02が調査地北東角に建てられていた時代。SB02は火災に遭って廃絶している。

### 13世紀以前

調査地全面にピット等が形成されていた時代。SD01~03は、かなり埋没しながらも、この時期まで存続している。

検出された流路のうち、特に遺物の出土量が多かったのはSD03・04である。また、スタン

文をもつ土器等、特異な土器の出土も多かった。

SD03・04は平面L字形の流路である。検出面が傾斜していることを考慮すると、SD03が今以上に伸びていた可能性は否定出来ない。SD03の南東端を見てみると、わずかに南西へ振れている。SD03がさらに南西方向へ延び、SD04と併せて、コの字形の流路を形成していたのであろうか。SD03・04の底面は、その境付近で約0.7m下がる他はほぼ水平である。また、土器の出土位置を見てみると、埋上の中間が最も多い。流路が埋没するにつれて、土器も埋没していったのではなく、ある程度埋没してから、多量の土器が流れ込んで来たことになる。土器に磨滅が少ないとから、近隣より流入して来たのであろう。

#### SD03・04が完全な方形区画

を成していたか、否やかは、南西辺部分が削平されていたため不明である。しかし、東西方向で約9mの方形の部分が区画されることになる。ここで、敢えて、SD03・04を方形区画溝、区画された部分を方形区画と呼称することにする。方形区画内



図44 SD 03・04模式図

では、古い時期の流路、SD05が検出されたのみである。方形区画溝からは、再三述べている様に、スタンプ文等で加飾された土器、あるいは、杯部に穿孔された高杯、脚部に穿孔された壺が出土している。惜しまらくは、調査時に時間に追われ、これらの土器の埋没状況を十分に検討せずに取り上げてしまったことである。

これらの遺構の性格として考えられるのは、墓、あるいは祭場が挙げられるのではないだろうか。

まず墓であるが、主体部が存在しないため明確ではないが、方形区画はある程度の高さをもち、その上面に供獻されていたものが、削平、崩壊に伴って方形区画溝内へ流入したと想定出来るよう。

祭場であれば、注目されるのが、SD04の北端付近西岸で検出された階段状の平坦面と、底面の花崗岩である。花崗岩は大半は地山内に埋没していたが、SD04の底面へ現われていた部分は平坦であった。人為的に埋設された様な痕跡は見られなかった。いきさか想像が過ぎるかもしれないが、この部分が祭場で、供獻された土器は下流のSD03へ流される。やがてSD03が埋没して来ると、土器はSD04に堆積し、埋没したと想定出来るよう。

## 2 スタンプ文について

スタンプ文には鳥形文、逆S字形文、三角形文、竹管文がある。スタンプ文原体の土器への施文角度、上器の焼成時の収縮等、難しい条件はあるが、これらのスタンプ文を比較、検討してみたい。

鳥形文をもつのは 292・355 の壺形土器である。各々の上器の上下の鳥形文は同一であるが、292と355の鳥形文は細部がわずかに異なり、2種類の原体が使用されたと考えられる。

逆S字形文をもつのは13の胸部、292・293・294・355 の壺形土器、308の口縁部、354の器台である。これらのうち、292・293の逆S字形文は同一である。明確ではないが、294と355も同一の様である。これら以外の逆S字形文は各個体ごとに異なる。また、354の逆S字形文は、同一個体内で上方のものと下方のものが異なっている。従って、6種類の原体が使用されたと考えられる。

三角形文は内部の凸線が4条のものと5条のものに大別出来る。4条のものは293・347・350・355に、5条のものは13・212・308・347・354に見られる。355には大小2種類の三角形文が見られる。308・354には4条のものと5条のものが見られる。また、凸線と交差する細い凸線をもつものもある。そのため4条のもので5種類、5条のもので5種類の原体が使用されたと考えられる。三角形文はほとんど各個体ごとに、同一個体でも上下で異なり、種類が多い。

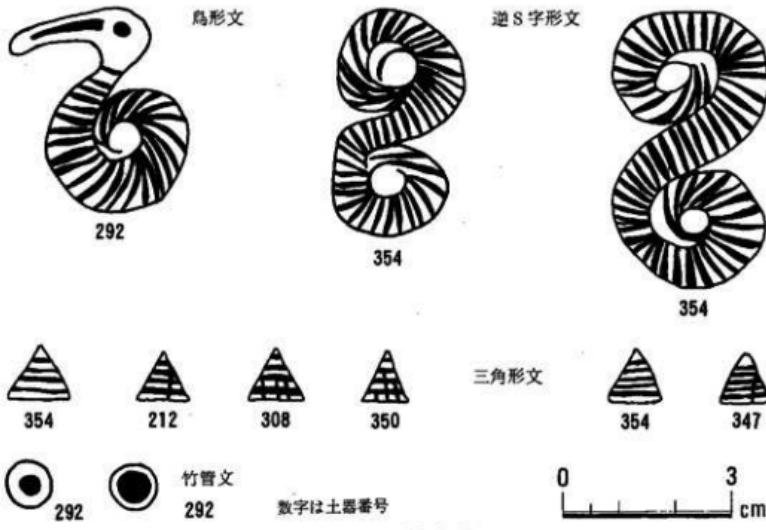
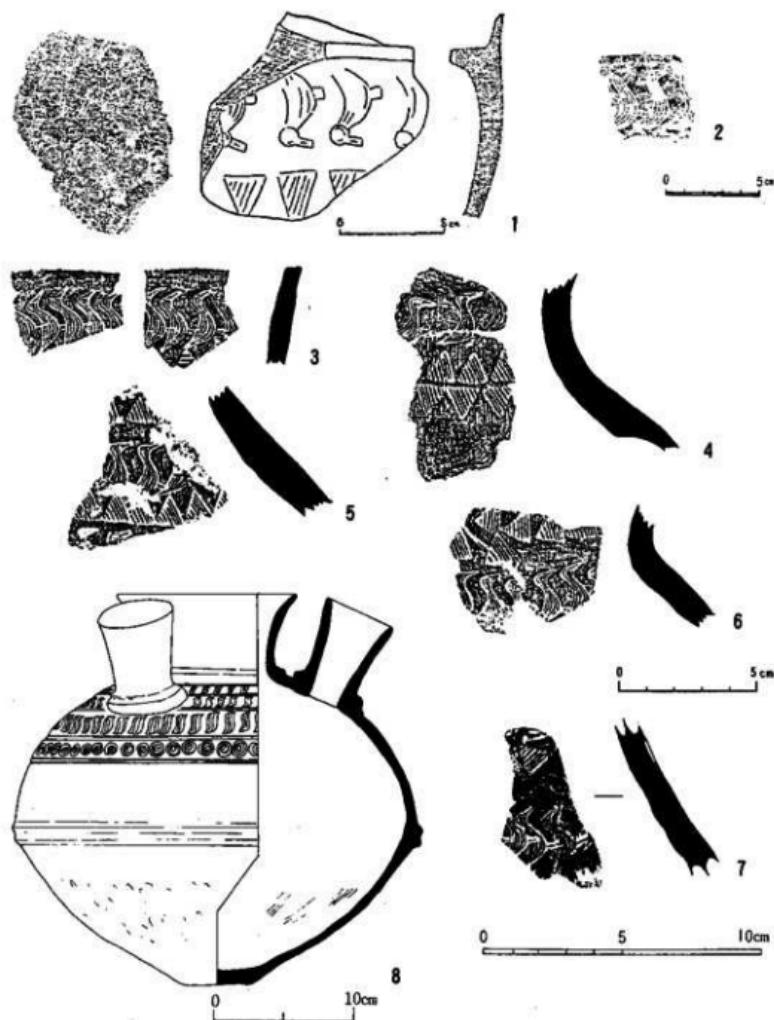


図45 スタンプ文模式図



- 1 三明寺遺跡 採集(①より)  
 2 下市瀬遺跡 D調査区(②より)  
 3~6 中峯遺跡 採集(③より)  
 7 中峯遺跡 調査地区西側採集(④より)  
 8 大城遺跡(⑤より)

図46 鳥形スタンプ文集成図

竹管文は特徴が少ないため、分類は困難である。線が太いものと、細いものの2種類があることだけを挙げておく。

この様に鳥形文の原体が2種類あることを始め、他のスタンプ文も多く種類をもつことから、スタンプ文で加飾された土器を製作した工人は複数人、あるいは複数集団が存在していたとは言えないだろうか。

鳥形スタンプ文をもつ土器は管見の限りでは、岡山県で平岡西遺跡、三明寺遺跡、下市瀬遺跡<sup>(1)</sup>、鳥取県で中峯遺跡、鳥根県で大城遺跡から出土している。三明寺遺跡、下市瀬遺跡、中峯遺跡の鳥形文は、その形、表現法等良く似ている。これらに対し、平岡西遺跡例は鳥を表わしてはいるが、円形の胴体、長いくちばしと特異である。胴体の表現は逆S字形文に見られる様に平岡西遺跡特有のものであるとすると、この鳥形文のモデルとなった鳥の特長は長いくちばしをもつことではないだろうか。弥生人の残した銅鐸絵画の鳥はサギ類であるという研究成果

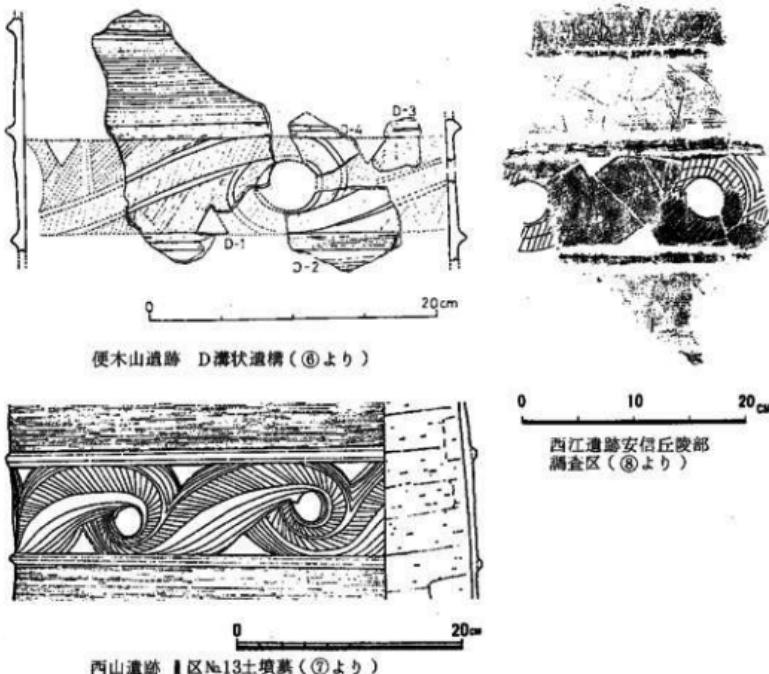


図47 特殊器台形土器文様図

が発表されている。サギは水鳥で長いくらばしをもつ。平岡西遺跡の鳥形文も、周囲の水田に飛来するサギを元にしたものなのだろうか。

逆S字形文について見てみると、S字状文、渦巻文等と言われるスタンプ文、施文は特殊な文様であろうが、その出土例は枚挙にいとまが無いほど報告されている。それらのS字状文、渦巻文等の内部は、外縁に並行する線で埋められている。しかし、平岡西遺跡例では、『蛇腹状』と表現した様に、外縁に直交する線で埋められている。既報のS字状文、渦巻文等とは系譜を異にする様である。ところで、土器の表面に残されたスタンプ文は、原体の文様とは逆転していることになる。平岡西遺跡例の逆S字形文を逆転してみると、S字形文になる。岡山県南部において、S字形文をもつ遺物としては、まず、特殊器台形土器が挙げられよう。特殊器台形土器の表面に施された文様を検討していくと、便木山遺跡、西山遺跡、西江遺跡例に、平岡西遺跡の逆S字形文と比較的似たものが見られる。**292・293・355**の壺形土器、**354**の器台の器形を併せ考えると、これらは、曖昧な記憶を基に、稚拙な技術で、身近な材料を用いて、特殊壺形土器、特殊器台形土器を再現したものなのだろうか。

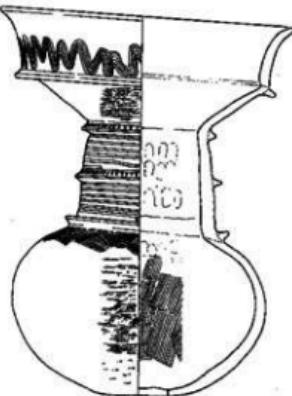
(10) 赤磐郡吉井町は里において特異な壺形土器の出土が報告されている。その形状は**292・293・355**の壺形土器に非常に良く似ている。幸いに口縁部まで完全に復元されている。恐らく、平岡西遺跡例においても口縁部はこの様になるのであろう。また、加筋は少ないが、口縁部の波状文、突帯上の刺突文等、壺形土器だけでなく平岡西遺跡出土の他の土器にも一脈相通するものがある。

### 3 土器絵面について

SD03から出土した直口壺、**285**の口縁部に描かれた絵画について検討してみたい。

この絵画の特長として挙げられるのは、上部の魚の背ビレ状の部分と、右端の複雑な組み合わせの部分であろう。図48 塚風呂遺跡出土壺形土器  
蛇行する数条の線は蛇の様なものの胴体を表わしていると  
(11) 収れなくもない。しかし、蛇、または龍の絵画とされている出土例と今回の絵画を比べると著しく異なる。むしろ、前節の特殊器台形土器の連続S字状文の1単位を取り出した形に近い。連続S字状文であるならば、全面に進るのであるが、この絵画ではほぼ半分にしか描かれていない。この土器を用いる時に正面になる部分にだけ絵画を刻み込んだのであろうか。

この絵画については、曖昧な記憶を基に描かれた弧帶文、あるいは龍から変化したものとい



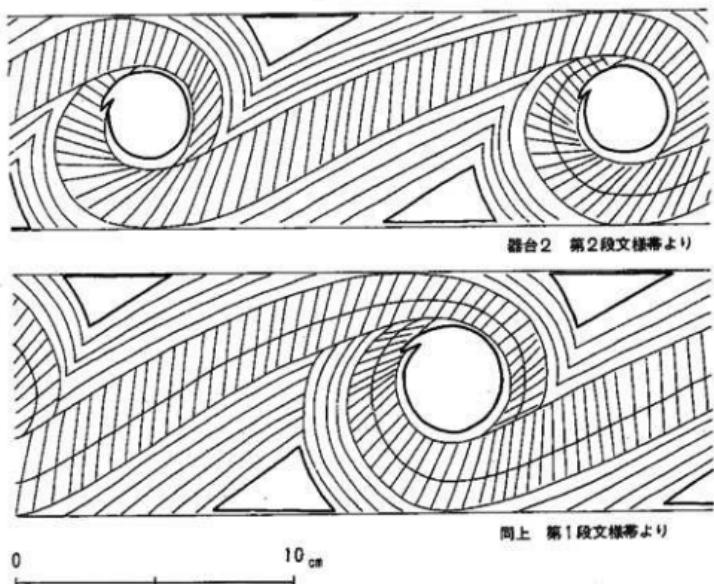


図49 西江遺跡出土特殊器台形土器文様展開図(⑧より)

う2つの可能性が考えられよう。

以上の様に、方形区画溝からは特殊壺形土器、特殊器台形土器を模したであろう土器や、特殊器台形土器に見られる連続S字状文を模したとも思われる文様が描かれた土器が出土している。<sup>(12)</sup> 特殊壺形土器、特殊器台形土器は葬送祭祀に用いられたとされているものである。方形区画、方形区画溝も単なる祭祀のためのものではなく、葬送に伴う祭祀のためのものの可能性が強くはないだろうか。

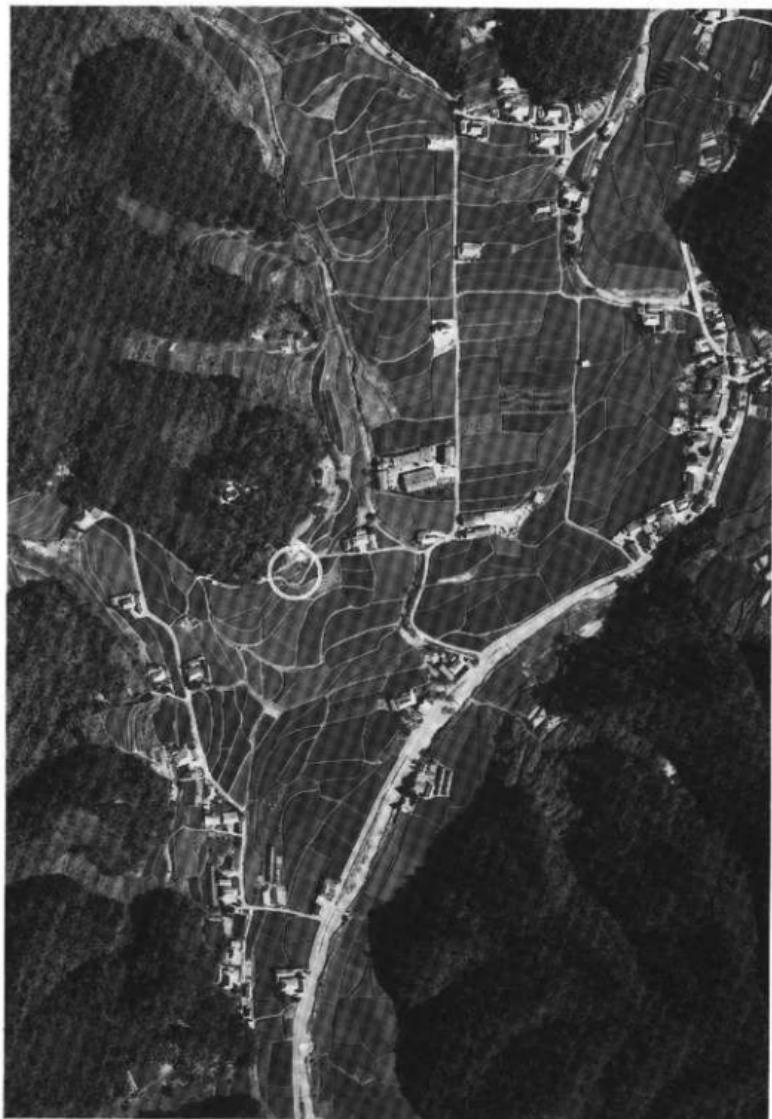
弧文帯の様に絡み合った文様を解きほぐすにあたり、山上 弘・吉村 健（大阪府立弥生文化博物館）、河本 清・江見正己・宇垣匡雅（岡山県古代吉備文化財センター）、土井基司・松本武彦・山本悦世（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）、中西靖人（財团法人大阪文化財センター）、清水 篤（農中市教育委員会）の各位からご教示を頂いた。厚く御礼申し上げます。

## 註

- (1) 御船恭平「岡山縣三明寺の押型文彫生式土器について」『古代学研究第6号』古代学研究会(1952)
- (2) 新東晃一・田仲満雄「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3)中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』岡山教育委員会(1973)
- (3) 名越勉・甲斐忠彦「スタンプ施文土器の新例」『考古学雑誌第58巻第4号』日本考古学会(1973)
- (4) 倉吉市教育委員会『中峯遺跡発掘調査概報』(1975)
- (5) 勝部昭「出雲・穩波発見の青銅器」『古文化談叢第8集』九州古文化研究会(1981)
- (6) 根木修「銅鐸絵画に登場する長頸・長脚鳥」『考古学研究第38巻第3号』考古学研究会(1991)
- (7) 神原英朗「便木山遺跡発掘調査報告」『岡山県笠山駒新住宅市街地開発事業用地内塊藏文化財発掘調査概報(2)』山陽団地埋蔵文化財発掘調査團(1971)
- (8) 大木建設㈱新王子町地文化財発掘調査委員会『西山遺跡』真備町教育委員会(1979)
- (9) 田仲満雄・正岡聰夫・二宮治夫「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(20)中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査10』岡山県教育委員会(1977)
- (10) 伊藤晃「是里・塚畠呂遺跡」『吉井町史第2巻 史料編上』吉井町(1991)
- (11) 横本裕行「弥生時代の絵物語」『古代史復元5 弥生人の造形』講談社(1989)
- (12) 近藤義郎・春成秀麗「埴輪の起源」『考古学研究第13巻第3号』考古学研究会(1967)  
宇垣匠雅「特殊器合形土器・特殊変形土器に関する型式学的研究」『考古学研究第27巻第4号』考古学研究会(1981)  
宇垣匠雅「特殊器合形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究第31巻第3号』考古学研究会(1984)

## 図出展

- ① 註(1)と同じ
- ② 註(2)と同じ
- ③ 註(3)と同じ
- ④ 註(4)と同じ
- ⑤ 註(5)と同じ
- ⑥ 註(7)と同じ
- ⑦ 註(8)と同じ
- ⑧ 註(9)と同じ
- ⑨ 註(10)と同じ



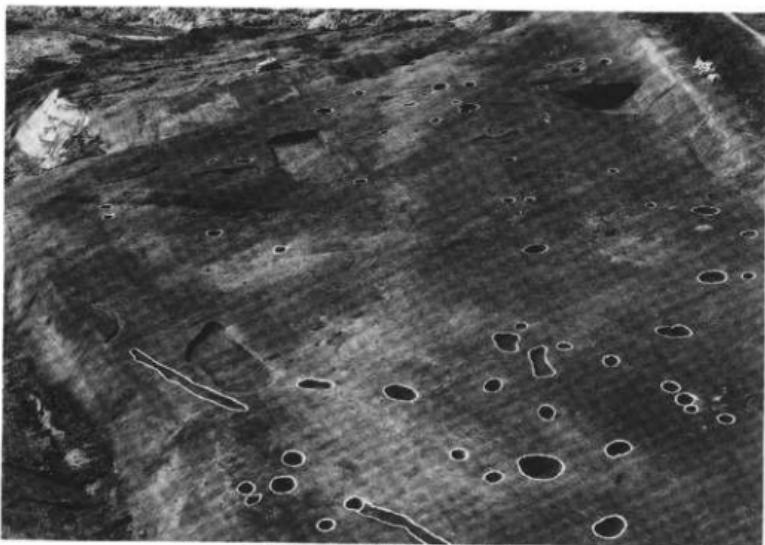
図版1 平岡西遺跡周辺（1980年9月撮影 上が北）御塗町役場産業課提供



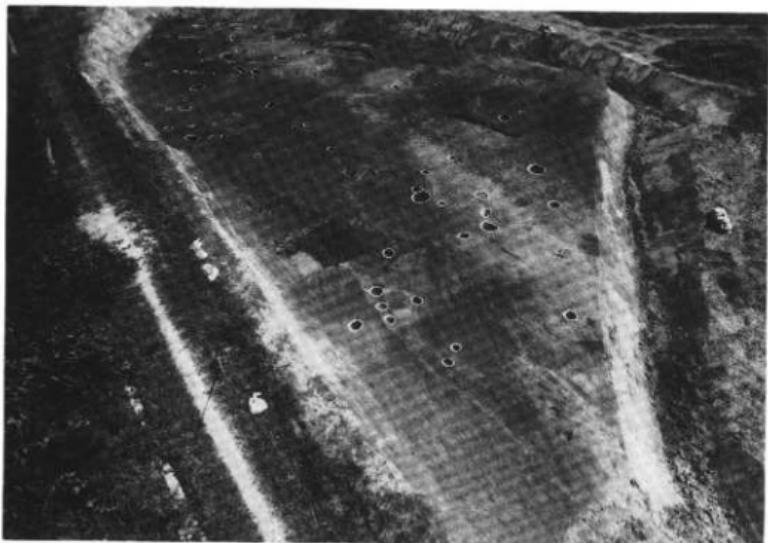
図版 2 調査地遠景（南西から）



図版 3 調査地近景（南から）



図版4 第1造構面（北東から）



図版5 第1造構面（西から）



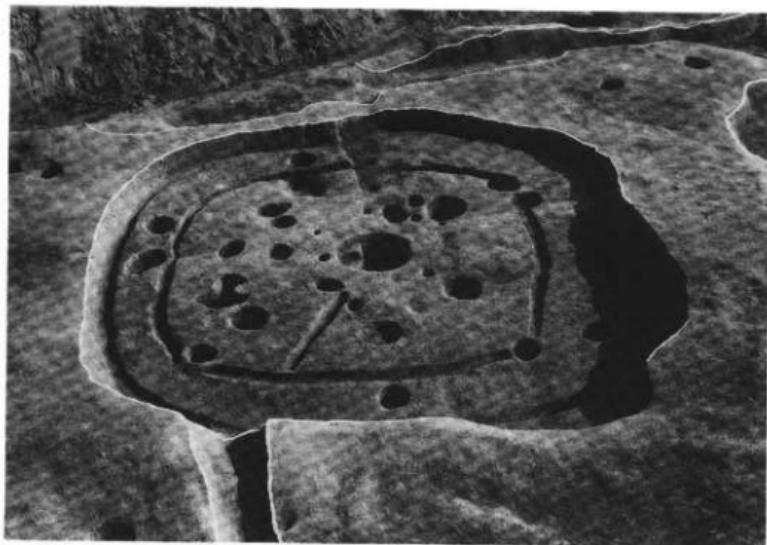
図版 6 第2遺構面（北東から）



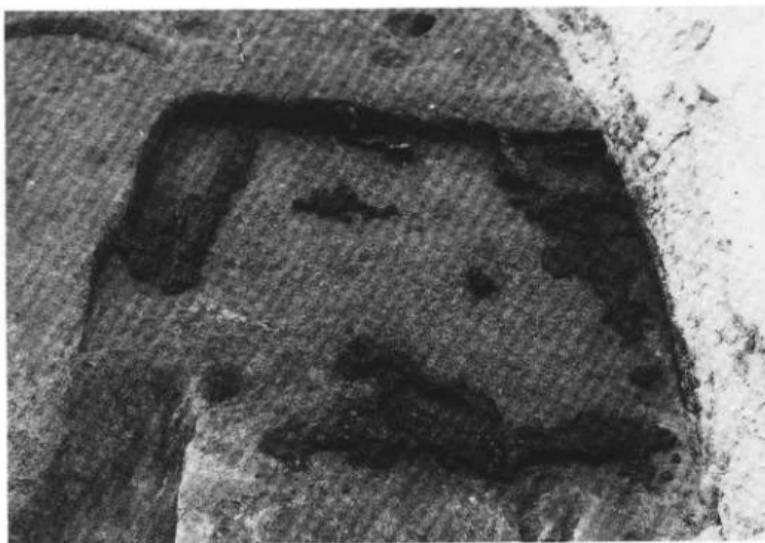
図版 7 第2遺構面（西から）



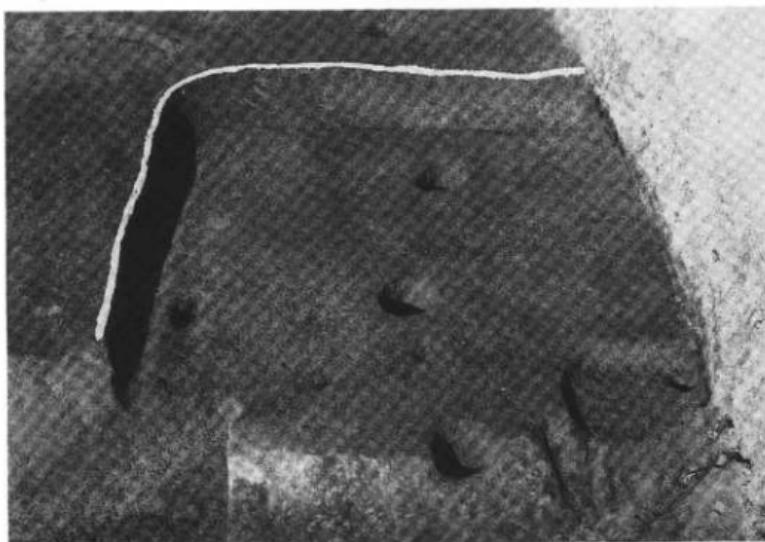
図版 8 SK07遺物出土状況（東から）



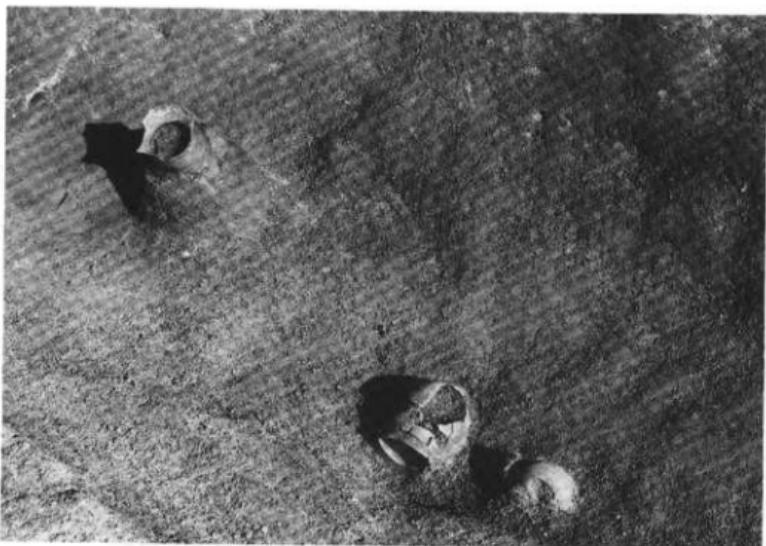
図版 9 SB01発掘状況（北から）



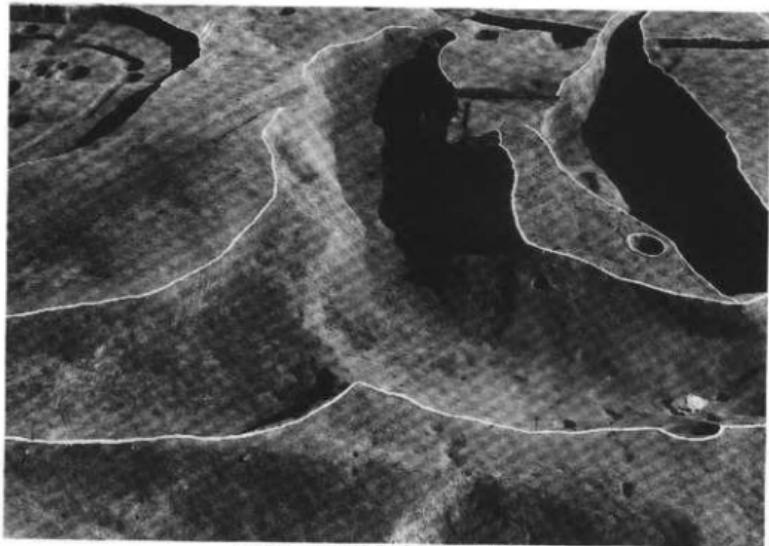
図版10 SB02炭化材検出状況（南東から）



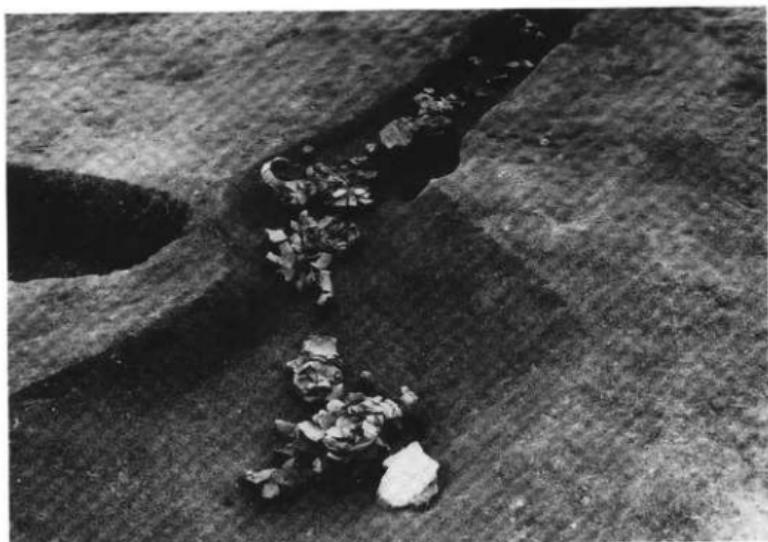
図版11 SB02完掘状況（南東から）



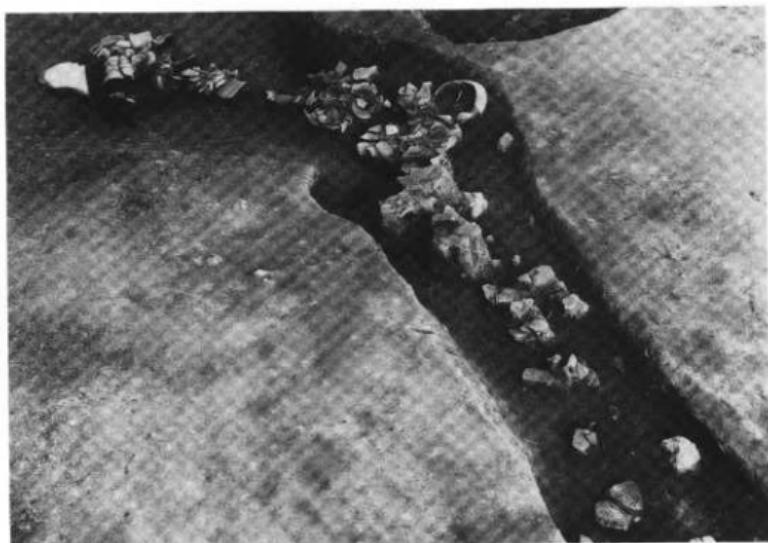
図版12 SD03遺物出土状況（南から）



図版13 SD03発掘状況（北西から）



図版14 SD04遺物出土状況（北東から）



図版15 SD04遺物出土状況（西から）



図版16 SD04遺物出土状況（北から）



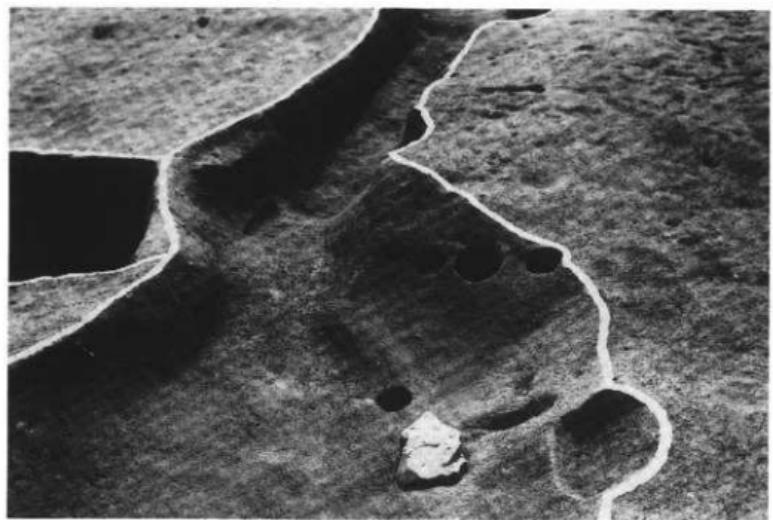
図版17 SD04遺物出土状況（西から）



図版18 SD04遺物出土状況（東から）



図版19 SD04遺物出土状況（南から）



図版20 SD04発掘状況（北東から）



10



13



93外面



93内面



94



96

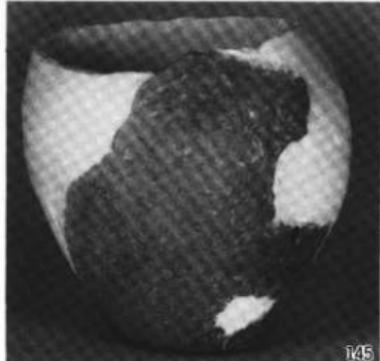
図版21 出土遺物 (1)



97



103



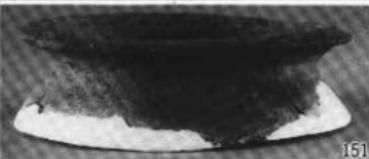
145



148



149

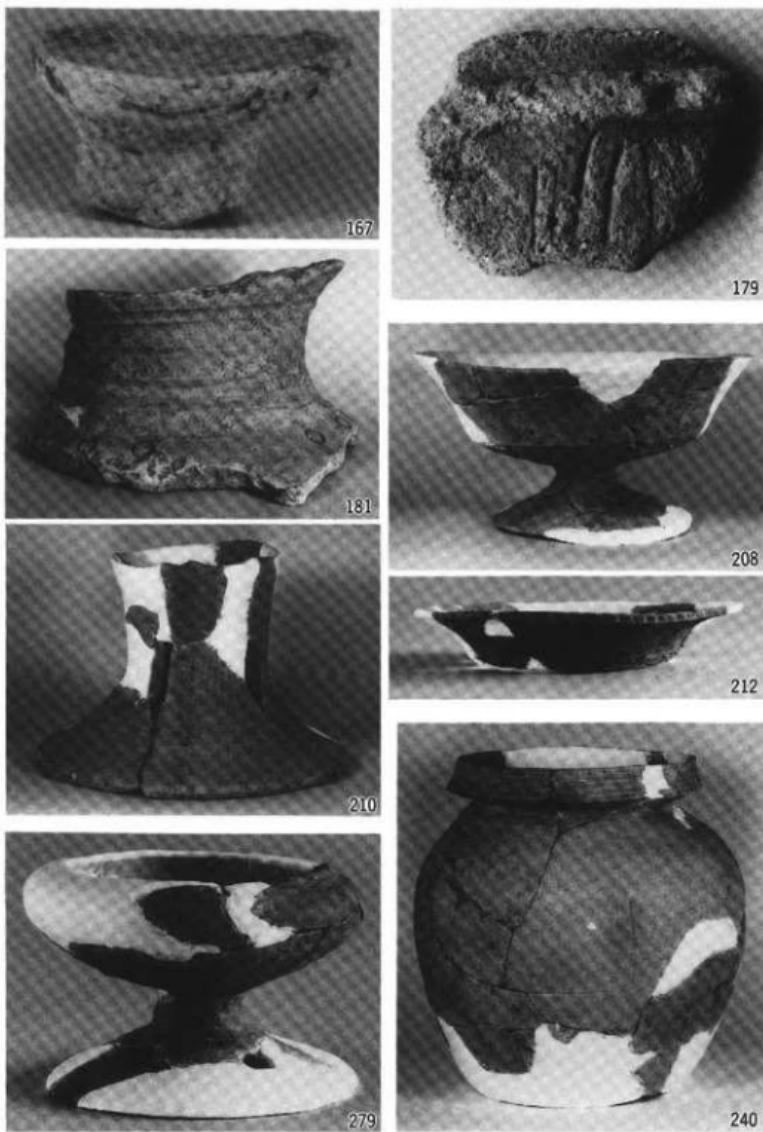


151

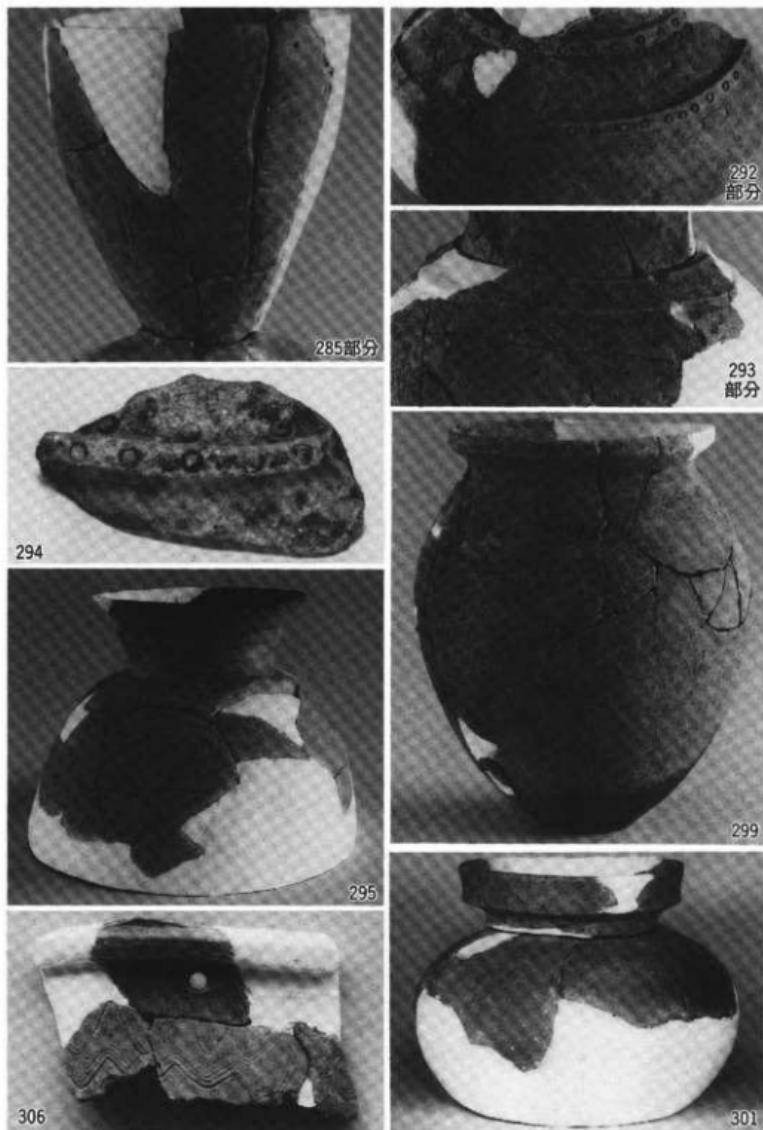


161

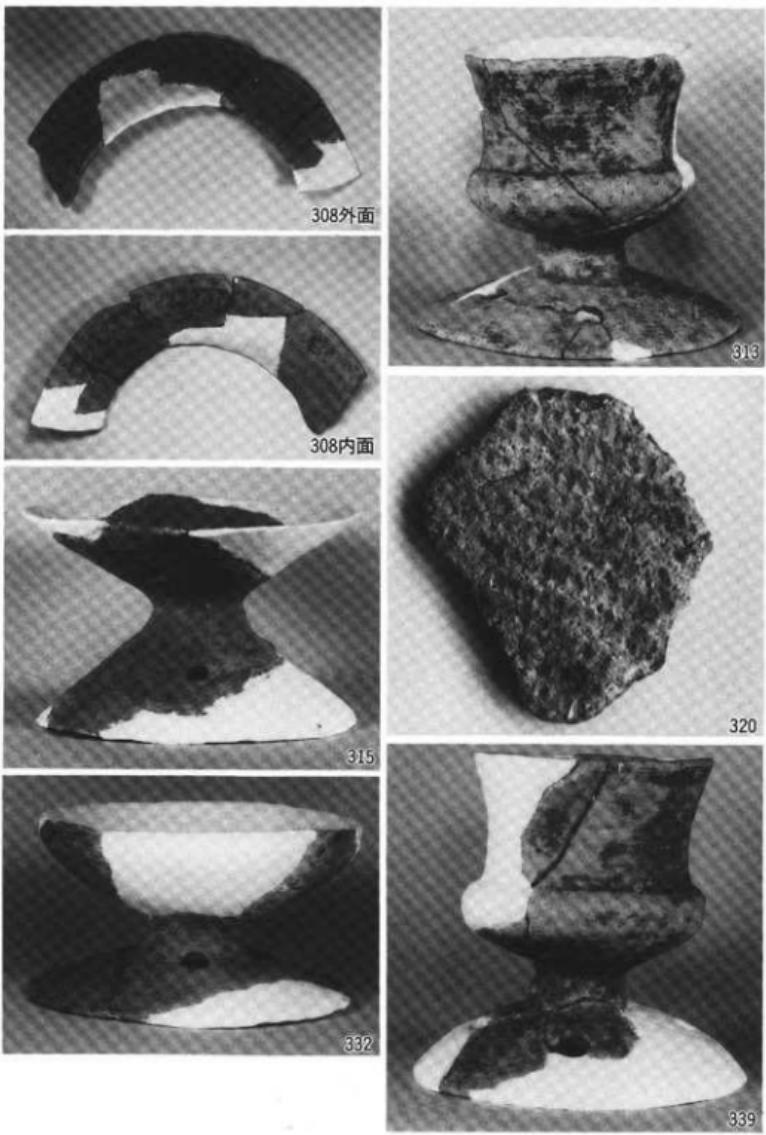
図版22 出土遺物 (2)



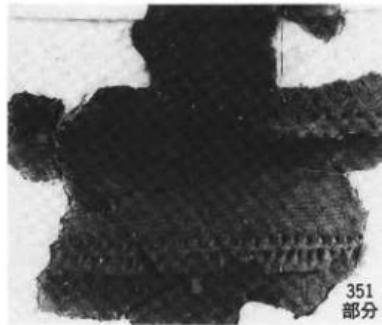
図版23 出土遺物(3)



國版24 出土遺物 (4)



圖版25 出土遺物(5)



351  
部分



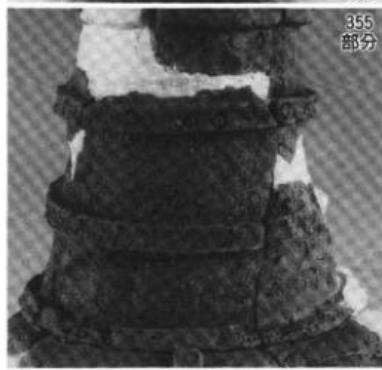
352



353



354  
部分

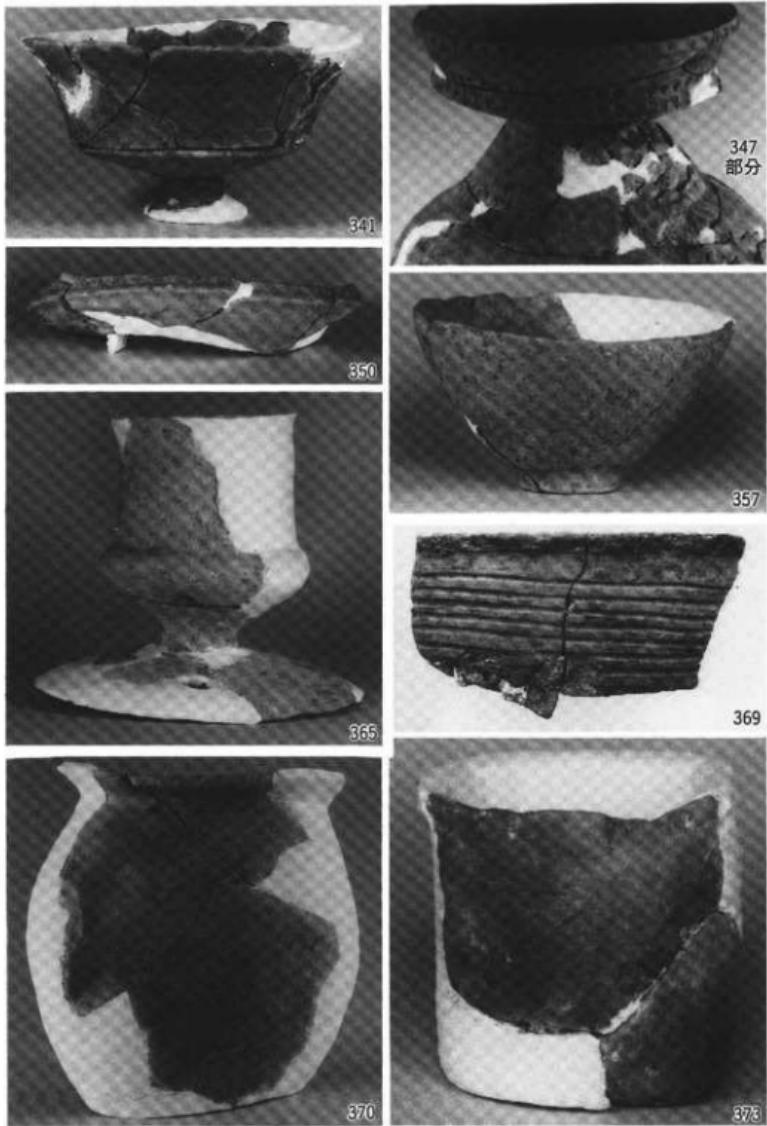


355  
部分



354  
部分

图版26 出土遗物 (6)



図版27 出土遺物 (7)